

日本ペルー交流年における 文化遺産保護に係るシンポジウム等 実施委託業務報告書

令和 2 年 3 月



大学共同利用機関法人人間文化研究機構



国立民族学博物館

日本ペルー交流年における文化遺産保護に係る シンポジウム等実施委託業務報告書

令和 2 年 3 月

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館

目 次

I. 事業の概要

1. 事業の目的	7
2. 事業の背景	7
3. 事業内容	8

II. 実施概要

1	シンポジウム 『文化遺産研究と実践の最前線』	13
2	展示 『カハマルカにおける日本調査団——40年におよぶ考古学調査』	43
3	シンポジウム 『過去と現在の狭間で——ペルー北高地・北海岸の文化遺産の研究と保護』	51
4	シンポジウム 『アンデス南部高地における日本人による人類学研究の50年 ——軌跡、民族誌、文化的再評価』	73
5	シンポジウム 『ペルーの文化遺産保護の最前線 ——アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのミイラ』	85
6	シンポジウム 『ペルー南海岸・南高地における考古学と文化遺産』	101

I. 事業の概要

1. 事業の目的

2019 年は、日本およびペルー両国が「日本ペルー交流年（ペルー日本人移住 120 周年）」と定めた記念すべき年である。本事業の目的は、この交流年に合わせて、過去 60 年以上にわたり考古学調査を実施し、現地研究者、ならびに日系人を含む地域住民と交流を続け、さらには対象となる文化遺産の保存と活用に取り組んできた日本調査団の足跡に関するシンポジウムや展示を実施すること、さらにはその後加わる民族学研究についても同様のシンポジウム等を開催することを通じて、日本、ペルー両国の文化交流を促進させることにある。

2. 事業の背景

南米初の日本人移住者を乗せた佐倉丸が、ペルーのカヤオ港に到着したのは、今から 120 年ほど前の 1899 年 4 月 3 日であった。790 名の乗船者を待ち受けていたのは、農場主との契約に基づく過酷な労働環境であり、移住者の 2 割近くが 1 年を待たずして命を失った。入植後も、太平洋戦争期には敵国民として財産の没収と強制収容という苦難を経験してきた。しかし、持ち前の勤勉さを決して失わない姿勢は、次第に現地社会の信頼を勝ち取り、現在では、日系人は、ペルー社会の発展において欠かすことのできない存在となっている。こうした両国の関係の中で、移住者、やがては日系人として呼ばれるようになる人々とともに、日系人以外のペルー人社会と深い関係を樹立してきたのが考古学分野の研究者である。

移住者が、その社会的地位を確立し始めていた 1937 年、文化使節として外務省からブラジルに派遣された人類学者の鳥居龍蔵は、その帰路、ペルーに立ち寄り、日系人社会の経済的支援の下、アンデス文明の遺跡を調査し、現地の学界と積極的に交流を行っている。

その後、1958 年、戦後の海外調査の草分けとして、東京大学文化人類学教室を中心に結成された調査団は、ペルーの地に足を踏み入れ、遺跡群を踏査する一般調査をペルー人考古学者とともに実施した。その過程で選んだ中部高地に位置するコトシュと呼ばれる遺跡において、調査団は 1960 年、63 年、66 年に発掘調査を実施し、先土器時代にあたる祭祀遺構「交差する手の神殿」を発見した。これは、土器と神殿の同時発生が当然と考えられていた当時の文明史を書き換える画期的な成果として国際的に高く評価されている。

コトシュ遺跡の発掘時、ペルーは日本を遙かに凌ぐ

国力を持ち、地元のワヌコ市で暮らす日系人も、調査団への経済的、精神的支援を惜しまなかった。この調査団と日系社会との関係は、経済的状況が逆転した現在でも続いており、コトシュ時代を支えてくれた日系人の 3 世らが、現在の調査団を支えている。

またコトシュの調査に参加したペルー人の学生や若手考古学者は、その後、ペルーの学界の中核を占める存在になっていった。調査団を率いた泉靖一（1915-1970）の死後、遺跡に近い州都所在地のワヌコ市には、泉靖一通りやコトシュのモニュメントが建立された。また鶴見英成（東京大学助教）は、近年、コトシュ遺跡の再調査に取り組むばかりでなく、「交差する手の神殿」のレリーフのレプリカをワヌコ市に寄贈する事業を推進している。

泉の後を受けて調査団を率いた寺田和夫（1927-1987）らは、1979 年よりペルー北高地、カハマルカ州において、アンデス文明初期の祭祀遺跡の発掘を進め、重要な学術成果をあげた。文化省カハマルカ支局内には、寺田の死後「寺田和夫ホール」が設置されている。

1988 年からは、大貫良夫らが、同じカハマルカ州のクントゥル・ワシ遺跡で調査を行い、巨大な祭祀遺構の長期的な利用を明らかにしたばかりでなく、アメリカ大陸最古級の金製品を副葬した貴人墓を次々と発見した。特筆すべきは、日本で開催した展覧会の協賛金や寄付をもとに、出土品を収める博物館を建設し、地域住民による運営を実現させた点である。展示の一部には日本の草の根文化無償、また同遺跡の保存と修復にはユネスコの日本信託基金が当てられた。住民の活動は国連の社会開発計画（UNDP）、そしてアンドレス・ペーヨ憲章（拠点：コロンビア）において賞賛され表彰されている。

2005 年には、本事業の申請者である關雄二の所属先である国立民族学博物館とペルー国立サン・マルコス大学との学術協定のもと、日本・ペルーの合同チームが創設され、北高地最大の形成期遺跡パコパンパの調査が開始された。そこでも遺構の保存やビジターセンター建設が進められ、地域住民による文化遺産保護を謳ったプロジェクトが展開されている。

これらのアンデス文明初期の研究に加えて、調査団出身である坂井正人ら山形大学のチームは、南海岸に位置する有名な世界文化遺産「ナスカの地上絵」の調査を行い、研究拠点として同大学ナスカ研究所を開設した。さらにペルー文化省と協定を結び、「ナスカの地上絵」の保護プログラムを推進している。

このように、日本の考古学者らは、長年、現地の学

界、日系社会と手を携えながら研究と社会還元事業を推進してきた。

その意味で、日本ペルー交流年事業として考古学分野の成果を発信し、現地社会と共有していくことは、両国の文化交流をよりいっそう推進させることにつながると考えられる。

3. 事業内容

本事業は、以下に示すように、ペルーにおけるシンポジウム4回（リマ市、カハマルカ市、クスコ市、ナスカ市）と展示（カハマルカ市）1回、ならびに日本におけるシンポジウム1回より構成される。開催された日時の順で概要を記す。

3-1. シンポジウム「文化遺産研究と実践の最前線」

日時：2019年8月13日

会場：国立国民博物館、リマ市

ペルーの首都リマで開催した国際シンポジウム「文化遺産研究と実践の最前線」には、日本人考古学者8名が参加した。ペルー側研究者については、共同研究者（発表者）を含めて7名が参加した。具体的には、日本調査団が60年以上にわたり対象としてきたアンデス文明初期の形成期（前3000年～紀元前後）社会の研究と遺跡の保護をメインテーマとした。

冒頭、土屋定之駐ペルー日本特命全権大使の挨拶に続き、ペルー文化省ルイス・ハイメ大臣の挨拶があり、これに続いて大貫良夫が、日本人考古学者による過去60年の調査の歩みをテーマとする基調講演を行った。続いて、会場を移し、地域ごとの最新成果を日本、ペルー両国の研究者が発表を行った。さらに、近年、若手研究者が興味を示す形成期以降の時代についても扱った。これらの発表に併せて会場内で2枚のパネルを用いたポスター発表も行った。なお、シンポジウムは、毎年、ペルー文化省が主宰して行われる「ペルー考古学会議」の1日をあて、会場もペルー文化省側が無償で提供した。なおこのシンポジウムは、文化庁、国立民族学博物館、在ペルー日本大使館、ペルー文化省、日本考古学調査団の主催、文化遺産国際協力コンソーシアムの共催、古代アメリカ学会の協力の形で実施した。基調講演にはおよそ200名、シンポジウムには60名の参加があった。

3-2. 展示『カハマルカにおける日本調査団——40年におよぶ考古学調査』

期間 2019年9月5日～

会場：文化省カハマルカ支局、カハマルカ市

ペルー北部高地カハマルカ州の州都カハマルカ市において展示を実施した理由は、カハマルカ州が、1979年以来、日本調査団が継続して調査を実施してきた場所であり、本年で40周年を迎えたためである。会場はペルー文化省が無償で提供する形となったが、展示および警備については日本側が負担することとなった。

文化省カハマルカ支局が事務所を構えるベレン教会複合内の旧男性用病棟という歴史的建造物内を利用した展示では、第1室において、1958年以来の日本調査団の歩みや、過去に調査に加わった両国の団員からのメッセージなどが披露された。展示空間の大半を占める第2室では、40年間の発掘調査によって得られた出土品を展示した。

9月5日の開幕式には、土屋定之特命全権大使、文化省文化遺産課長、カハマルカ州知事、カハマルカ市をはじめとする複数の市長が参列し、挨拶をするとともに、日本調査団に対して数多くの表彰が行われた。引き続き、大貫良夫による記念講演が行われ、土屋定之特命全権大使、文化省文化遺産課長、カハマルカ州知事、關雄二によるテープカットにより展示の公開が開始された。

当初、会期は3ヶ月ほどを予定していたが、2ヶ月間で3万人の入館者を数え、現地のメディアでも大きく取り上げられるなど反響が大きいため、ペルー文化省側から会期延長の希望が表明され、現在のところ、2020年8月上旬まで延長する予定となっている。なお撤収は、關雄二の責任の下、ペルー文化省の資金によって行われることが合意されている。展示は、文化庁、国立民族学博物館、在ペルー日本大使館、ペルー文化省、日本考古学調査団の主催、文化遺産国際協力コンソーシアムの共催、古代アメリカ学会の協力の形で実施した。

3-3. シンポジウム『過去と現在の狭間で——ペルー北高地・北海岸の文化遺産の研究と保護』

日時：2019年9月6日

会場：文化省カハマルカ支局、カハマルカ市

展示に併せて、シンポジウムを実施した。当初、2日間の予定で実施することになっていたが、週末に会

場が利用できないことが判明したため、1日で終えるというタイトなスケジュールに変更した。シンポジウムでは、冒頭、土屋定之特命全権大使の挨拶の後、日本・ペルー両国の考古学者によるカハマルカ地域の考古学調査と文化遺産保護の現状について討議が行われた。一般公開で実施されたほか、文化省のウェブを介して生中継された。現地会場における参加者はおよそ200名であった。

3-4. シンポジウム「アンデス南部高地における日本人による人類学研究の50年——軌跡、民族誌、文化的再評価」

日時：2019年11月13日

会場：クスコ歴史博物館講堂、クスコ市

本シンポジウムは、アンデスにおける民族学研究をテーマに、同分野の研究の中心地であるペルー南部のクスコ市を舞台に開催した。とくにペルー南部高地は、1960年代から日本人研究者が地元の研究者らと共同で調査研究をおこなってきた地域でもあり、今回は長年にわたる双方の研究成果を地元社会に還元する意味で、両国の関係機関の協力のもと実施された。シンポジウムでは、日本人人類学者3名のほか、日本の共同研究調査への参加実績のあるペルー人類学者2名が研究発表をおこなった。具体的には、南部高地の農村および牧畜社会におけるアンデス特有の慣習、土地利用、移動形態、儀礼などの無形文化を主題に、これまでの研究の歴史を振り返るとともに、今後の同地域の研究展望について述べられた。また、日本の研究者達が蓄積した画像や標本などの研究資料の活用の可能性等についても扱った。なお、本シンポジウムは文化庁、国立民族学博物館、ペルー文化省クスコ支局、クスコ市、クスコ大司教府の協力のもと実施した。当日は、研究者、学生、行政関係者や地元市民ら130名の参加があった。また、本シンポジウムの開催に合わせて、関連イベントとして、写真スライド展示「アンデスの伝統：日本人人類学者による1960-1980年代の写真コレクション」も実施した。このイベントは、クスコ市の協力のもと、同市庁舎コンベンションセンターで3日間にわたりおこなった。期間中は、一般市民のほか、同地を訪問する観光客等も数多く足を運んだ。

3-5. シンポジウム『ペルーの文化遺産保護の最前線——アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのミイラ』

日時：2019年12月14日

会場：東京文化財研究所、東京

このシンポジウムでは、日本人考古学者が4名参加した。ペルー側研究者については、2名の参加を予定していたが、1名は、来日直前に文化大臣の職に就き、かつまた世界文化遺産の暫定リストに掲載されたクエラップ遺跡周辺の山火事に対処することとなったため、参加が叶わず代読の形となった。

シンポジウムでは、豊城浩行文化庁文化財鑑査官、ハロルド・フォルサイト駐日ペルー大使の挨拶に続き、日本調査団が60年以上にわたり対象としてきたアンデス文明初期の形成期（前3000年～紀元前後）社会の研究と遺跡の保護の歩みについて、加藤泰建（埼玉大学名誉教授）が基調講演を行った。続いて、カルロス・ウェステル・ラ・トレ（国立ブルーニング考古学博物館長）による、ペルー北海岸チョトゥーナ遺跡とチョルナンカップ遺跡における遺跡保存とコミュニティ開発の事例、そして日本側からは、關雄二とダニエルモラーレスが率いるパコパンパ遺跡合同調査における文化遺産の活用、そして坂井正人ら山形大学チームが進めるナスカの地上絵の新発見とそれらの保護についての発表が続いた。

なおこのシンポジウムは、文化庁、国立民族学博物館の主催、文化遺産国際協力コンソーシアム、山形大学、金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」、科学研究費補助金基盤研究（A）「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」（研究代表者 關雄二）の共催、古代アメリカ学会、在日ペルー大使館の協力の形で実施した。一般公開の形で行われ、参加者は約80名であった。

3-6. シンポジウム『ペルー南海岸・南高地における考古学と文化遺産』

日時：2020年1月11日、12日

会場：アントニーニ博物館、山形大学ナスカ研究所、ナスカ市

本シンポジウムは、当初2019年10月に開催することで準備を進めてきたが、その時期にナスカ市の会場を確保することが難しかったこと、またペルーの入管法の変更により、予定していた時期に、日本人研究者

が滞在することが困難になった点などの事情から、2020年1月の開催に変更となった。

シンポジウムの目的は、ペルー南海岸および南高地を調査している日本とペルーの研究者が、ナスカ市に集まり、成果を発信し、情報を共有することにある。ナスカ市で開催した理由は、山形大学が同市に研究施設を設立し、ユネスコ世界文化遺産ナスカの地上絵の研究を推進していることにある。1日目は、「パラカス」、「ナスカーパルパ」、「ワリ」という3つの異なる文化を扱うセッションによって構成された。またペルー南海岸および南高地で実施された最新の考古学調査の結果を報告するだけでなく、考古学調査を通じて明らかになった文化遺産が抱える諸問題についても議論した。2日目は「世界遺産ナスカの地上絵」を保護するために山形大学とペルー文化省が締結した協定に基

づき、ナスカ市近郊のアハ地区に共同で設立した遺跡公園をシンポジウム発表者で視察し、その後、山形大学ナスカ研究所において、文化遺産とコミュニティの共生、文化遺産の持続的活用をめぐって討論を行った。日本人考古学者3名の他、ペルー人考古学者6名、イタリア人考古学者1名が参加し、聴衆は72名を数えた。

またシンポジウムは、文化庁、山形大学、国立民族学博物館の主催、山形大学ナスカ研究所、ペルー文化省ナスカーパルパ地区管理計画事務所、文化遺産国際協力コンソーシアム、アントニーニ博物館の共催、古代アメリカ学会の協力の形で実施した。なお本シンポジウムの運営については、国立民族学博物館より山形大学に再委託した。

Ⅱ. 実 施 概 要

1

シンポジウム 『文化遺産研究と実践の最前線』

実施日時 2019年8月13日 9:00～18:30

実施会場 国立国民博物館 大ホールおよびチャンカイホール、リマ市

主催：国立民族学博物館・文化庁・在ペルー日本大使館・ペルー文化省

共催：文化遺産国際協力コンソーシアム

協力：古代アメリカ学会

【プログラム】

会場：大ホール

9:00～9:30

ルイス・ハイメ・カステイヨ ペルー文化大臣挨拶

土屋定之 駐ペルー日本特命全権大使挨拶

9:30～10:30

基調講演「日本調査とペルー考古学の60年」

大貫良夫（東京大学名誉教授）

10:30～11:00 休憩

会場：チャンカイホール

11:00～13:00

第1部 北高地の調査と保存活用 司会：坂井正人（山形大学）

「パコパンパ遺跡の調査と保存・活用」

関雄二（国立民族学博物館）

ファン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

ディアナ・アレマン（ペルー国立サン・マルコス大学）

マウロ・オルドーニェス（ペルー国立サン・マルコス大学）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

「クントゥル・ワシ遺跡の考古学調査と地域住民の経験」

井口欣也（埼玉大学）

「ヘケテベケ川中流域の調査——ラス・ワカス遺跡、モスキート遺跡、レチューサス遺跡」

鶴見英成（東京大学）

カルロス・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

「コンゴーナ遺跡の調査」

ワルテル・アルバ（ペルー国立シパン王墓博物館）

13：00～14：30 昼食

14：30～16：30

第2部 極北地方の調査と保存活用 司会：関雄二

「インガタンボ——形成期における北のフロンティア、社会開発のポテンシャル」

山本睦（山形大学）

「カハマルカ州ハエン郡のモンテグランデ遺跡の考古学調査とその社会的影響」

キリーノ・オリベラ（ペルー・アマゾン学術調査協会）

第3部 南海岸の調査と保存活用 司会：井口欣也

「ナスカ台地の調査とアハの地上絵の保存活動」

坂井正人（山形大学）

ホルヘ・オラーノ（パリ第1大学）

「パルパの地上絵の調査・管理・保護」

ジョニー・イスラ・クアドラド（ペルー文化省ナスカ・パルパ管理計画事務所）

16：30～17：00 休憩

17：00～18：30

第4部 南高地とワリの調査と保存活用 司会：鶴見英成

「アンデス中央高地はチャビン現象の周縁か？——アヤクチョ地方の新たな発見より」

松本雄一（山形大学）

ユリ・カベロ・パロミーノ（ペルー国立サン・マルコス大学）

「地上の遺跡と埋もれた遺跡——遺跡観光に関する一考察」

渡部森哉（南山大学）

「変貌の時代——ヘケテペケ川流域のモチェ社会の崩壊におけるワリとカハマルカの役割」

ルイス・ハイメ・カスティーヨ（ペルー・カトリカ大学）

総括と挨拶 関雄二

ご挨拶



ルイス・ハイメ・カスティーヨ（ペルー文化大臣）

ペルーと日本の交流年にあたる本年、その記念行事をここペルー文化省で開催することは大きな喜びです。とくに、ペルー考古学会議の初日である本日、その関連式典を開くことは、考古学者でもある私にとって、特別な意味があります。と申しますのも、ペルーの考古学の歴史の中で、日本人による考古学的研究の存在に言及しないわけにはいかないからです。今から60年前に組織された、泉靖一先生率いる日本の考古学調査団は、ワヌコ州のコトシュ遺跡で「交差した手の神殿」を発見し、その後、大貫良夫先生は、クントウル・ワシ遺跡で金製副葬品を納めた墓をいくつも見つけたことは記憶に新しいところです。しかも、大貫先生たちは、地元の村に博物館を建設し、出土品を保管するばかりでなく、博物館の管理を地元の住民たちに託すという立派な仕事をされました。文化行政ですらできなかったことを外国からやってきた研究者が成し遂げたということはじつに賞賛されるべきことです。そして今や、その精神を関雄二先生や坂井正人先生が引き継ぎ、パコパンパ遺跡やナスカの地上絵で活躍されています。

私は関先生や坂井先生のお招きで日本に二度ほど参りましたが、そこで見た文化遺産保護に対する行政や研究者の姿勢に感嘆しました。現在、建設中の新国立博物館においても日本の協力を仰ごうと考えているところです。

いずれにしましても、考古学は、日本とペルーを結ぶ架け橋になる重要な分野です。今後も、ペルーと日本との研究者がペルー考古学の発展に協力し合い、すばらしい関係を築いていくことが必要だと考えています。

ご挨拶

土屋 定之（駐ペルー日本特命全権大使）



第6回全国考古学総会の初日に、日ペルー合同シンポジウムを開催できることへの喜びを表明致します。特に、カスティーヨ大臣をはじめとしたペルー文化省に深い感謝を申し上げるとともに、全ての協力機関、参加する専門家の皆様へ深い敬意を表します。

日本とペルーの考古学分野の協力の歴史は実に60年以上に亘ります。先達の研究の全てに関わった大貫教授をはじめ、多くの日本人研究者が、ペルーの考古学者とともに、ペルーの歴史と文化の探求に情熱をもって取り組んでこられました。その研究が、学界のみならず、地域社会への成果の還元を常に考えて行われてきたことを、心より誇りに思います。そして、継続的な研究と営々としたデータをまとめ、発表されてきたこと、右がペルーと日本の友好関係の重要な基盤の一つとなっていることに、両国の研究者の一人一人に、日本政府を代表し、深い敬意を表します。

本年、両国は日本人移住120周年に当たる「日ペルー交流年」を迎えております。本日のシンポジウムが、人類にとって普遍的な価値を持つ考古学の発展に大いに寄与すること、そして両国の将来に向けた連携協力が更に深化していくことを強く祈念し、私の挨拶とさせていただきます。

日本調査団とペルー考古学の 60 年



大貫良夫（東京大学名誉教授）

リマにおける二人の日本人の運命的な出会いが、日本のアンデス考古学研究のきっかけとなった。1956年、当時東京大学助教授の文化人類学者・泉靖一と、後にリマで天野博物館を設立することになる実業家・天野芳太郎との出会いである（図1）。第二次世界大戦の敗戦からわずか11年、日本が甚大な戦災から復興するために全力を傾けていた時のことである。日常の食糧にも事欠くような不自由な生活の中で、誰もが自問していた。「日本の過去とは何であったか？」「西洋社会に追いつこうと発展を目指してきた日本の近代化とは何だったのか？」「“文明”を追い求めようとする人類の歴史とはいったい何か？」と。泉は文明の起源に遡ることによって、人類史の広い視点から、こうした「文明」の問題を探求したいと考えたのである。ペルーは独自に栄えた文明発祥地のひとつであった。ここで調査研究に取り組むことで、文明の探求に新しい知見が得られるのではないかと考えた泉は、1958年、石田英一郎とともに東京大学アンデス学術調査団を組織する。そして、ペルー北部・ワヌコ盆地のコトシュ遺跡を調査対象と定め、1960年、63年、66年に発掘の指揮を執ったのである。筆者は1960年からこの調査団に加わることとなった（図2）。

1960年代のはじめ、ほとんどの考古学者はアンデス文明の起源がチャビン文化にあると考えていた。したがってその起源を探求するのであれば、チャビン文化とそれに先立つ文化を探す必要がある。ペルー考古学の父と呼ばれるフーリオ・C・テーヨは、かつて「チャビン文化起源の重要な鍵を握るのはコトシュかもしれない」と述べたことがあった。そこで泉はコトシュ遺跡を訪ねて十分な予備調査を行い、テーヨの予想が当たっていると確信してこの遺跡を発掘することを決意したのである。遺跡はワヌコの町の中心地から5キロという近さにあり、また、当時のワヌコには調査団を温かく迎え協力を惜しまない日系人の家族がいた。調査団メンバーがこの決定に賛同したことはいうまでもない。

調査団の本拠地をどうするか。泉は遺跡のそばにテント村を設営することにした。コトシュのマウンドの近くに登山用テントを張り、二ヶ月の発掘期間中その狭いテントで三人が暮らした。川の水で顔を洗い、日中の暑さと午前中のブヨの猛威にも耐えた。午後には強風が砂塵を巻き上げる。今になって振り返ると、このような過酷な環境の中でよく誰も病気にならなかったものだとは驚く。当時の日本人は強靱で忍耐強かった



図1 左から泉靖一、寺田和夫、天野芳太郎（1960年）
© 東京大学アンデス調査団



図2 パウカルバンバ遺跡の発掘調査（1966年、左手前：大貫良夫、右手前：泉靖一）© 東京大学アンデス調査団

のかもしれない。

コトシュの発掘調査は、最初のシーズンから驚きの連続であった。発掘によって、コトシュでは、チャビン文化の時期があることが確認されたが、それ以前にも2つの時期（ワイラヒルカ期とコトシュ期）があり、それぞれに特徴的な装飾の精製土器を伴うことも明らかになった。当時、他の遺跡ではチャビン文化に先立つ時期の土器は知られていなかった。この発見によって、定住農耕社会がチャビン文化以前にすでに存在していたことを示したのである。

さらに驚くべき発見は続いた。それは、チャビン文化以前のこの二時期よりも明らかに前の時期につくられた、土製レリーフを伴う石造建築の発見である。しかも、この建築物に対応する地層では、土器が一切出土しなかった。泉は、先土器時代にあたるこの時期をミト期、そしてその建造物を「交差した手の神殿」と命名した(図3)。少なくとも紀元前2000年ほどの古さである。さらに、ミト期のなかで神殿は三回にわたって建設されたことも発掘で明らかになった。ある期間が過ぎると、新しい神殿につくり替えていたのである。のちに調査団が、「神殿更新」と呼ぶことになる活動である。

発見された1960年当時、すべての人が、「交差した手の神殿」はペルーだけでなくアメリカ大陸全体で最古の神殿だと考えた。アンデス文明の起源は、チャビン文化よりもずっと古く遡ることになったのである。この驚くべき成果を遺し、泉は1970年に急逝する。

その後、同じく東京大学教授の寺田和夫が核アメリカ学術調査団を組織し、ペルー北部山地におけるアンデス文明形成期のデータをさらに収集するため、アンカシュ州のラ・パンパ遺跡、そしてカハマルカ地方へと調査地を求めていった。



図3 コトシュ遺跡、「交差した手の神殿」の発掘（1963年）
© 東京大学アンデス調査団

カハマルカの市街地に近いワカロマ遺跡の発掘調査は、1979年から1989年の間、5シーズンに渡って行われた。発掘の結果、ワカロマにもカハマルカ盆地の他の形成期遺跡にもチャビン文化は存在せず、代わりに同時期において別の文化が存在していたことが明らかになった。「後期ワカロマ期」と命名された時期がこれにあたる。ワカロマではコトシュと同様、神殿更新が行われていたこともわかった。カハマルカ盆地は、形成期における独自の文化と歴史を有していたのである。調査団はカハマルカの形成期を4つの時期に区分する編年を提示した。古い方から、前期ワカロマ期、後期ワカロマ期、EL期、ライソン期である。

その後、日本調査団は1988年にクントゥル・ワシ遺跡の発掘調査に着手する。さらに広い視点からカハマルカの形成期について研究を進めるためである。1987年の寺田和夫の逝去により、大貫良夫がこの遺跡の調査指揮をとった。その後、1998年からは加藤泰建がクントゥル・ワシ調査団のリーダーとなった。

クントゥル・ワシの発掘調査では、多くの新しい成果が得られた。チャビン文化と同時期にあたるクントゥル・ワシ期に、この神殿では金製品を伴う6基の特別な墓がつくられていたのである。また、その副葬品土器はチャビン様式ではなく、ペルー北海岸のクピスニケ様式であることもわかった。この成果によって、アンデス文明形成期の探求には、もっと広い地域を視野に入れて調査する必要が認識されることになった。調査団は、ランバイエケ谷からモチエ谷まで、そしてカハマルカの高地へと調査対象地域を広げていった。

新たに日本調査団を率いることになった関雄二は、ペルー国立サン・マルコス大学との協定のもと、2005年に形成期の大神殿遺跡であるパコパンパで大規模な調査を開始した。発掘と修復保存は今も続いており、北部山地の形成期研究に大きな貢献を加えることになった。山本睦はワンカバンバ川流域のインガタンボ遺跡の調査で新しいデータを得て、さらにエクアドルとの国境付近まで調査地を広げた。こうした調査の拡大と進展によって、ペルー北部の形成期には3000年の長きにわたり、広範な地域でダイナミックな相互交流のプロセスがあったことが実証されたのである。

日本調査団の60年にわたる研究によって各遺跡や地域の詳細な編年が確立されたことは、アンデス文明の起源に関わる研究に大変重要な貢献をなしてきたといっても過言ではあるまい。その成果の詳細については、それぞれの研究者によって、これからも発表されていくことになるだろう。

ペルー北部山地の形成期研究に加え、日本調査団の研究者には別のテーマや関心も生まれた。渡部森哉は、形成期よりも後のカハマルカ文化、ワリ文化の研究を精力的に行っている。坂井正人が率いるナスカ・プロジェクトは、新たな地上絵の発見や遺跡発掘により、ナスカ文化の解明に大きな成果を上げている。さらに、芝田幸一郎、土井正樹、佐藤吉文、松本雄一といった研究者も独り立ちし、ペルーにおけるそれぞれの遺跡調査プロジェクトでめざましい成果を上げている。さらに、鶴見英成は2016年に日本の研究者として50年ぶりにワヌコでの発掘調査を再開し、形成期初期の研究に新たな知見をもたらしている。クントゥル・ワシ遺跡の調査に最初から参加している井口欣也も、近年、同遺跡での調査プロジェクトを再開した。こうした日本研究者ひとりひとりの調査研究が、今後もアンデス文明の探求に大きく貢献していくことになるであろう。また、日本調査団の発掘調査には常にペルー人の研究者が参加してきたことも忘れてはならない。その研究成果は、日本とペルーの研究者の密な協力によるものである。ペルーの友人たちに、あらためて深く感謝を申し上げたいと思う。

日本調査団の60年のなかで蓄積されてきたもう一つの経験は、文化遺産の保護と活用をめぐるものである。それは、ときに困難を伴う経験でもあった。コトシュ遺跡の「交差した手」のレリーフの保存をめぐるのは、それを地元で保管したいというワヌコ市民と調査団との間で難しい話し合が行われた。また、ペルー文化庁カハマルカ支局の策定したワカロマ遺跡保存計画に対しては、その周辺を生活の場とする住民によって反対運動が起こり、調査団が両者の板挟みとなる状況に追い込まれたこともあった。しかしながら、調査団が参与し、地域住民の参加による文化遺産保護と活用のモデルケースとなった事例もある。クントゥル・ワシ博物館の建設である。

1989年にクントゥル・ワシ遺跡で最初の黄金装飾品が発見されると、村民たちはそれを「村の宝」だと言って地元で保管したいと主張した。無論、出土遺物がペルー国家に帰属し、それに対する権限と責任が国にあることはいうまでもない。一方で、この遺跡を長年にわたって盗掘者から守ってきたのは村民たちに他ならない。発見は調査団によるものだが、村民たちの遺跡保護の努力があったからこそ、それが可能となったのである。とはいえ、貴重なクントゥル・ワシの出土資料を村に保管するにはどうしたらよいのか。唯一の方法は、村に博物館をつくることだった。しかし、当

時のペルーの経済状況と政情の不安定さからすると、政府も民間も新しい博物館を建設してそれを運営することは不可能であった。

われわれ調査団は、村民、そしてペルー文化庁と話し合いを重ねた。そして、出土遺物を一時的に持ち出す許可を得て日本で展覧会を開き、村に博物館を建設するための資金を集めることで合意に達したのである。展覧会は日本の10都市を巡回し、博物館建設のための寄付を集めることができた。日本大使館と在ペルー日本企業の支援もあり、1994年10月15日、クントゥル・ワシ博物館が開館した。村民は、博物館運営と遺跡保護を目的として非営利法人「クントゥル・ワシ文化協会」を設立した。それ以来今日に至る25年あまりの間、文化協会のメンバーはアンデスの農民特有の勤勉さ、誠実さ、実直さをもって、このクントゥル・ワシ博物館を立派に守ってきたのである(図4)。

どの遺跡でもクントゥル・ワシと同じように博物館を持つべきだということではない。しかし、クントゥル・ワシのケースは、文化遺産の保全に地域住民の理解と協力、そして主体的な参加がいかに重要かということを示す事例であるといえるだろう。

ペルーには素晴らしい文化遺産が数多くあるだけではない。大変豊かな自然資源もある。私は、ペルーのすべての州が、その地域における自然史博物館をつくることを提案したい。そこで、その地域における定住の始まりから今日に至るまでの人間の歴史や文化とともに、地理、地質、動物、植物などの環境に関する資料を展示するのである。日本各地にあるこのような博物館を、ペルーでも多くの人が訪れるようになることを願っている。そうすれば、地域住民のアイデンティティ、文化遺産と自然遺産の重要性にたいする人びとの認識は、大いに深められることになるだろう。



図4 クントゥル・ワシ文化協会のメンバーと筆者(2011年)
© 東京大学アンデス調査団

パコパンパ遺跡の調査と保存・活用



関 雄二（国立民族学博物館）

ファン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

ディアナ・アレマン（ペルー国立サン・マルコス大学）

マウロ・オルドーニェス（ペルー国立サン・マルコス大学）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

パコパンパ遺跡は、ペルー北部高地、海拔約 2500 メートルに位置する形成期の神殿遺跡である。1960～70 年代、小規模な発掘がペルー人考古学者によって実施されてきたが、詳細なデータは発表されず、巨大な遺構と編年との相関関係についても不明な点が多かった。2005 年に発表者が所属する国立民族学博物館はペルー国立サン・マルコス大学と学術協定を締結し、同遺跡の調査を開始することになった。

調査の目的は、これまでの日本の調査団と同様に、文明胎動期とも言える形成期社会（前 3000 年～前 500 年）の解明にある。有名なインカ帝国よりも 4000 年以上も前の時代である。形成期には農耕が本格化し、神殿建設が盛んになる。つまり神殿の発掘は、文明形成の謎を解くことにつながっていたのである。なかでも発表者は、権力が生成されるメカニズムに強い関心を持っている。

これまでの調査の結果、パコパンパ遺跡では、主に二つの利用時期が確認された。古い方からⅠ期（前 1200 年～前 700 年）、Ⅱ期（前 700 年～前 400 年）と名づけた。いずれも形成期に相当するが、細分するならばⅠ期は形成期中期、Ⅱ期は形成期後期にあたる。

またパコパンパ遺跡は三段の基壇より構成される。基壇間は石積みの階段で結ばれ、最上段の基壇上に重要な構造物が集中していた。そこには、形成期神殿では珍しい円（筒）形の構造物（径 28m）の他、半地下式広場（30m × 30m）やその広場の三方を囲む低層基壇、ならびに部屋状構造物が検出されている。また、

こうした建造物は、Ⅰ期、すなわち形成期中期にほぼ全体が完成し、続くⅡ期、すなわち形成期後期で、再利用されていたことが判明している。

とくにⅠ期からⅡ期にかけての社会の変貌は、大変興味深い。2009 年、Ⅱ期にあたる建造物の内部から墓が発見された。深さ 2 メートル、の地下式墓であり、土器のほかに、金製の耳輪と耳飾りを副葬した特殊な墓であった。被葬者は成人女性で、頭蓋変形が認められた。頭蓋変形は生後間もない幼児に施す必要があり、その意味で、被葬者は生まれながらに特別な役割、もしくは地位が約束された人物であることがわかる。言い換えれば社会的差異がこの頃に固定化した証拠といえる。

こうした貴人墓はパコパンパにとどまらない。日本調査団がかつて発掘したクントゥル・ワシ遺跡でも確認されている。同遺跡の墓は、前 800 年頃にあたるので、ペルーの北部高地では、おそらく前 800～前 700 年頃に権力が顕在化していくものと思われる。

こうした成果とともに、日本の調査団が追究し、私自身が継承してきたことがある。それは遺跡の保存である。2014 年より、遺構の保存を本格的に開始し、併せて見学ルートや解説パネルの設置を地域住民とともに実施してきた。現在カハマルカ州政府が進める観光ビジターセンターの建設とともに、地域社会のシンボルとして、また持続可能な観光のインフラとしての機能を持たせることが目的である。

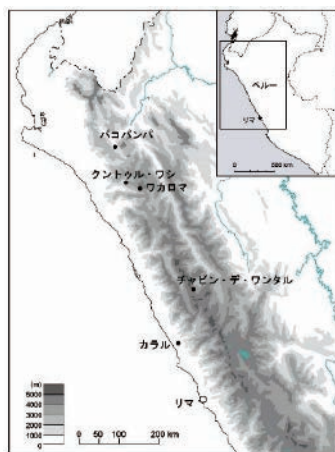


図1 パコバンバ遺跡の位置

紀元前	時期	パコバンバ	ワカロマ	グントウル・ワシ	コトシユ
50	末期		ライゾン	ソデーラ	サハラバタク
250			EL	コバ	チャビン
500	後期	パコバンバ II	ワカロマ後期	グントウル・ワシ	コトシユ
800				イドロ	
1000	中期	パコバンバ I	ワカロマ前期		ワイラセルカ
1200		バンダンデ			
1500	前期				ミト
1800					
3000	早期				

図2 ペルー北高地形成期遺跡の編年



図3 パコバンバ遺跡基壇上の建物
©Heinz Plenge



図4 「貴婦人の墓」の金製品
© パコバンバ考古学調査団



図5、6 パコバンバ住民が参加した遺跡保存 © パコバンバ考古学調査団

クントウル・ワシ遺跡の考古学調査と 地域住民の経験



井口 欣也（埼玉大学）

クントウル・ワシ神殿の変容過程

クントウル・ワシ遺跡は、ペルー北部山地、海拔2300メートルの丘に位置するアンデス文明形成期の神殿遺跡である（図1）。大貫良夫と加藤泰建が率いる日本調査団のメンバーとペルー人研究者の協力によって1988年から調査が開始され、2019年までに15シーズンにわたる発掘が行われている。調査によって、この遺跡では形成期中期から末期に至る活動が明らかになり、イドロ期、クントウル・ワシ期、コバ期、ソテラ期の4つの時期からなる編年が設定された。

クントウル・ワシでは、最初のイドロ期（前950～前800年）に、自然の丘の上を整形して最初の神殿が築かれた。共伴する土器は、形成期中期の北部山地にみられる土器と類似した特徴を示している。しかし、次のクントウル・ワシ期（前800～前550年）の初めに、この神殿に大きな変化が生じた。まず、丘の頂上部全体を支える3段の擁壁が新たに築かれた。さらに、頂上部の大基壇上ではイドロ期の建築物がすべて埋められ、その上にまったく新しい祭祀建築群が築かれたのである（図2）。神殿の中心的な建築群として、中央広場とそれをU字形にとり囲む基壇が作られ、象徴的な図像を表現した石彫がこの建築群の中に設置された。



図1 クントウル・ワシ遺跡とその麓に位置するクントウル・ワシ博物館 © クントウル・ワシ調査団

この新しい祭祀建築群の建設と同時に行われた儀礼行為も明らかになった。その一つは、中央基壇の建設過程における、金製装飾品（図3）を副葬された特別な4基の墓の設置である。また、中央広場の最初の床下には、珪孔雀石やウミギクガイ製の玉などからなる奉納品が納められた三つの穴が発見された。それまでの神殿建築を否定し、一連の儀礼を伴うクントウル・ワシ期の神殿の刷新は、まさに「神殿革新」といえるものであった。

続くコバ期（前550～前250年）には、大基壇上北

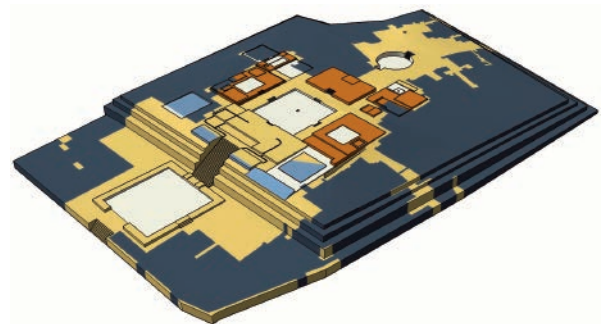


図2 クントウル・ワシ神殿復元図（クントウル・ワシ期）
© クントウル・ワシ調査団



図3 十四人面金冠（第1号墓 副葬品）撮影：Alvaro Uematsu
© クントウル・ワシ調査団

東側でクントウル・ワシ期につくられた建築群の配置や石彫が維持される一方で、南西側では異なる方向軸の新しい建築群が作られた。そして、建築物の改修と新築、また床の更新も活発に行われた。祭祀品の製作場と考えられる部屋状構造物も明らかとなった。コバ期には、持続的な建設、儀礼、祭祀品生産活動を通じて、地域社会のより多くの人々を神殿に巻き込んでいった様子がうかがえる。しかし、コバ期の最終段階には、中央広場などの重要な祭祀建築物が埋められ、さらに形成期末期のソテータラ期（前250～前50年）になると、クントウル・ワシは神殿としての機能を完全に失うこととなった。

クントウル・ワシの文化遺産活用における地域住民の経験

クントウル・ワシの調査プロジェクトは、常に地域住民の協力によって支えられてきた。クントウル・ワシの村民による遺跡の保護は、調査に先立つ1970年代から行われてきたが、村にクントウル・ワシの出土資料を展示する博物館を建設したいという情熱は、調査による特別な墓の発見が契機となってわき起こった。そして1993年には、村民から構成される「クントウル・ワシ文化協会」が設立された。日本調査団は、ペルー政府の許可を得てクントウル・ワシの出土品を一

時的に日本に運び展覧会を開催、同時に博物館建設のための資金集めを行った。さらには在ペルー日本大使館・日本外務省の草の根文化無償資金やリマの日本企業の寄付も寄せられ、1994年10月15日、村にクントウル・ワシ博物館が開館したのである。クントウル・ワシ文化協会はペルー文化省と協定を結び、博物館運営と出土した考古資料の展示・保管を担うことになった。さらに2000年から2003年には、ユネスコ日本信託基金による遺跡の修復保存プロジェクトが実施され、100人を超える地域住民が作業に参加した(図4)。

クントウル・ワシ博物館の25年に及ぶ運営の経験のなかで、村民の意識にも変化が見られた。ペルー全土から、そしてはるばる外国から訪れた来館者との出会いや対話を通じて、クントウル・ワシ遺跡やその出土品が「村の宝」ということにとどまらず、ペルーの、そして人類全体にとっての重要な文化遺産なのだという、その普遍的な価値を自然と認識するようになったのである。

博物館運営には日本調査団による学術的なサポートだけでなく、近年ではJICAによる青年海外協力隊員の派遣や「希有の会」など日本の民間団体による支援も寄せられている。地域住民の主体的参加による文化遺産の活用には日本の国際協力が果たした役割は大きい。



図4 クントウル・ワシ遺跡大基壇擁壁と中央階段の保存修復作業 © クントウル・ワシ調査団

テンブラデーラ

——ヘケテペケ川中流域の形成期遺跡群における調査

鶴見 英成 (東京大学)



カルロス・モラレス (国立サン・マルコス大学)



ヘケテペケ川中流域のガジート・シエゴ貯水池に近いアマカス平原は、形成期の大規模建造物が多数集中する点で特異である。貯水池の建造により残念ながら多くの遺跡が失われたが、いくつかは水没を免れ、調査可能な状態にある。一帯で最大規模のラス・ワカス遺跡もその一つである。鶴見はこの遺跡において2003年より調査プロジェクトを開始し、翌年よりペルー人考古学者カルロス・モラレスらと共同でとり組むようになった。この調査により、ラス・ワカス遺跡は形成期前期（アマカス期、前1500～前1250年）から形成期中期（テンブラデーラ期、前1250～前800年）にかけての神殿であったことが分かった。またその至近に分布する大規模建築群も可能な限り調査し、形成期前期には神殿群が順次建てられたこと、形成期中期には最大規模のラス・ワカスと同時に複数が併存して機能したことが判明した。

これらのデータから、神殿の建設と放棄の背景には以下のような過程があったと考えるに至った。まず形成期前期には以下の理由で神殿の移転がはじまり、やがてそれが儀礼として繰り返されるようになった。すなわち①豊穡祈念：水が豊富で、耕作に適した西の端に最初の神殿は建てられた、②水害の回避：エル・ニーニョ現象のときに起こる鉄砲水の被害を避けるため、より安全な東側へ移動した、③祖先崇拝：放棄された神殿には、塔状の大きな墓が添えられ、祖先を記念す

るモニュメント（記念碑）へと変わり、のちの神殿はそれを正面にのぞむような特別な建物を一角に組み込むようになる、といった背景である。続く形成期中期には、いくつもの神殿が併存するようになった。その背景に社会組織の変化がある。それは①まずラス・ワカス神殿が祖先崇拝儀礼の中心地となり、それに付随する小さな神殿が2つできたこと、ついで②おそらく人口増加に伴う軋轢により、村が分裂し対岸に別の神殿（マル・パッソ遺跡）ができたことである。そして形成期後期（レチューサス期、前800～前500年）にはこれらの神殿すべてが放棄され、新たな神殿レチューサスは5kmほど上流に作られた。その背景は研究途上であるが、ヘケテペケ谷中流域の地域社会の内的な要因以上に、他の地域の社会との関係が大きな要因になっているとの見通しが得られている。

以上の研究成果をふまえ、それ以前の社会の様相を解明する手がかりを求めて、鶴見とモラレスは貯水池をはさんでアマカス平原の対岸に広がるモスキート平原でも調査に着手した。この平原において特筆すべきは、東端に位置する岩に彫られた、ネコ科動物（フェリーノ）と猛禽を組み合わせた図像の、大きな岩絵である。このネコ科動物の表現は、カスマ谷やネペーニャ谷など他の地域において、先土器期末期の神殿遺跡に施されたレリーフや彫像の事例と相似していた。この調査により、モスキート平原の各所に大規模建築群

が発見された。そのひとつ「モスキート Z」は、内部に小さな部屋を擁する複雑な形状の建築であることが分かってきた。2015 年の発掘の結果、部屋の内部には壁が崩れ、火を焚く炉が設けられていた。このような部屋の類例はアンデス北部各地の神殿遺跡に知られ、先土器期に特徴的な建築形態である。また「モスキート X」「モスキート Y」「モスキート P」などの大規模建築群でも年代測定のための発掘を行い、形成期早期（モスキート期、前 2000 ～ 前 1600 年）を通じて、神殿建築が相互に眺望し合うような文化景観が次第に形成されていったことが分かってきた（図 1）。神殿の

多数併存という状況は上述のアマカス平原と似ているが、その背景は同じようには説明できず、今後精緻に解き明かす必要がある。大規模で集約化された農耕がこの地点で大規模に展開していたと考えられ、経済活動が大きな鍵であるとの展望を持っている。

テンブラデーラ村周辺では 1960 年代から形成期の優れた陶芸作品が多く盗掘され、貯水池の建設も重なって、文化遺産への関心が低い。我々は現地説明会や講演会等の活動を通じ、この地域の古代社会の豊かな実相について地域住民に情報発信をしている（図 2）。

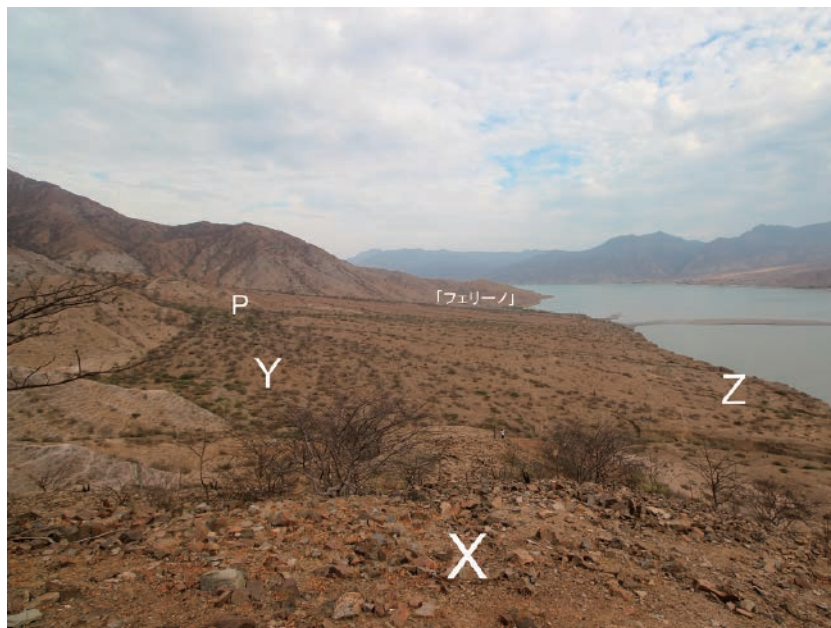


図 1 貯水池に浸食されたモスキート平原に展開するモスキート期の神殿建築群と岩絵



図 2 「モスキート Z」神殿に村人を招いての発掘成果説明会

コンゴーナ遺跡の調査

ワルテル・アルバ（ペルー国立シパン王墓博物館）



コンゴーナの遺跡複合は、北海岸を流れるレチュエ川とモトゥペ川の水源域の近くにある。外見は細長いマウンドで、そこを出自とする原位置不明の円柱状の石彫が2本ある。これらは以前から知られているもので、興味を持った我々はこの場所を調査することにした。

2013年の発掘では、建築物の構造が基壇の連なりであることがわかった。その上部の空間には、建材の流動と倒壊により傷んだ、埋納遺構と半地下式の小規模な部屋群が発見された。建築物に関して、宗教的な性格の変化と対応する、二つの建築フェイズを確認することができた。

最後の時期には建築要素を再利用し、チャビン文化と関係するであろう、たいへん高度な建築システムを発展させた。またその仮説を裏付けるような図像を伴う、石彫群も配置された。おそらく人間が姿を隠せる

地下の小空間群は、神託所として機能したのだと考えられる。

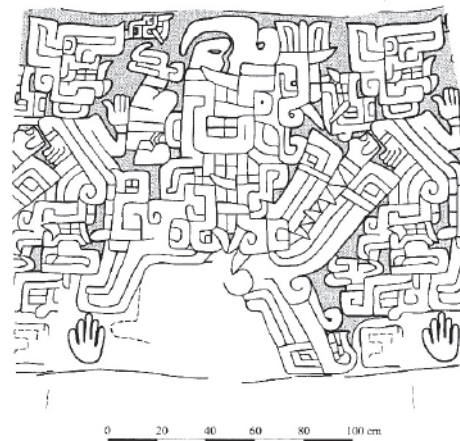


図1 コンゴーナ遺跡の石彫（Watanabe 2010）



図2



図3



図4



図5



図6

図2、3、4、5、6 コンゴーナ遺跡の発掘

インガタンボ

—— 形成期における北のフロンティア、
社会開発のポテンシャル

山本 睦（山形大学）



インガタンボは、ワンカバンバ川の南岸に位置する神殿遺跡である。行政上はカハマルカ州ハエン郡ポマワカ地区に属する。遺跡のすぐそばを流れるワンカバンバ川は、ピウラ州の山岳地帯に端をはし、はじめは南へ、そして次に東へと進みながら、熱帯低地のチャマヤ川やマラニョン川へと注ぐ河川である（図1）。

そのため、ワンカバンバ川流域は海岸、山地と熱帯低地、そして様々な山地間の交流を考察する際に、自然の回廊かつ戦略的な地域として位置づけられてきた。また、北部熱帯低地のハエン地方をふくむ、ワンカバンバ川流域の北側に広がる地域は、中央アンデスと北部アンデス間のフロンティアや文化的境界、あるいは

両者の狭間として、従来考えられてきた。

この意味において、ワンカバンバ川流域は、先史から現在にいたるまで地政学的重要地に位置しているといえる。また、インガタンボは、ペルー最北部で最大規模をほこる重要な祭祀センターであり、地域間交流の中心地でもある。

われわれは、2006 年以來、インガタンボ遺跡で発掘調査を中心とした研究活動を実施してきた。そして、形成期に属する3つの時期の存在を明らかにし、それぞれワンカバンバ期（紀元前 2500 ～ 1200 年）、ポマワカ期（紀元前 1200 ～ 800 年）、インガタンボ期（紀元前 800 ～ 550 年）と名づけた（表1）。なお、インガタ

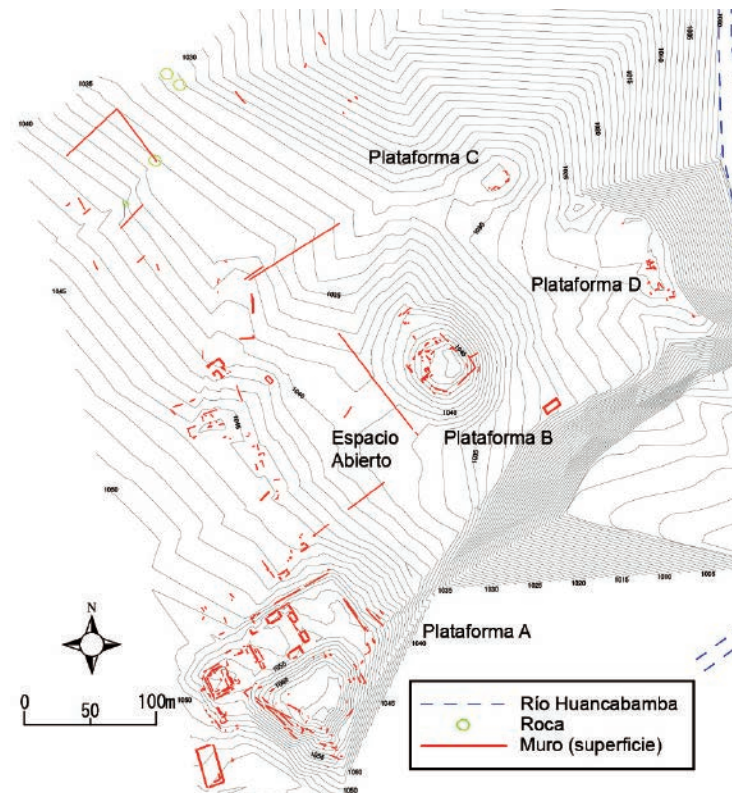


図1 インガタンボ遺跡全体図

ンボでは、形成期以外に、インカ期の活動が存在したことも明らかになっている。

発掘調査の結果、インガタンボの社会変化に際して、ワンカバンパ川流域の社会動態、とくに、祭祀建造物の建設活動や地域内・地域間交流が重要な役割をはたしたことが明らかとなってきた。これらは、インガタンボの社会戦略の一環であったと考えられる。

インガタンボでは、ペルー北部山地のクントウル・ワシやパコパンパといった遺跡と同じく、紀元前 800 年頃に社会組織や技術革新をふくむ、非常に大きな社会経済的变化が生じた。しかし、インガタンボの状況はクントウル・ワシやパコパンパと大きく異なる。インガタンボは、インガタンボ期以降になってより顕著に、ペルー北部の地域間交流網に組み込まれていき、ペルー北部山地の主要センターであるクントウル・ワシやパコパンパからの影響を強くうけながら、変化を遂げたと考えられるのである。

これまで述べてきたように、インガタンボは、クントウル・ワシとパコパンパ、あるいは北部熱帯低地や

北部海岸部の諸遺跡との交流において、戦略的なポジションにあった。このような状況は現在においてもみることができ、ペルー北部海岸のチクラヨ市と北部熱帯低地のハエン市を結ぶ幹線道路が、インガタンボの近くを通っている。そのため、インガタンボ遺跡を保存整備し、公開・活用していくための下地はそろっているともいえる。

その一方で、インガタンボのプロジェクトは、調査の開始以来、地元の人々や自治体の支援や協力をうけながら、実施してきたという経緯がある。そして、とくにポマワカ地区の教育機関と調整を行うことで、地元住民、とくに幼稚園から高校生までを中心とした遺跡見学会を企画してきた。現時点では、調査後に発掘区の埋め戻しをおこなっているため、われわれの調査時を除いて、インガタンボで遺構を目にすることはほとんどできない。しかし、大規模な神殿遺跡かつ大都市からのアクセスも比較的良好なインガタンボは、将来的に、修復保存をふくめたプロジェクトを行っていく可能性を秘めた遺跡であるといえよう。

表 1 インガタンボ遺跡と関連遺跡の編年

	Ingatambo	Bagua	Cerro Ñañaniqu	Pacopampa	Huacaloma	Kuntur Wasi
1					Layzón	Sotera
200		El Salado			EL	Copa
550		La Pecca				
800	Ingatambo	Bagua II	Panecillo	Pacopampa II	Huacaloma Tardío	Kuntur Wasi
1000	Pomahuaca	Bagua I	Ñañaniqu	Pacopampa I		Idolo
1200		Morevilla		Pandanche	Huacaloma Temprano	
1500						
2000	Huancabamba					
2500 a.C.						

カハマルカ州ハエン郡のモンテグランデ遺跡の考古学調査とその社会的影響

キリーノ・オリベラ（ペルー・アマゾン学術調査協会）



アマゾンに生活する人々については、半裸の状態で、狩猟や漁労、野生植物の採集をおこなうバンドや部族に属する人々であるといったようなイメージが常にもたれてきた。また、アマゾンの土壌の不毛さや深い植生は、集約的な農耕の発達を妨げた主要因であるとされ、それによって、ペルーの海岸部や山岳地帯でみられたような高度な文化をもつ複雑社会が出現しなかったとも考えられてきた。しかし、わたしがカハマルカ地域のモンテグランデ遺跡において実施した考古学調査（2010～2018年）によって、現実世界と超自然的世界のさまざまな領域を表現した螺旋形の複雑な建造物が発見された。神聖なイデオロギーの下で構築されたと考えられる。生のはじまりとおわりが収束したようにもみえる螺旋形の建造物の中心部には、神殿の宗教的ヒエラルキーの最上位にあった人物が埋葬されて

おり、約5300年前という世界最古のカカオの痕跡もみついている。

モンテグランデ遺跡における上記の発見の社会的影響は大きく、その成果は、ペルー国内のテレビや新聞、雑誌だけでなく、チリ、ドイツ、ブラジル、イタリア、スペインの雑誌といった多くのメディアにもとりあげられた。アメリカ合衆国の雑誌のなかには、モンテグランデ遺跡に関する9ページの特集記事を組んだものもある。また、2018年10月6日には、アメリカ合衆国ニューヨーク州グレンコープ市で、ティモシー・テンケ市長とニューヨーク州議会議員のチャールズ・D・ラヴィーン氏から表彰もされた。さらに、2013年8月に上海で開催された中国科学アカデミーの考古学フォーラムでは、その年の世界における考古学の10大新発見の1つに、モンテグランデが選ばれている。



図1 モンテグランデ遺跡のらせん状構造物



図2 ドローンで撮影したらせん状構造物

ナスカ台地の調査とアハの地上絵の保存活動



坂井正人（山形大学）

ホルヘ・オラーノ（パリ第1大学）

ナスカ台地の現地調査

ナスカ台地は、河谷と山に囲まれている。台地の北にはインヘニオ河谷、南にはナスカ河谷があり、両河谷は台地の西で合流する。一方、台地の東にはアンデス山脈が広がっている。ナスカ台地で最初に地上絵が制作されたのは形成期末期である。当時の人々がナスカ台地を縦断するために用いたルートは、3種類ある。これらのルートは地上絵と密接に結びついていたことが、現地調査によって明らかになった。

一つ目のルートはナスカ台地の東部を通る。丁度、アンデス山麓にある丘の近くを通過する。このルートの北端にはインヘニオ河谷のエストゥディアンテス遺跡があり、南端にはナスカ河谷のラ・ティサ遺跡がある。このルート上には、「ラクダ科動物の地上絵」、「アヒルの地上絵」、「宇宙飛行士の地上絵」が分布している。これらの地上絵は丘の斜面に描かれているので、付近の平地に立てば、そこにどのような地上絵が描かれているのかを把握することができる。また、これらの地上絵は等間隔に分布しているので、ナスカ台地を移動する際の目印であったと考えられる。

二つ目のルートは、ナスカ台地の西部にある複数の小道である。小道沿いには、小型の動物地上絵が複数分布している。これらの地上絵はゆるやかな斜面部に描かれたので、人間の目の高さからでもその形を認識することができる。そこでこのルート上の地上絵も、台地を移動する際の目印だったと考えられる。小道上に分布する土器を分析した結果、このルートは形成期末期から後期中間期まで利用されたことが判明した。

三つ目のルートは3本の「直線の地上絵」によって構成されている。全長約15キロで、幅は20～40mである。このルートの北端にはインヘニオ河谷のラ・ベンティーヤ遺跡があり、南端はナスカ河谷の源流であるアハ川とティエラス・ブランカス川が合流する地点である。川の合流地点は、現代のアンデスの民族誌で

は「ティンクイ」と呼ばれる聖域である。このルートも形成期末期の土器から後期中間期まで使われたことが、分布していた土器の分析から明らかになった。

以上より、ナスカ台地を縦断する際に、移動ルートから小型の動物の地上絵を見る行為が、形成期末期から重視されたことは明らかである。一方、ナスカ前期になると、地上から全体像を一望できないほど巨大な動植物の地上絵が制作された。このタイプの地上絵は、その後、直線の地上絵によって切断される場合が多い。これは形成期末期の地上絵には見られない現象である。ナスカ台地における地上絵をめぐる活動は、地域社会の住民間の社会関係を表象するために行われたのではなく、これらの活動によって現実社会に影響を与えることが意図されたと考えられる。

形成期の地上絵は1500年以上にわたって、ナスカ台地周辺に住む人々に影響を与え、台地を歩いたり、地上絵を見たり、地上絵を切断したり、地上絵で土器を破壊するように人々を駆り立ててきた。これらの活動を通じて、住民は従来の社会関係を受け入れたり、否定したり、新たな関係を築いたと考えられる。そのため、ナスカの地上絵は、1500年以上にわたって、この地域の住民にとって不可分の存在であった。

アハ地区の地上絵の保護活動

山形大学ナスカ調査団は、ナスカ市街地のすぐ近くにあるアハ地区で発見した地上絵を保護するための活動をここ数年実施している。この地区にある丘の斜面には、40点以上のラクダ科動物の地上絵が集中的に描かれている。これらの地上絵を保護するための活動を、ペルー文化省との間で締結した特別協定に基づいて実施している。まず、アハ地区の地上絵が分布する区域に境界杭と標識を設定した上で、地上絵を保護するための遺跡公園を建設した。その一方で、この地区に分布する地上絵を適正に保存するための方法を開発する

ために、日本とペルーの保存科学の専門家と共同で現地調査を実施している。

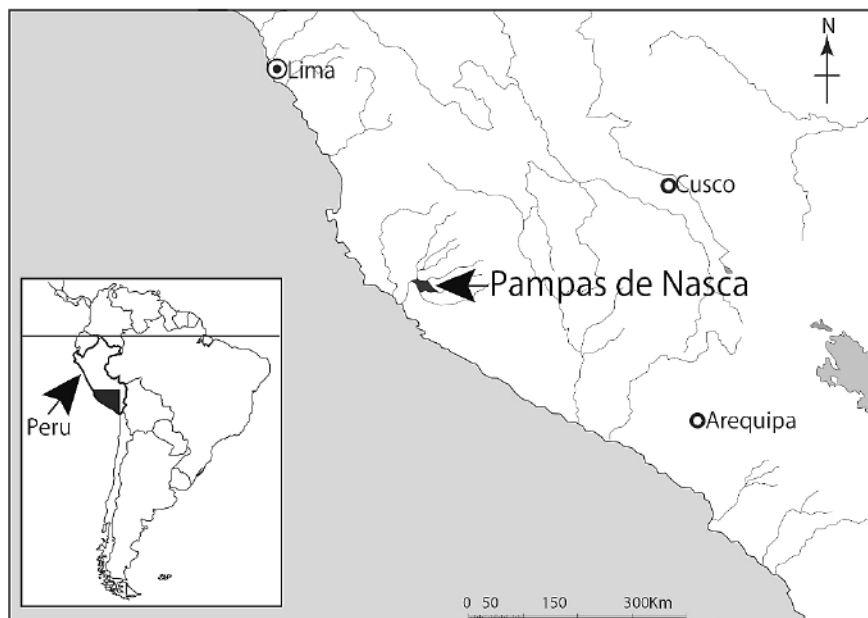
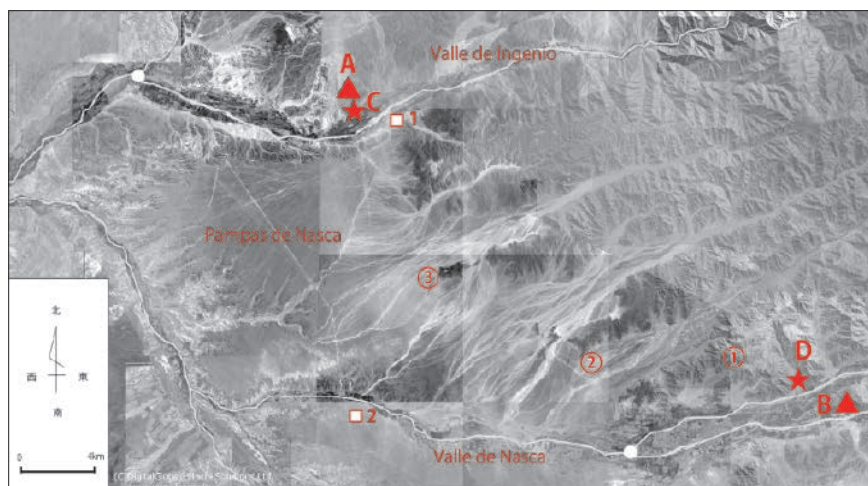


図 1 ペルー南海岸とナスカ台地



- | | |
|------|------------------------------|
| 山 | ▲ A：カレラ山、B：ポング山、 |
| 考古遺跡 | ★ C：エストゥディアンテス遺跡、D：ラ・ティサ遺跡 |
| | □ 1：ベンティーヤ遺跡、2：カワチ遺跡 |
| 地上絵 | ① “ラクダ科動物”、② “アヒル”、③ “宇宙飛行士” |

図 2 ナスカ台地および周辺部における地上絵・考古遺跡・山

パルパの地上絵の調査・管理・保護

ジョニー・イスラ・クアドラド
(ペルー文化省ナスカー・パルパ地区管理計画事務所)



パルパの地上絵はペルー南海岸イカ州の砂漠台地と斜面に分布し、ナスカの地上絵に次いで、二番目に地上絵が集中している。またナスカの地上絵と同様に、1994年にユネスコの世界遺産リストに登録された。

パルパの地上絵は、ナスカの地上絵と同じ文化伝統に属し、文化的に重要な表現形式である。パルパの地上絵は、パラカス期（前800～前200年）とナスカ期（後1～650年）というアンデス文明の主要な時期に繁栄した。また両時期の中間期であるトバラ期（前200～後1年）にも繁栄した。

パルパの地上絵の中で際立っているのは、ナスカの地上絵と同様に、直線、台形、具象的な図像である。特に動物図像、擬人的な図像はパルパ谷に接する山や台地の斜面に描かれ、世界的な有名なナスカの地上絵よりも全て古い。

ナスカの地上絵の保護に生涯を捧げた有名なドイツ人研究者マリア・ライヘが、ポール・コソックと一緒に1940年代にパルパで調査を開始したのはパルパである。このことを考慮に入れると、1926年に地上絵は学術的に発見されて以来、パルパの地上絵はあまり調査されていないことになる。この意味では、パルパ地区にあるクレスタ・デ・サクラメントの地上絵を最初に図面化して研究したハンス・ホルクハイマーの業績（1947）は際立っている。

1940年代以来、マリア・ライヘの歩みをたどってみると、その研究と調査の大部分はナスカ台地に集中し、そこでサル、クモ、ハチドリなどの目立つ地上絵を発見した。この点において、マルクス・ラインデルを団長とするナスカ・パルパ考古プロジェクトによって実施された研究は優れている。このプロジェクトでは、パルパの地上絵の大部分を登録・記録した。またこの

仕事を、カルシュテン・ランベルズはさらに展開して、詳細な分析を行った。これらの研究が基礎になって、パルパの地上絵は、水の儀礼と豊穡と関係する文化景観の一部となっていることが明らかになった。同様のことはナスカの地上絵についても言える。

一方、ペルーにとって長い間忘れられた場所であったパルパの地上絵は、ナスカの地上絵とともに、人間活動による破壊を含む様々な影響を受けてきた。公共事業や私的な工事、農地の拡大、公式・非公式な鉱山開発などによって、地上絵に取り返しのつかない被害を与えてきた。

こうした状況を踏まえれば、現時点ではこれらの事実を列挙するだけでは十分ではない。過去にさかのぼることができないので、行動することが一番大切である。このような観点から、文化省は、私が担当する管理計画を通じて、無計画な都市と農村の拡大が観察される地域において、考古遺跡と古景観の境界画定と標識設定に関する具体的な行動をパルパ市において実施してきた。

特に計画されていない都市と農村の成長が観察される地域において、パルパ州における遺跡と風景の境界画定とマーキングに関する具体的な行動を取ってきた。同時に、地上絵の主要なグループをきれいにして保存する作業が始まった。同時に、主要な地上絵の価値を高めるために、それらをきれいにして保存する作用がはじまった。

最後に、地上絵の研究・保存・修復ははじまったばかりだが、短期間のうちにナスカと同じレベルに達したいと考えている。ドローンを用いた地上絵の登録はまだ新しく、調査研究と保護活動の過程で導入されたにすぎない。

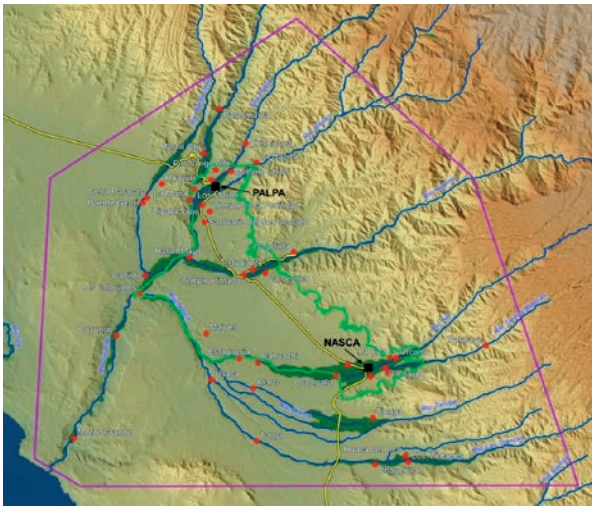


図1 地上絵の保護地区

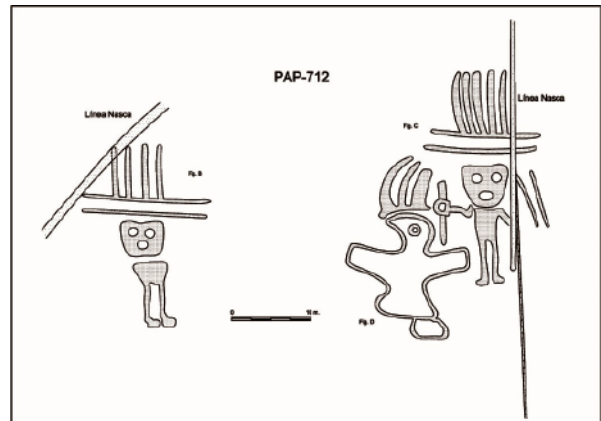


図2 パルパの地上絵（バラカス期）



図3 シャチの地上絵（バラカス期）修復作業完了前



図4 シャチの地上絵（バラカス期）修復作業完了後

アンデス中央高地はチャビン現象の周縁か？

—— アヤクチョ地方の新たな発見より

松本 雄一（山形大学）



ユリ・カベロ・パロミーノ（ペルー国立サン・マルコス大学）



アンデス考古学において、形成期中期から後期（前1200～前250年）という時代は、神殿を中心として社会が営まれ、階層化や分業などのより複雑化した社会組織が出現する重大な画期であったとされている。このような変化は、ペルー中央高地の大神殿、チャビン・デ・ワントル遺跡にちなんでチャビン現象と呼ばれているが、日本調査団によるペルー北高地のクントウル・ワシ遺跡、パコパンパ遺跡の長期にわたる調査から得られたデータはこのような変化がチャビン・デ・ワントル以外の他地域においても生じたことを実証的に示し、地域的多様性の重要性を新たな問題として提起している。

このような学史の流れの中であって、ペルー中央高地南部の同時期はこれまで半世紀もの間、「周縁」あるいは「村落社会」などとみなされ、中央高地、北高地をはじめとする他地域で起きた社会発展から取り残された地域であるとみなされてきた。その一方で近年の理化学的分析の進展により、同地域はチャビン現象の中で遠隔地間交易の主要な産物であった黒曜石と辰砂の産地であることが明らかとなっており、「遠隔地交易の重要地域」と「社会発展に取り残された周縁」という二つの両立できない視点が併存する状況であった（図1）。そこで発表者は、中央アンデスの先スペイン期において最も重要な黒曜石産地であるキスピサ鉱山が位置するアヤクチョ地方に焦点を当て、2007年からカ

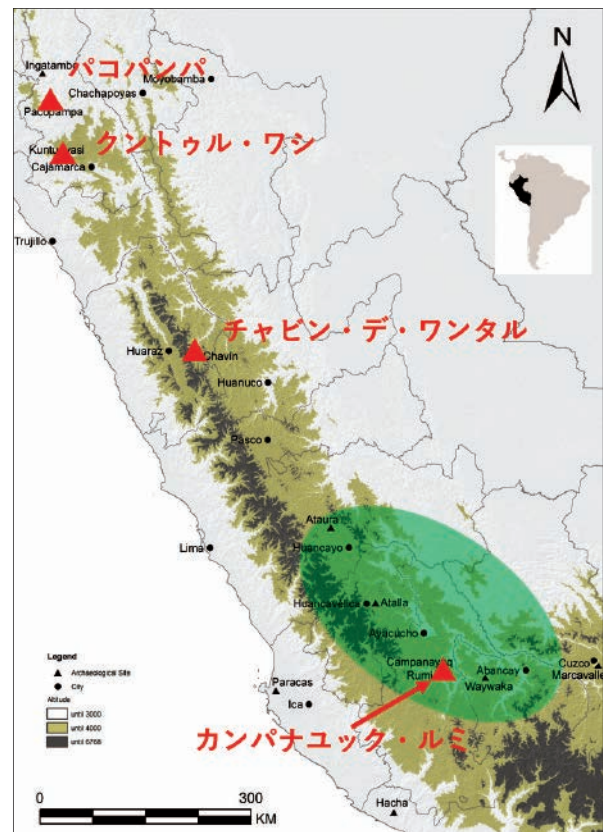


図1 ペルー中央高地南部とカンパナユック・ルミ遺跡

ンパナユック・ルミ遺跡と周辺遺跡の踏査を行ってきた。

これまでの5シーズンにわたる調査によって、カンパナユック・ルミが、中央高地南部においては最大級の規模を有する神殿であり、その歴史が中央高地のチャビン・デ・ワントルと密接な関係にあることが示された。カンパナユック・ルミは、前1300年頃には、小規模村落として成立していたが（先プラットフォーム期：前1300～前950年）、前950年頃にチャビン・デ・ワントルの建築的な影響を受けたU字型の大規模神殿を中心とした社会に変容する（カンパナユックⅠ期：前950～前700年）。前800～前700年頃には、よりチャビン・デ・ワントルの影響が強まり、建築以外にも物質文化の様式や儀礼行為の実践の点で類似性が強まる（カンパナユックⅡ期：前700～前450年）。注目すべきはこのような変化が、チャビン・デ・ワントルのみならず、パコパンパ遺跡やクントウル・ワシ遺跡で確認された社会変化のプロセスと軸を一にしているという点である。特に、「前800～前700年頃を境として個人に対応する装飾品の出土や副葬品を伴った埋葬が出現し（図2）、社会の階層化を示すデータが明らかに増加する」点は、上記の大神殿での発掘データと明確に対応しており、アヤクチョ地方がチャビン現象の

中で「周縁」のイメージでとらえることができないことを示している。

このような新たな成果は、同地域の形成期遺跡の文化財としての価値をも変容させつつあると言える。アヤクチョ地方全体としてはワリ帝国（後600～1000年）に関わる遺跡、遺物が文化財として注目されており、地元のビルカスワマン郡ではインカ帝国とそのライバルと目されたチャンカ文化の遺跡に関心が集まっている。このような脈絡においてカンパナユック・ルミの調査成果は、形成期神殿の文化財としての価値を示すものとして認識されつつあり、人々が訪れる場所になりつつなる。しかし一方でその文化遺産としての活用は今後の重い課題として残されていると言わざるを得ない。見学者のための遺跡自体の整備も不十分なものであり、さらに博物館に収める価値のある出土遺物の多くは未だに十分に活用されていない。日本やペルーの調査団を中心として行われた重要なプロジェクトにおいては、このような学術的成果が文化財の保護と活用に適切に用いられることで、現代の地域社会に貢献できることが示されており、アヤクチョ地方の形成期神殿に関してもその可能性が認識されるべきであろう。



図2 カンパナユックⅡ期出土の金製品

地上の遺跡と埋もれた遺跡

—— 遺跡観光に関する一考察

渡部 森 哉（南山大学）



世界には多様な考古遺跡がある。大きく2つに分けることができる。1つは地表から見える遺跡であり、ピラミッド、基壇を伴う神殿、チュルパなどが例である。もう1つは地表からは見えない埋もれた遺跡であり、例として、縄文文化の竪穴式住居、墓地などが挙げられる。この発表では、この2つのグループの遺跡を比較して、観光における遺跡の意味を考察する。ペルー北部高地カハマルカを事例とする。

カハマルカ地方にはワカロマ、ライソン、チョンドルコなど、地表から見えるマウンドタイプの遺跡が多くあり、また埋もれた遺跡も多くある。タンタリカはカハマルカ地方における最も保存状態の良い遺跡の1つである。屋根付きの壁、木製楣付きの壁龕、などがある。この遺跡を訪れ歩いてカハマルカの歴史を想像することは価値あることである。しかし、この遺跡はとても遠いところにあり行くのが難しい。周りに人が住んでいないため、保存状態が良いのである。一方、

カハマルカ盆地ではバーニョス・デル・インカ遺跡など埋もれた遺跡が多くある。この遺跡は地表からは何も見えないが、カハマルカ中期の大遺跡である。都市部に位置し、保存状態は悪い。放棄された時に完全に埋められている。カハマルカ盆地内には地面の下に埋もれた遺跡が多くあると考えられる。もう1つの例はエル・パラシオ遺跡である。地表からはほとんど何も見えないが、100ヘクタール以上の広がりを持つ。この遺跡はクスコのように現在人々が生活している村の中にある。

観光客にとって、地表から見える遺跡がより魅力的である。しかしそうした遺跡はしばしば遠い場所にあるため訪れるのが難しい。一方、町のそばには埋もれた遺跡が多くあるが、地表から何も見えないため、観光客が理解できるようにするためには発掘の後に復元をする必要がある。いずれにせよ、過去のイメージは保存状態、考古学者による復元にかかっている。

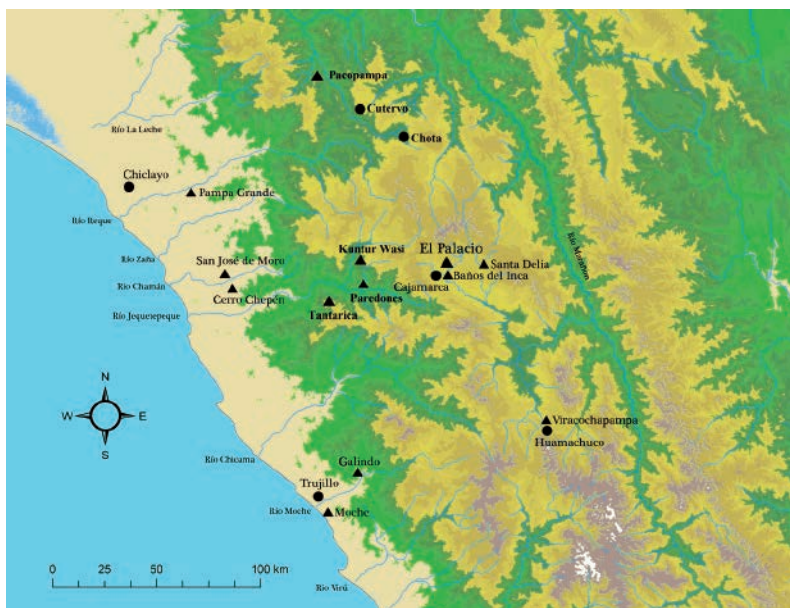


図1 北部山地カハマルカ州の遺跡



図2 エル・パラシオ遺跡



図3 タンタリカ遺跡

変貌の時代

——ヘケテペケ川流域のモチェ社会の崩壊におけるワリとカハマルカ的作用

ルイス・ハイメ・カスティーヨ（ペルー・カトリカ大学）



後 700 ～ 850 年にペルー北海岸のモチェ社会は崩壊した。モチェ社会の崩壊と、その後のランバイエケ国家、チムー国家の成立の間の移行期に新たな文化が形成された。モチェ社会の崩壊と、カハマルカやチャチャポヤスの南などペルー北部高地においてワリ文化の最初の証拠の出現は同時期である。時期が一致するのは単なる偶然かもしれないし、モチェの威信と影響が減少した後に空白期があるため見かけ上一致すると見えるのかもしれない。もっとあり得るのは、拡張と崩壊という2つの現象が、コインの裏と表の関係にあり、崩壊が原因で拡張が結果である（あるいは拡張が原因で崩壊が結果である）という可能性だ。ワリの存在は北海岸の8世紀から9世紀にかけて起こった大混乱に

おける唯一の現象ではない。南のモチェ国家の北への拡張はモチェV期の土器と共伴しており、その証拠は特にパンパ・グランデ遺跡に見られるが、ヘケテペケ川流域にも少し見られる。こうした国家の拡張は、中期ホライズンの初期を特徴付ける大変革を表す別の現象である。

この時期に優位に立つ他の主体は、カハマルカである。カハマルカは文化的相互交流、新しいアイデンティティの形成において重要であり、目立つ存在であり、特にヘケテペケ川の北部で顕著であった。この短い報告では、問題の射程、これらの現象が示す物質的現れ、この時期の文化的相互交流が生み出した結果、について述べ、モチェの崩壊の原因を素描する。



図1 サン・ホセ・デ・モロ遺跡の位置

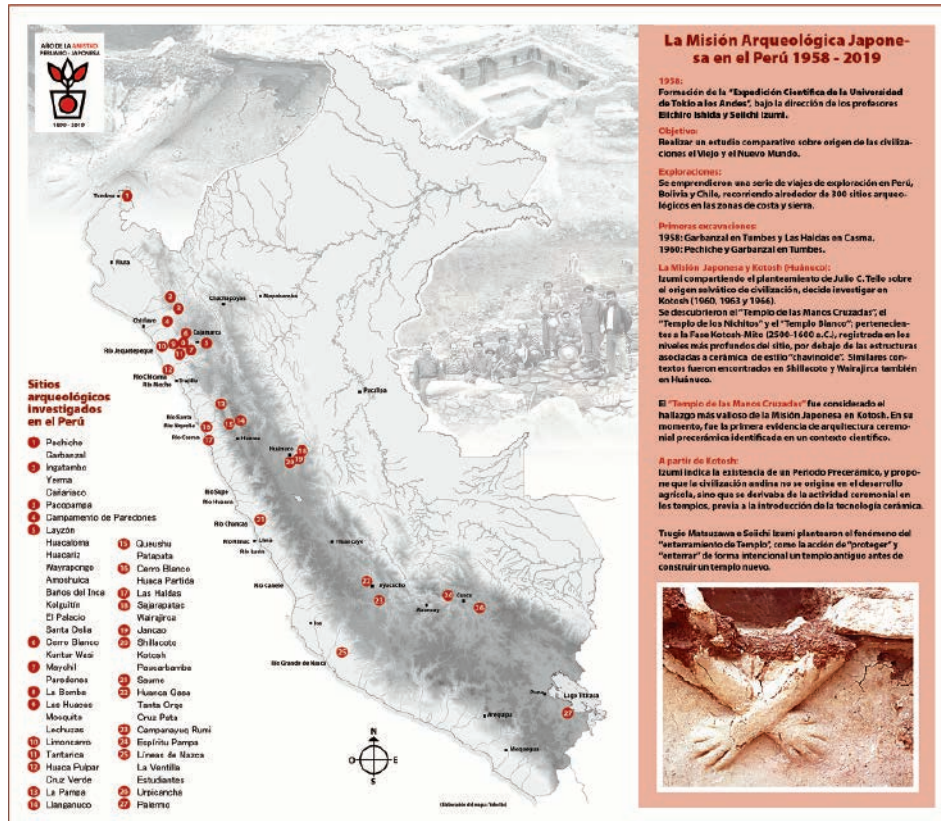


図2 サン・ホセ・デ・モロ遺跡



図3 サン・ホセ・デ・モロ遺跡出土のカハマルカ様式の土器

リマ ポスター発表パネル



日本調査団が発掘した遺跡（1958～2019）



日本調査団が発掘した代表的な遺跡。左からワカロマ、クントウル・ワシ、パコパンパ。

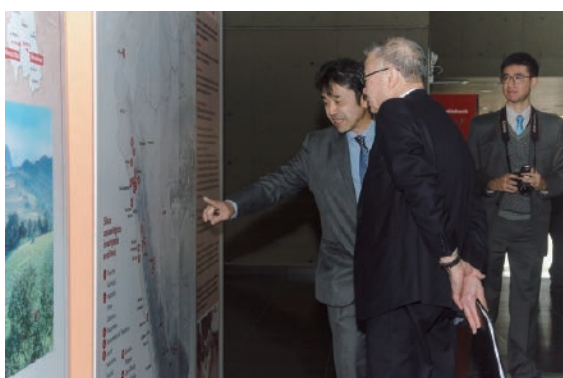
会場のようす



オープニングセレモニー



基調講演



土屋大使への説明



テレビ局のインタビュー



シンポジウムの会場



シンポジウムの発表者

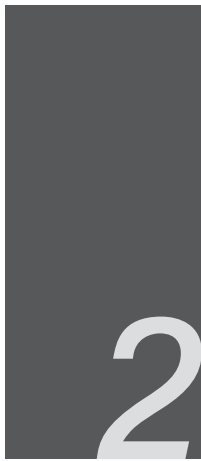
報道



Prensa Nikkei 2019年8月14日



Peru Shinpo 2019年8月15日



展示

『カハマルカにおける日本調査団 ——40 年におよぶ考古学調査』

実施期間 2019 年 9 月 5 日～2020 年 8 月上旬（予定）

実施会場 文化省カハマルカ支局、カハマルカ市

主催：国立民族学博物館・文化庁・在ペルー日本大使館・ペルー文化省・日本考古学調査団

共催：文化遺産国際協力コンソーシアム

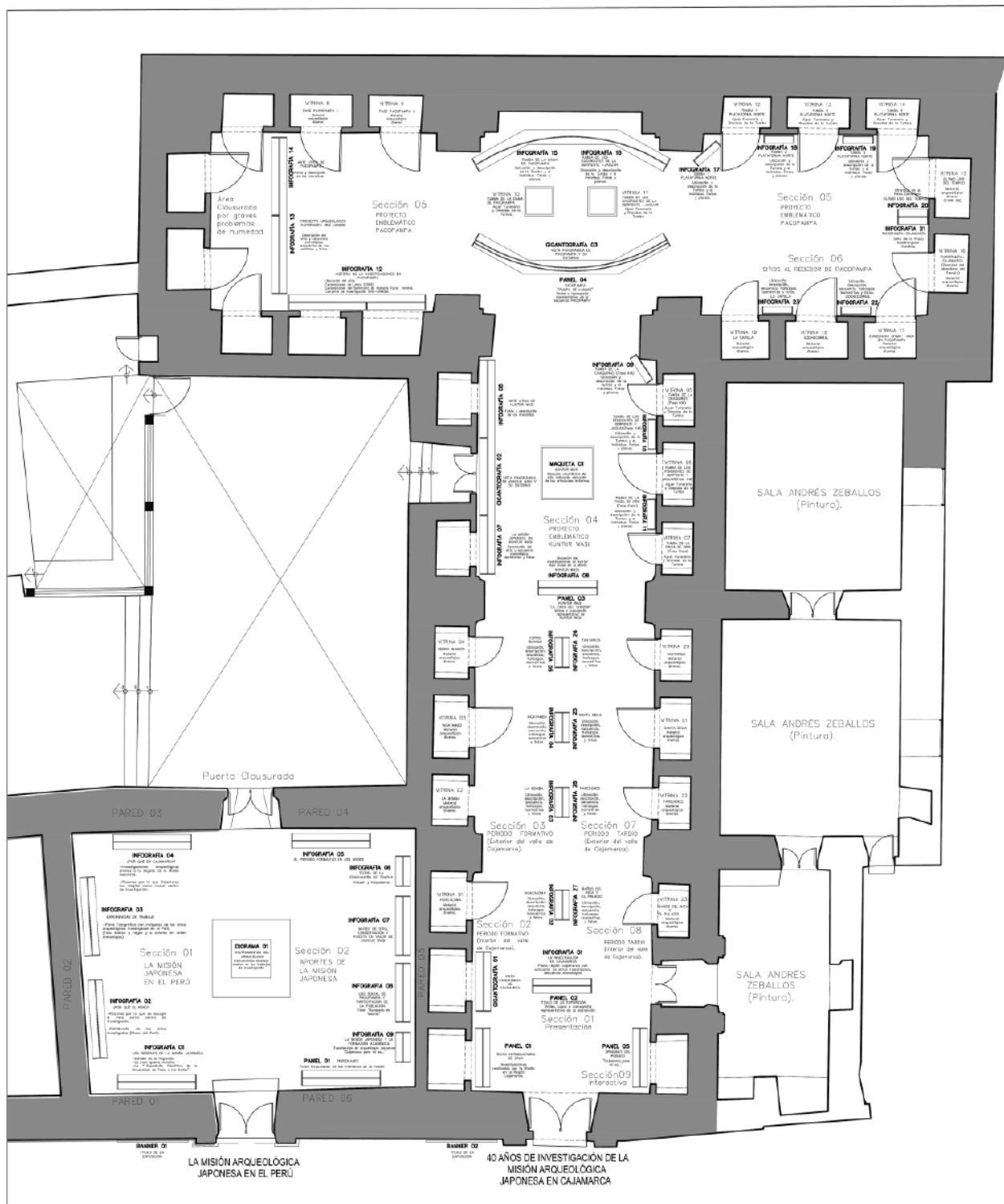
協力：古代アメリカ学会

ペルー北部高地カハマルカ州の州都カハマルカ市において展示を実施した理由は、カハマルカ州が、1979 年以来、日本調査団が継続して調査を実施してきた場所であり、本年で 40 周年を迎えたためである。会場はペルー文化省が無償で提供する形となったが、展示および警備については日本側が負担することとなった。

文化省カハマルカ支局が事務所を構えるバレン教会複合内の旧男性用病棟という歴史的建造物内を利用した展示では、第 1 室において、1958 年以來の日本調査団の歩みや、過去に調査に加わった両国の団員からのメッセージなどが披露された。展示空間の大半を占める第 2 室では、40 年間の発掘調査によって得られた出土品を展示した。

9 月 5 日の開幕式には、土屋定之特命全権大使、文化省文化遺産課長、カハマルカ州知事、カハマルカ市をはじめとする複数の市長が参列し、挨拶をするとともに、日本調査団に対して数多くの表彰が行われた。引き続き、大貫良夫による記念講演が行われ、土屋定之特命全権大使、文化省文化遺産課長、カハマルカ州知事、關雄二によるテープカットにより展示の公開が開始された。

当初、会期は 3 ヶ月ほどを予定していたが、2 ヶ月間で 3 万人の入館者を数え、現地のメディアでも大きく取り上げられるなど反響が大きいため、ペルー文化省側から会期延長の希望が表明され、現在のところ、2020 年 8 月上旬まで延長する予定となっている。



展示場平面図

開幕式



開幕セレモニー



大貫良夫教授による基調講演



基調講演に耳を傾ける聴衆



カハマルカ州知事より表彰を受ける関（左）と大貫（右）



展示場入口



テープカット



関による展示の説明



展示場の風景



導入部の展示①



導入部の展示②



クントウル・ワシ遺跡コーナー



パコパンバ遺跡コーナー①



パコパンバ遺跡コーナー②



パコパンバ遺跡コーナー③

Seiichi Izumi y el inicio de las investigaciones en el Perú

1915
Seiichi Izumi nació en la ciudad de Tokio. Estudió Sociología en la Universidad Imperial de Keio (actual Universidad de Keio), interesándose rápidamente por los estudios de Antropología y Etnología. Al mismo tiempo, desarrolló su vocación por la fotografía y el cine.

1946
Regresa a Japón después de participar en diversas investigaciones sobre las comunidades de asentados en Asia noroccidental y formador de la Primera Expedición Científica de la Universidad de Keio.

1953
Siendo profesor asociado en la Universidad de Tokio, inicia junto a Etsuro Ishida (director de la Sección de Modernización del Departamento de Antropología Cultural).

1955
Viaja al Perú por encargo de la UNESCO para analizar las condiciones de vida de los inmigrantes japoneses en América Latina.

1956
Visita también Bolivia y Perú, al llegar a Lima conoció a Yoshitomo Amano, destacado estudioso de la cultura peruana. Ambos visitaron varios sitios arqueológicos, quedando maravillados por la diversidad cultural y medioambiental en los Andes.

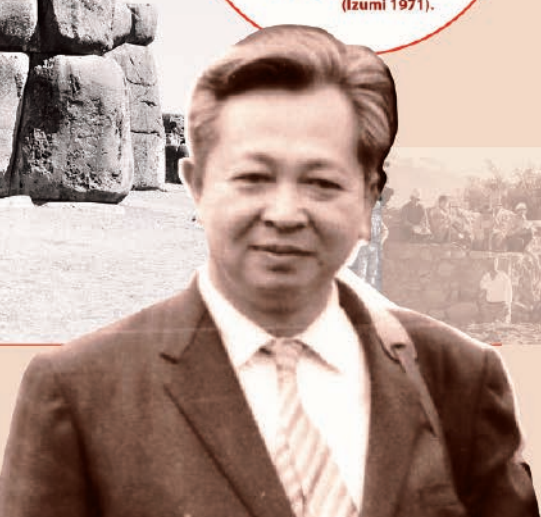
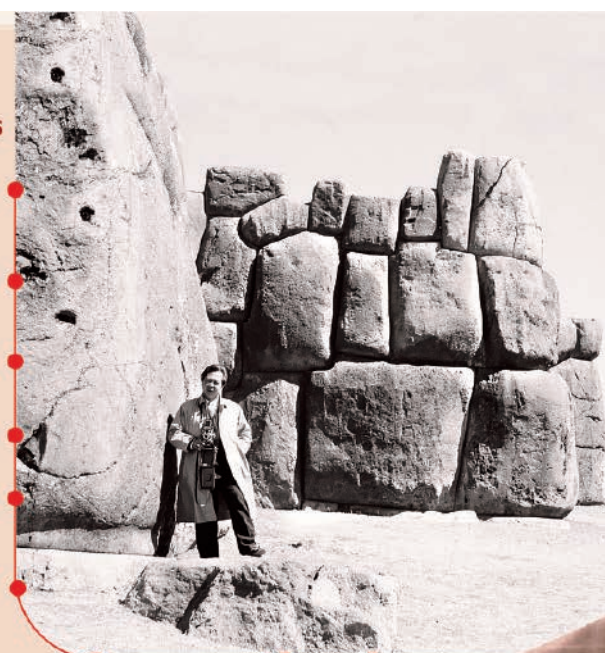
1958
Formó parte de la "Expedición Científica de la Universidad de Tokio al Perú" dirigida por el profesor Etsuro Ishida. Iniciando una serie de viajes de reconocimiento en Perú, Bolivia y Chile.

1960
Asume la dirección de la expedición e inicia las excavaciones en Huari (Huánuco), donde se realizó el descubrimiento del "Templo de las Manos Cruzadas". Iniciando una larga tradición de investigaciones japonesas en el Perú. Además, realizó estudios sobre la vida de la colonia japonesa en el Perú por encargo del Ministerio de Relaciones Exteriores Japonés.

1964
Recibió la condecoración de la Orden del Sol en el grado de Gran Cruz de parte del Estado Peruano en reconocimiento a su destacada labor científica en el país.

1970
Poco antes de su fallecimiento el profesor Seiichi Izumi fue nombrado Rector del Instituto de Estudios Vicerrector de la Universidad de Tokio.

Después de despedirme del Sr. Amano, en el avión a Bolivia decidí abordar en serio el estudio de civilización antigua del Perú. Bien sabía que abordaría "en serio" no sería fácil. En Japón no se había establecido nada en cuanto a la arqueología sudamericana, ni siquiera había libros ni materiales. ¿Hasta dónde podría llegar partiendo de cero? Además, ya tenía 40 años. Estaba preocupado. Sin embargo, tuve la sensación de que aquel desierto debajo del avión me estuviera llamado. (Izumi 1971).

第2代日本調査団長 泉靖一の足跡

Kazuo Terada y el inicio de las investigaciones en Cajamarca

Quando Terada asignó el nombre de "Expedición Científica Japonesa a la América Nuclear", tenía como objetivo ampliar las investigaciones hacia América Central, y elaborar el estudio comparativo entre esta área y la región andina de América del Sur. Sin embargo, los descubrimientos realizados en Cajamarca (Huacaloma y Layzón) fueron tan importantes que tuvo que abandonar esta idea.

1951
Kazuo Terada (Fukuoka, 1928) se graduó como antropólogo filólogo en la Universidad de Tokio.

1956
A solicitud del profesor Ishida inició su labor como asistente del nuevo curso de antropología en la Universidad de Tokio. Recibió del profesor Izumi la responsabilidad de estudiar los nuevos asentamientos de las nuevas investigaciones a realizarse en los Andes.

1958
Viajó al Perú como parte de la "Expedición Científica de la Universidad de Tokio al Perú" dirigida por el profesor Etsuro Ishida. Realizó excavaciones en El Cuzco (Cuzco) y Las Haldas (Cuzco), junto a los reconocidos arqueólogos Cirilo Huaypaya y Rina Jung.

1960
Retomó las investigaciones en los sitios de El Cuzco y Pucallpa, así como formó parte del equipo interdisciplinario que realizó las excavaciones en Huari.

1962
Habiendo sido nombrado en el Departamento de Antropología Cultural de la Universidad de Tokio, se dedicó a la enseñanza y a la investigación. Un año después formó parte de dicho departamento como profesor asistente.

1966
Recibió el título de Profesor Emérito de la Universidad Nacional Mayor de San Marcos, desempeñándose como profesor visitante en el Departamento de Antropología de la Facultad de Letras y Educación.

1975
Después del fallecimiento del profesor Izumi en 1970, Kazuo Terada reorganizó la misión bajo el nombre de "Expedición Científica Japonesa a la América Nuclear". Dirigió las excavaciones en La Pampa (Arequipa) y viajó a Cajamarca junto a Yoshio Onuki y Roger Riviere. Interesados en Huacaloma.

1986
El gobierno peruano reconoció su contribución al Perú otorgándole el grado de Gran Oficial de la Orden al Mérito por Servicios Distinguidos. Lamentablemente, el profesor Kazuo Terada falleció repentinamente en el año 1987.

1979
Inició las excavaciones en Huacaloma, junto a Onuki, Rina, Yoshio, Matsumoto y Sakai. Además, realizó exploraciones en Escorial con el objetivo de futuras excavaciones.







第3代日本調査団長 寺田和夫の足跡

EL MUSEO KUNTUR WASI

El éxito de las investigaciones en Kuntur Wasi (Provincia de San Pablo, Cajamarca), y el hallazgo de valiosas tumbas con objetos de oro y ofrendas especiales, marcaron un importante hito en el estudio del Periodo Formativo en el norte del Perú.



Registro fotográfico de una Tumba en Kuntur Wasi.

Esto fue motivo de orgullo y felicidad para todos los miembros de la comunidad, quienes brindaron su apoyo constante al equipo de la Misión Arqueológica Japonesa desde el año 1988.

Los pobladores habían cumplido firmemente las indicaciones del INHERITO Nacional de Cultura de Cajamarca sobre la preservación del templo desde 1977.

La población local manifestó su sincera deseo de cuidar estas tumbas en su tierra, por lo cual la Misión solicitó la autorización del gobierno peruano para trabajar tan pronto como le permitiera el Japón. Estando allí, se realizó "La exposición Kuntur Wasi", que fue visitada por más de 240 mil personas. Gracias a estas contribuciones económicas, sumadas a la colaboración de algunas empresas japonesas en Lima, y al apoyo de la Embajada del Japón en el Perú, se logró reunir la cantidad necesaria para la construcción del añorado Museo Kuntur Wasi.

Dr. Fackio Ovaldi y los miembros de la Asociación Cultural Kuntur Wasi.



El museo tiene una extensión de 300 m² de exposición, fue inaugurado el 15 de octubre de 1994, y organizado por la Misión Japonesa a la Asociación Cultural Kuntur Wasi, institución conformada por los habitantes del Centro Poblado Kuntur Wasi, quienes además habían participado en los trabajos de excavación y laboratorio.



En convenio con el Ministerio de Cultura, la Asociación Kuntur Wasi es responsable de custodiar las piezas y administrar el museo. El cual cumple 25 años de edad labor, representando una variedad de objetos recuperados en contextos arqueológicos no alterados, y mostrando una tumba a más de 5 mil visitantes nacionales y extranjeros.



Vista exterior del Museo

Piezas expuestas en el Museo Kuntur Wasi



Actual vista. Panorámica actual del Templo.



RESTAURACIÓN DEL TEMPLO DE KUNTUR WASI.

En el año 2006 por encargo de UNESCO, la Misión Arqueológica Japonesa inició el "Proyecto de Conservación y Restauración del Templo de Kuntur Wasi". Los trabajos se concentraron en el frontón principal, la plaza del templo y la plaza central (sala) del templo. Fueron llevados a cabo por arqueólogos japoneses y peruanos, y culminaron en el año 2013. Actualmente, se encuentra bajo la administración del Ministerio de Cultura.

クントウル・ワシ博物館

El Proyecto Arqueológico Pacopampa y la población local

El Proyecto Arqueológico Pacopampa dirigido por Yoji Seki y Daniel Morales inició sus actividades en el año 2005, en el marco del convenio interinstitucional de investigación entre el Museo Nacional de Etnología de Japón y la Universidad Nacional Mayor de San Marcos (Lima).

Desde sus principios los miembros Centre Poblado de Pacopampa en el Distrito de Queros, la Provincia de Chota, se involucran muy activamente e intervienen en particular activamente durante los trabajos de excavación y laboratorio.

Ellos ya tenían conocimiento de la importancia de Pacopampa, debido a los trabajos arqueológicos realizados por la UNMSM desde la década de los 70.

Tomando en cuenta la experiencia de la Misión Arqueológica Japonesa con poblaciones locales en otros sitios, se decidió buscar las estrategias más adecuadas, que permitieran a la comunidad de Pacopampa aprovechar de la mejor manera posible su patrimonio cultural.



Excavaciones en la cima de Pacopampa (2012).



Dr. Seki explicando las investigaciones en Pacopampa a la comunidad.

Es así que, tras diez temporadas dedicadas exclusivamente a la etapa de investigación, en el año 2014 se iniciaron los trabajos de conservación y restauración de las estructuras ubicadas en la cima de Pacopampa. Para ello, se realizó la capacitación de un grupo de pobladores en las técnicas necesarias para este tipo de trabajo tan especial.

Al mismo tiempo, se habilitaron senderos para el tránsito de turistas y se colocaron paneles informativos en varios puntos del circuito planeado.

Habiendo transcurrido quince años de ardua labor en Pacopampa, podemos decir que el éxito obtenido no solo se ve reflejado en los importantes descubrimientos, sino también y sobre todo, en la estrecha relación de cooperación y confianza mutua, establecida entre los miembros del proyecto y la población, que acogieron con entusiasmo a cada uno de sus participantes.

Además, se ha iniciado un proyecto para la construcción del Centro de Interpretación de Pacopampa, que servirá no solo para presentar la información sobre el sitio arqueológico, sino también sobre las innovaciones, costumbres y tradiciones del pueblo de Pacopampa.

Este proyecto cuenta con el importante apoyo del Gobierno Regional de Cajamarca y de la Gerencia Subregional de Chota, Huánuco y Centro Cruz.

Desde el año 2017 se lleva a cabo el proyecto de investigación "Los Tarcos de Pacopampa", mediante talleres con la comunidad, ayudando a identificar y valorar por sí mismos una gran variedad de expresiones culturales que forman parte del patrimonio cultural local.



Equipo de Investigación (2006).



Habilitación de circuito turística en Pacopampa (2015).



Participantes del proyecto "Los Tarcos de Pacopampa"

Proceso de Restauración en Pacopampa (2015).



パコパンパ遺跡の保存活動

3

シンポジウム

『過去と現在の狭間で

——ペルー北高地・北海岸の文化遺産の研究と保護』

実施日時 2019年9月6日（金） 10:15～18:00

実施会場 文化省カハマルカ支局、カハマルカ市

主催：国立民族学博物館・文化庁・在ペルー日本大使館・ペルー文化省・日本考古学調査団

共催：文化遺産国際協力コンソーシアム

協力：古代アメリカ学会

【プログラム】

10:15～10:30

挨拶 ロクサナ・ジュディ・パディーヤ・マルカ ペルー文化省カハマルカ支局長

挨拶 土屋定之 駐ペルー日本特命全権大使

10:30～12:30 セッション1：カハマルカ文化と北海岸

司会：関雄二（国立民族学博物館）

「イスココンガのカハマルカ人——前50～後550年のカハマルカ民族に関する近年の調査」

ソルシレ・クシカンキ（ハーバード大学）

「カハマルカ3000年間の空間と実践を再構成する——カリャックプーマ遺跡複合の新調査」

パトリシア・チリーノ・オガタ（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）

ジェイソン・L・トゥーヒ（ワイオミング大学）

「ワリ期とインカ期のカハマルカ地方」

渡部森哉（南山大学）

「チョトゥーナ＝チョルナンカップ複合遺跡——考古学調査、保存とコミュニティによる文化遺産の価値づけ」

カルロス・ウェステル・ラ・トレ（ペルー国立ブルーニング考古学博物館）

12:30～14:30 昼食

14:30～16:00 セッション2：ヘケテベケ谷の考古学

司会：山本睦（山形大学）

「クントウル・ワシ遺跡調査と持続可能な文化遺産保護」

井口欣也（埼玉大学）

「ヘケテベケ中流域における調査——ラス・ワカス、モスキート、レチューサス遺跡」

鶴見英成（東京大学）

カルロス・モラレス（ペルー文化省）
ラウル・チョラン（国立トルヒーヨ大学）
「ウディマとコンゴナ——北部山地の形成期の神殿」
ワルテル・アルバ（ペルー国立シパン王墓博物館）

16：00～16：15 休憩

16：15～17：45 セッション3：カハマルカ中北部の考古学

司会：井口欣也

「パコパンパ——14年間の調査と文化遺産保護」
関雄二（国立民族学博物館）
ファン・パブロ・ビジャヌエバ（国立サン・マルコス大学）
ディアナ・アレマン（国立サン・マルコス大学）
マウロ・オルドーニェス（国立サン・マルコス大学）
ダニエル・モラーレス（国立サン・マルコス大学）
「インガタンボ考古学プロジェクト——その軌跡と住民との関係」
山本睦
「ペルー北東部で展開中の二国間をまたぐ考古学調査」
キリーノ・オリベラ（ペルー・アマゾン学術調査協会）

17：45～18：00

挨拶 大貫良夫（東京大学）

イスココンガのカハマルカ人

—— 前 50 ～ 後 550 年のカハマルカ民族に関する近年の調査

ソルシレ・クシカンキ（ハーバード大学）



ペルー・アンデスの北部に位置するカハマルカ盆地は古い時代から現在まで、人と物が行き交う場であった。これはアンデスの地理の中で戦略的な場所に位置しているためである。カハマルカは様々な環境帯にアクセスしやすい自然の飛び地である。カハマルカ文化（前 100 ～ 後 1460 年）は、山地で採れるカオリン粘土を用いた特徴的な白色土器によって特徴付けられ、カハマルカの人々は行った先々でその土器を残した。アンデスの広い範囲にこの文化の証拠はあり、これまで多くはその境界の外側から研究され説明されてきた（Bernuy y Bernal 2008; Bracamonte 2015; Fernández Alvarado et al. 2014; Montenegro 1993; Tsai 2012; Uceda y Morales 2014）。カハマルカについてはワリヤインカなどの他集団の権力の拡張の結果という枠組みの中で、二次的に説明されてきた（Castillo 2000; Chirinos 2014; Castillo y Cusicanqui 2016; Jennings 2010; Rosas 2010; Rucabado y Castillo 2003; Watanabe 2001）。しかし、カハマルカ文化の成立期にあたるカハマルカ早期、前期、中期のカハマルカの文化動態の複雑性を理解する研究は極めて少ない（Joffre 2013; Matsumoto 1993; Ravines 1983, 1985; Seki 1998, 2014; Terada y Onuki 1985; Toohey 2011; Watanabe 2007, 2009）。発表者の研究目的は、アンデス世界におけるカハマルカ盆地の役割を評価することであり、カハマルカ文化の人々の起源から拡張期（前 50- 後 750 年；カハマルカ早期、前期、中期）までを対象とすし、周縁ではなく、カハマルカ文化の中心に焦点を当てる。カハマルカを東西南北の様々な地域からの合流点として捉え、ペルー国境付近の地域との関係のみならず、それを越えたエクアドル山地との繋がり、影響にも焦点を当てる。

カハマルカ文化の早期から中期を対象とし、カハマルカ社会の性質をより理解するため、3 年前からイスココンガ遺跡の調査を行うことにした。この遺跡につ

いてはグロブマンとラビーネスによる先行研究がある（Grobman y Ravines 1985）。この遺跡は 2 つの地区に分かれ、1 つは丘の上部の A 区で、もう 1 つは丘の下部に位置する B 区である。遺跡の性格、空間構造を理解し、機能を特定し、年代を知ることが調査の主目的とした。この遺跡は形成期に始まりカハマルカ中期まで続く。地表でカハマルカ後期の証拠が見つかったが、残念ながら農作業によって破壊されてしまっている。

イスココンガは工芸品製作、住居、そしておそらくビクーニャの供養を伴う祭祀儀礼活動の空間を伴う。ここにはカオリン粘土で上塗りされた石の建築物があり、主に土器製作に用いられるカオリン粘土とカハマルカ社会の間の密接な関係を示している。この遺跡で最も多く見つかった遺物は土器であり、カハマルカ前期のイスココンガ装飾様式、カハマルカ・クラシック・カーシブの土器が目立つ。約 80% が丁寧に整形されたカオリン製の碗であり、他に、瓶、短頸壺、土製皿、コラドール（漉し器）といった粗製土器がある。カハマルカ前期の野焼き施設が確認されており、そこでは顔料、使用痕のある白、土器片などがみつっている。予備的な分析から、紋様に多様性があることが判明しており、土器製作者が多様であったことと関係している可能性がある。つまり装飾モチーフの規格化とは反対の動きである。土器製作のプロセスに多くのアクターが関わっており、単独のあるいは特定の集団が土器製作を担っていたわけではないと言えるだろう。

ラクダ科動物、シカ、クイの骨も大量に出土している。トウモロコシの粒、穂軸、インゲン豆、その他の種子も出土している。カニのハサミ、魚の骨などの外来の要素も、床上、あるいは覆土からみつっている。成人男性の墓が 1 基検出されており、海棲のカニのハサミを副葬品として伴っていた。この人物には頭蓋変

形の痕跡があった。頭蓋変形の証拠はより標高の高いクンペマーヨ遺跡やハムカテ地域でも見つかっている。外来遺物としては他に黒曜石の剥片があり、その原産地はペルー南部である。この遺跡ではカハマルカ早期から黒曜石が見つかっている。イスココンガには様々な空間があり、大部分は日常生活の場であった。ここで人々は日々儀礼を繰り返し、カハマルカ人としてのアイデンティティーを物質化した。それは政治経済構造を保持し、再確認する建築単位であった。

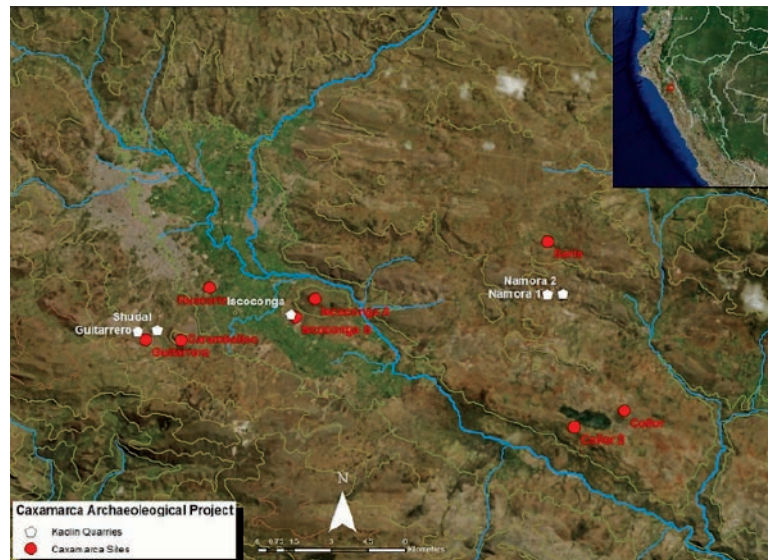


図1 カハマルカ盆地における遺跡分布、および「カハマルカ考古学プロジェクト2019」で調査した粘土の原産地。イスココンガは中心に位置する。

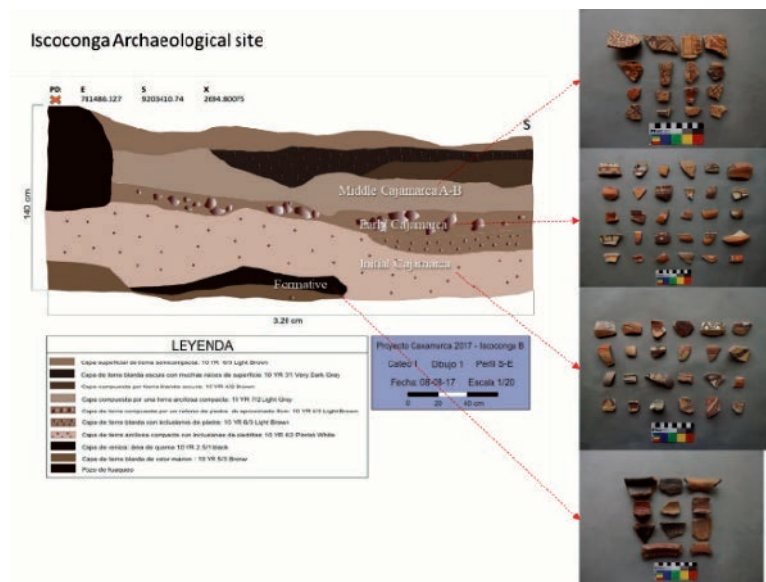


図2 遺跡の断面図。形成期からカハマルカ中期 A-B までの利用が確認できる。



図3 カハマルカ前期、中期の土器。イスココンガ装飾様式。



図4 イスココンガで実施された発掘の全体写真。

カハマルカ 3000 年間の空間と実践を再構成する

——カリャックプーマ遺跡複合の新調査

パトリシア・チリーノ・オガタ（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）

ジェイソン・L・トゥーヒ（ワイオミング大学）



カハマルカ盆地の北東部に位置するカリャックプーマの丘は、洞窟があり岩絵が集中する大遺跡複合として地元では知られている。しかしそれだけではない。少し歩くだけで、丘の頂上や斜面に多くの構造物が広がっていることが分かる。それらはカハマルカ盆地の文化編年の様々な時期に対応する。2015年にカリャックプーマ遺跡複合の調査を開始した。同遺跡複合は、少なくともワカロマ後期（前1000～）から植民地時代初期（後1550年頃）までの痕跡が認められる、長期間にわたって利用された数少ない遺跡の1つである。

これまでの調査はカリャックプーマ遺跡複合の3つの箇所に集中して行った。それは、洞窟1（プマウシユコ）、北斜面の居住域、頂上の円形構造物、の3つである。現在までの調査結果と出土遺物の分析から、食糧の貯蔵や調理のための居住空間、外来の遺物が出土しアクセスの制限された儀礼活動空間、が確認されている。こうした証拠から、カリャックプーマ遺跡複合は、3000年間にわたるカハマルカ人の日常生活を映し

出していると言える。さらに、その歴史の大部分の間、カハマルカの景観において社会政治的、儀礼的に重要な遺跡であった。



図1 カリャックプーマ遺跡複合の頂上部の円形構造物



図2、3 カリャックプーマ遺跡複合の南斜面の洞窟Aの発掘調査

ワリ期、インカ期のカハマルカ

渡部 森哉（南山大学）



カハマルカ文化はカオリン土器製作に特徴付けられ、前50年頃からスペイン人が侵入した後1532年まで発展した。カハマルカ地方は後9～10世紀にはワリ帝国の支配下にあったが、カハマルカ文化の土器製作伝統は保持された。これはレクワイやモチエなどの他の文化とは異なる点である。同じパターンはインカ期にも認められ、カハマルカ文化はインカの支配下で大きな変化を被らずに存続した。

本発表では、発掘データを提示して、カハマルカ文化の特徴、およびワリ、インカとの関係を説明する。先スペイン期アンデスでは、精製土器が大量に製作された。精製土器の大部分は酒の器であり、特に国家など中央集権的社会において多く製作された。例えば、鐙形壺（モチエ、チムー）、橋型把手付き双注口壺（ナスカ、ランバイエケ）、ケーロ（ワリ、ティワナク）、アリバロス（インカ）、などである。一方、カハマルカ文化のカオリンの精製土器は、碗でありスプーンと共に用いられた。土器の特徴から、カハマルカ文化は他の中央集権的社会とは異なる性質を有していることを示している。カハマルカ社会は分節社会の特徴を示しており、文化的柔軟性を有している。

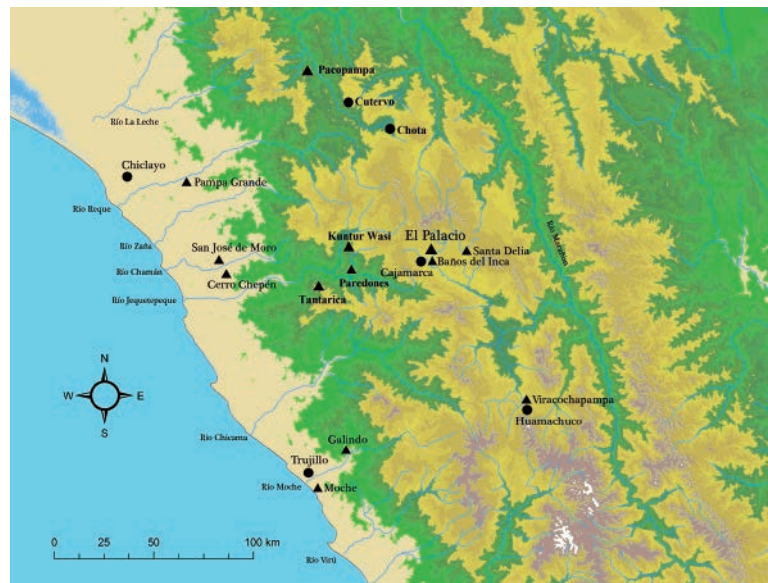


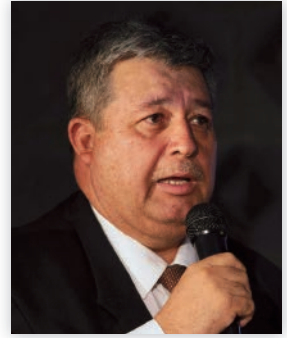
図1 北部山地カハマルカ州の遺跡



図2 2012年のエル・パラシオ遺跡の発掘調査

チョトゥーナ＝チオルナンカップ複合遺跡 ——考古学調査、保存とコミュニティによる文化遺産の 価値づけ

カルロス・ウェステル・ラ・トレ
(ペルー国立ブルーニング考古学博物館)



2006年以降、ペルー国立ブルーニング考古学博物館によって、チョトゥーナ＝チオルナンカップ複合遺跡の体系的な調査がおこなわれています。これは、ランバイエケ郡の地方自治体やランバイエケ州政府、ペルー文化省、サン・ホセの農民コミュニティの支援と協力を受けて実施されてきたもので、きわめて重要な成果をあげてきました。

われわれのプロジェクトは、ランバイエケ文化の始祖とされるニヤインラブの到来に関する口頭伝承を一つの手がかりとして始まりました。そして、ランバイエケ文化の支配者と想定されるチオルナンカップの女性神官の墓や、ウミギクガイの人物、ワカ・デ・ロス・サクリフィシス（犠牲の神殿）における人身供儀などといった、数々の歴史的発見がもたらしてきました。

一方で、これらの歴史的発見は、遺跡や考古資料の保存、地域の生活水準の向上、地域の社会発展、工芸品製作の促進や、地域の人々のアイデンティティの強化といった多面的な展開につながっています。



図1 チョトゥーナ遺跡



図2 チオルナンカップ遺跡出土の金製マスク



図3 チオルナンカップ遺跡女性被葬者の復元

アンデス文明形成期のクントウル・ワシ 遺跡と今日のクントウル・ワシ博物館

井口 欣也 (埼玉大学)



クントウル・ワシ神殿遺跡の発掘調査

1988年、大貫良夫率いる東京大学古代アンデス文明調査団によってクントウル・ワシ神殿遺跡の発掘調査が開始された。クントウル・ワシはペルー北部山地カハマルカ州サン・パブロ郡、クントウル・ワシ村の海拔2300メートルに位置するアンデス文明形成期の神殿遺跡である(図1)。発掘には多くの日本研究者とペルー人考古学者、それに両国の学生も参加し、長期にわたる大規模調査となった。調査プロジェクトは1998年から加藤泰建がリーダーを引き継ぎ、2002年までに計12回の発掘が実施された。さらに2011年からは筆者を代表とするプロジェクトにより3回の発掘が行われ、調査は現在も継続中である。

発掘調査によって、この神殿には形成期中期から末期にかけての複雑な建築の重なりと、その背景にダイナミックな社会展開があったことがわかった。最初のイドロ期(前950～前800年)には、自然の丘を整形してこの場所に最初の神殿が築かれた。東の基壇では、少なくとも二回にわたる拡張が行われていた。いわゆる「神殿更新」である。しかし、次のクントウル・ワシ期(前800～前550年)のはじめに、イドロ期の建築物をことごとく埋めたその上に新しい祭祀建築群が

築かれ、象徴的な図像の石彫も配置される。また、新しい中央基壇の建設過程で、金製装飾品を含む副葬品を伴う4基の墓がつくられていたことも明らかになった(図2)。これらの金製装飾品は、アンデス文明で最も古い部類のものであり、同じ墓の副葬品の土器はペルー北海岸のクピスニケ文化の特徴を示していた。この時期の新しい神殿建設とその過程で特別な墓を設けるという活動には、海岸地域の人びとが関与したと考えられる。さらにクントウル・ワシ期の墓の副葬品やその他の遺物には、ソーダライトや黒曜石、ウミギクガイなど遠隔地の資源が見られることから、長距離交易のコントロールと貴重財の入手が、この時期のリーダーの重要な権力資源になっていたと考えられる。

続くコバ期(前550～前250年)には、持続的で活発な神殿の建設と改修、儀礼、祭祀品生産などの証拠が多く見られ、神殿はいわば社会における協働的活動の場として機能するようになったと考えられる。しかし、コバ期の最終サブフェイズからは重要な祭祀建築物の放棄が始まり、続く形成期末期のソテーラ期(前250～前50年)には、クントウル・ワシは神殿としての機能を完全に失うことになったのである。



図1 修復されたクントウル・ワシ神殿 © クントウル・ワシ調査団



図2 金製ジャガー・双子鼻飾り(第2号墓 副葬品)
撮影: Alvaro Uematsu © クントウル・ワシ調査団

クントウル・ワシ博物館と地域住民

クントウル・ワシの調査によって古代の神殿の姿が徐々に明らかとなり、また、金製品を含む特別な墓など重要な考古遺物が発見されたことで、クントウル・ワシ村の住民たちのこの文化遺産に対する関心はよりいっそう大きくなった。村民には、調査開始以前から自分たちがこの遺跡を盗掘者から守ってきたという自負もあり、クントウル・ワシの貴重な考古資料を村で保管したいという声があがった。調査団は村民と話し合いを重ね、村に博物館を建設してそこにクントウル・ワシから出土した貴重な資料を展示しようという考えでまとまった。

日本調査団は、ペルー政府の許可を得てクントウル・ワシの出土品を一時的に日本に運び、12の会場で展覧会を実施した。そして、日本の展覧会来場者とりまの日本企業の寄付、在ペルー日本大使館・日本外務省の草根文化無償資金などの経済的支援によって、1994年10月15日、村にクントウル・ワシ博物館が開館したのである。村民は「クントウル・ワシ文化協会」を設立してペルー文化省との間に協定を結び、住民自身

が博物館運営とその展示資料保管を担う体制を整えた(図3, 4)。日本調査団も、学術的な立場から博物館運営を支援している。

2000年から2003年にはユネスコの日本信託基金によるプロジェクトが実施され、神殿大基壇の擁壁の一部と中央広場の修復保存が実現した。これによって、博物館を訪れた人が、同時に復元された神殿を見学できるようにもなった。博物館の開館後も日本からの協力は続き、2013年からはJICAによって青年海外協力隊員が博物館に派遣されている。また、2009年には日本の民間支援団体「希有の会」が組織され、住民の博物館運営を支援している。このような日本からの途切れぬ支援と関心が、村民の大きな力になっているといえる。

博物館の開館から25年が経過した。今後は、博物館運営と遺跡保護への情熱と体制を次世代の地域住民にどのように継承していくのか、また、ペルー国内での博物館支援体制をどのように構築していくのが重要な課題であるといえるだろう。



図3 クントウル・ワシ博物館展示室(2階) © クントウル・ワシ調査団



図4 クントウル・ワシ文化協会メンバーによる博物館の屋根瓦交換(2010年) © クントウル・ワシ調査団

ヘケテペケ中流域における調査

—— ラス・ワカス、モスキート、レチューサス遺跡

鶴見 英成（東京大学）



カルロス・モラレス（国立サン・マルコス大学）

ラウル・チョラン（国立トルヒーヨ大学）



ヘケテペケ川中流域のガジート・シエゴ貯水池（図1）に近いアマカス平原は、形成期の大規模建造物が多数集中する点で特異である。貯水池の建造により残念ながら多くの遺跡が失われたが、いくつかは水没を免れ、調査可能な状態にある。一帯で最大規模のラス・ワカ

ス遺跡もその一つである。鶴見はこの遺跡において2003年より調査プロジェクトを開始し、翌年よりペルー人考古学者ラウル・チョランおよびカルロス・モラレスと共同で取り組むようになった。この調査により、ラス・ワカス遺跡は形成期前期（アマカス期、前1500

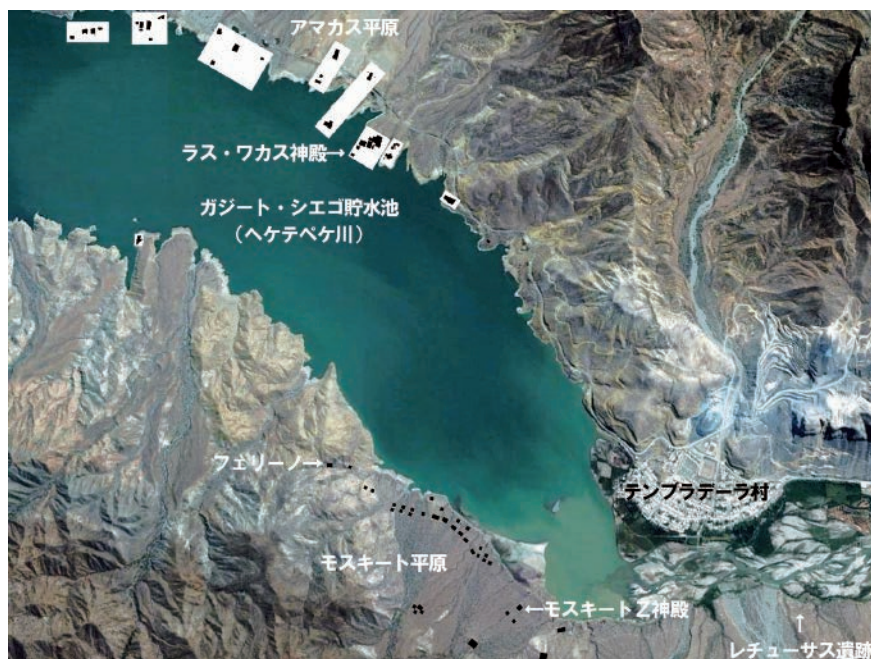


図1 アマカス平原（ラス・ワカスほか）、レチューサス遺跡、モスキート平原の神殿建築群

～前 1250 年) から形成期中期 (テンブラデーラ期、前 1250 ～前 800 年) にかけての神殿であったことが分かった。またその至近に分布する大規模建築群も可能な限り調査し、形成期前期には神殿群が順次建てられたこと、形成期中期には最大規模のラス・ワカスと同時に複数の併存して機能したことが判明した。平行してテンブラデーラ村近くの別の遺跡、レチューサスを調査したが、こちらはとくに形成期後期 (レチューサス期、前 800 ～前 500 年) に対応しており、すなわちラス・ワカスが機能停止したあとの神殿であった。

これらのデータから、神殿の建設と放棄の背景には以下のような過程があったと考えるに至った。まず形成期前期には以下の理由で神殿の移転がはじまり、やがてそれが儀礼として繰り返されるようになった。すなわち①豊穡祈念：水が豊富で、耕作に適した西の端に最初の神殿は建てられた、②水害の回避：エル・ニーニョ現象のときに起こる鉄砲水の被害を避けるため、より安全な東側へ移動した、③祖先崇拜：放棄された神殿には、塔状の大きな墓が添えられ、祖先を記念するモニュメント (記念碑) へと変わり、のちの神殿はそれを正面にのぞむような特別な建物を一角に組み込むようになる、といった背景である。続く形成期中期には、いくつもの神殿が併存するようになった。その背景に社会組織の変化がある。それは①まずラス・ワカス神殿が祖先崇拜儀礼の中心地となり、それに付随する小さな神殿が 2 つできたこと、ついで②おそらく人口増加に伴う軋轢により、村が分裂し対岸に別の神殿 (マル・パッソ遺跡) ができたことである。そして形成期後期にはこれらの神殿すべてが放棄され、新たな神殿レチューサスは 5km ほど上流に作られた。その

背景は研究途上であるが、ヘケテペケ谷中流域の地域社会の内的な要因以上に、他の地域の社会との関係が大きな要因になっているとの見通しが得られている。

以上の研究成果をふまえ、それ以前の社会の様相を解明する手がかりを求めて、鶴見とモラレスは貯水池をはさんでアマカス平原の対岸に広がるモスキート平原でも調査に着手した。この平原において特筆すべきは、東端に位置する岩に彫られた、ネコ科動物 (フェリーノ) と猛禽を組み合わせた図像の、大きな岩絵である (図 2)。このネコ科動物の表現は、カスマ谷やネペーニャ谷など他の地域において、先土器期末期の神殿遺跡に施されたレリーフや彫像の事例と相似していた。この調査により、モスキート平原の各所に大規模建築群が発見された。そのひとつ「モスキート Z」は、内部に小さな部屋を擁する複雑な形状の建築であることが分かってきた。2015 年の発掘の結果、部屋の内部には壁が崩れ、火を焚く炉が設けられていた。このような部屋の類例はアンデス北部各地の神殿遺跡に知られ、先土器期に特徴的な建築形態である。社会の様相はまだ解明すべき課題として残っているが、すでに大規模で集約化された農耕がこの地点で展開していたと考えられ、経済活動が大きな鍵であるとの展望を持っている。

このように土器導入前 (モスキート期、前 2000 ～前 1600 年) の大規模建築群が見いだされたことにより、流域の多くの地点に神殿が建設され、やがて放棄され、次の神殿が現れるという長いシークエンスが明らかになった。



図 2 モスキート平原の岩絵「フェリーノ」

ウディマとコンゴーナ

—— 北部山地の形成期の神殿

ワルテル・アルバ（ペルー国立シパン王墓博物館）



ランバイエケ水系の水源域での考古学調査によって、そこが水系の始まりから海岸の諸河谷まで水を供給する聖なる場所であり、水の信仰のための神殿群があった、という仮説を確かめる。

ウディマのポロポロ複合遺跡は、切石で造られた基壇群、広場群、祭壇群といった4つの建築複合から成り、1978年に初めて発掘された。その時の調査では、もっとも保存状態の良い建築に伴う、供物の埋納遺構を検出した。

2011年、新シーズンの発掘により、4つの階段を持つ方形半地下式広場を確認することができた。そのうち主階段は幅が6メートルあり、高さ3メートルあった。また暗渠から成る儀礼用水路の排水口を探し当て、それが広場の建築物や、すり鉢状の孔をいくつも持つ一枚岩の祭壇と対応することを突き止めた。この場所が放棄された年代は紀元前500年ころである。ポロポロはチャンカイ谷の支流のひとつに位置するが、サー

ニャ谷からも到達できる。

一方、コンゴーナの遺跡複合は、レチェ川とモトゥペ川の水源域の近くにある。外見は細長いマウンドで、そこを出自とする原位置不明の円柱状の石彫が2本ある。これらは以前から知られているもので、興味を持った我々はこの場所を調査することにした。

2013年の発掘では、建築物の構造が基壇の連なりであるとわかった。その上部の空間には、建材の流動と倒壊により傷んだ、埋納遺構と半地下式の小規模な部屋群が発見された。建築物に関して、宗教的な性格の変化と対応する、二つの建築フェイズを確認することができた。

最後の時期には建築要素を再利用し、チャビンの影響と関係するであろう、たいへん高度な建築システムを発展させた。またその仮説を裏付けるような図像を伴う、石彫群が配置された。人間が姿を隠せる地下の小空間群は、神託所として機能したのだと考えられる。



図1 ポロポロ遺跡の半地下式広場と階段



図2 ポロポロ遺跡の半地下式広場のコーナー



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7

図 3、4、5、6、7 コンゴナーナ遺跡の発掘

パコパンパ

—— 14 年間にわたる発掘調査と文化遺産保護



関 雄二（国立民族学博物館）

ファン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

ディアナ・アレマン（ペルー国立サン・マルコス大学）

マウロ・オルドーニェス（ペルー国立サン・マルコス大学）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

パコパンパ遺跡は、ペルー北部高地、海拔約 2500 メートルに位置する形成期の神殿遺跡である。1960～70 年代、小規模な発掘がペルー人考古学者によって実施されてきたが、詳細なデータは発表されず、巨大な遺構と編年との相関関係についても不明な点が多かった。2005 年に発表者が所属する国立民族学博物館はペルー国立サン・マルコス大学と学術協定を締結し、同遺跡の調査を開始することになった。

調査の目的は、これまでの日本の調査団と同様に、文明胎動期とも言える形成期社会（前 3000 年～前 500 年）の解明にある。形成期には農耕が本格化し、神殿建設が盛んになる。つまり神殿の発掘は、文明形成の謎を解くことにつながっていたのである。なかでも発表者は、権力が生成されるメカニズムに強い関心を持っている。

これまでの調査の結果、パコパンパ遺跡では、主に二つの利用時期が確認された。古い方からⅠ期（前 1200 年～前 700 年）、Ⅱ期（前 700 年～前 400 年）と名づけた。いずれも形成期に相当するが、細分するならばⅠ期は形成期中期、Ⅱ期は形成期後期にあたる。

またパコパンパ遺跡は三段の基壇より構成される。基壇間は石積みの階段で結ばれ、最上段の基壇上に重要な構造物が集中していた。そこには、形成期神殿では珍しい円（筒）形の構造物（径 28m）の他、半地下式広場（30m × 30m）やその広場の三方を囲む低層基壇、ならびに部屋状構造物が検出されている。また、こうした建造物は、Ⅰ期、すなわち形成期中期にほぼ全体が完成し、続くⅡ期、すなわち形成期後期で、再

利用されていたことが判明している。

とくにⅠ期からⅡ期にかけての社会の変貌は、大変興味深い。2009 年、Ⅱ期にあたる建造物の内部から墓が発見された。深さ 2 メートル、の地下式墓であり、土器のほかに、金製の耳輪と耳飾りを副葬した特殊な墓であった。被葬者は成人女性で、頭蓋変形が認められた。頭蓋変形は生後間もない幼児に施す必要があり、その意味で、被葬者は生まれながらに特別な役割、もしくは地位が約束された人物であり、社会的差異がこの頃に固定化した証拠といえる。2015 年にも金製品を伴う貴人墓が発見されている。

こうした証拠はパコパンパにとどまらない。日本調査団がかつて発掘したクントゥル・ワシ遺跡でも確認されている。同遺跡の墓は、前 800 年頃にあたるので、ペルーの北部高地では、おそらく前 800～前 700 年頃に権力が顕在化したと思われる。

パコパンパでは、2014 年より遺構の保存を本格的に開始し、併せて見学ルートや解説パネルの設置を地域住民とともに実施してきた。現在カハマルカ州政府が進める観光ビジターセンターの建設と併せて、地域社会のシンボルとして、また持続可能な観光のインフラとしての機能を持たせることが目的である。この過程では、我々研究者の考えを押しつけるのではなく、住民との話し合いの場を設け、事業の決定にも同意を得てきた。こうした 14 年におよぶ地道な対話により、地域住民の信頼を得ることに成功したばかりでなく、地域住民側からの自主的な遺跡保護の動きが出始めている。

3. シンポジウム『過去と現在の狭間で——ペルー北高地・北海岸の文化遺産の研究と保護』



図1 パコパンバ遺跡の位置

紀元前	時期	パコパンバ	ワカロマ	グントウル・ワシ	コトシュ
50	末期		ライソン	ソデーラ	サハラパタグ
250			EL	コパ	チャビン
500	後期	パコパンバ II	ワカロマ後期	グントウル・ワシ	コトシュ
800				イドロ	
1000	中期	パコパンバ I	ワカロマ前期		コトシュ
1200		バンダンデ			
1500	前期				ワイラベルカ
1800					
3000	早期				ミト

図2 ペルー北高地形成期遺跡の編年



図3 パコパンバ遺跡基壇上の建物
©Heinz Plenge



図4 2015年に発見された「ヘビ・ジャガー神官の墓」の金製首飾り © パコパンバ考古学調査団



図5 パコパンバ住民の参加する遺跡保存 © パコパンバ考古学調査団



図6 村祭りで、「パコパンバ考古学の都」のプラカードを手にする住民 © パコパンバ考古学調査団

インガタンボ考古学プロジェクト

—— その軌跡と地域住民との関係

山本 睦（山形大学）



インガタンボは、カハマルカ州ハエン郡ポマワカ地区に属する形成期の神殿遺跡である。また、インガタンボ遺跡は、ピウラ州の山間部からチャマヤ川やマラニョン川と名前を変えながら東へ流れるワンカバンバ川の南岸に位置している。

われわれがこれまでに実施してきた考古学調査は、ワンカバンバ川流域が先史時代から海岸、山地と熱帯低地、そして様々な山地間を結ぶ自然の回廊のような存在であることを明らかにしてきた。また、北部熱帯低地のハエン地方をふくむ、ワンカバンバ川流域の北側に広がる地域は、中央アンデスと北部アンデス間のフロンティアや文化的境界、あるいは両者の狭間として、従来考えられてきた場所でもある。

2005年以降に継続的におこなってきた調査の結果、インガタンボを中心としたワンカバンバ川流域社会が、周辺地域とは異なる独自の社会展開を遂げたことが明らかになってきた。そして、とくに地域内および地域間の相互交流が、インガタンボおよびワンカバンバ川流域社会の通時的変化に関して、非常に重要な役割をはたしたことが解明されつつある。インガタンボを中心におこなわれた神殿建設や地域内および地域間の相互交流は、当該社会において重要な社会戦略であった

と考えられる。

その一方で、インガタンボは、クントウル・ワシヤパコパンパといった北部山地の大神殿、あるいは北部熱帯低地や北部海岸部の諸神殿との交流において、地政学的にも戦略的にも重要なポジションに位置していたという特性を有していた。このような状況は現在においてもみることができる。ペルー北部海岸のチクラヨ市と北部熱帯低地のハエン市を結ぶ幹線道路が、インガタンボ遺跡の近くを通っているのである。

インガタンボは、ペルー極北部で最大規模をほこる重要な神殿遺跡の一つであり、将来的に保存整備を行ったうえで、公開・活用していくための可能性を秘めた遺跡でもある。インガタンボ遺跡の活用という点については、われわれはプロジェクトの発足以来、地元の人々や自治体の支援や協力をうけながら、微力ながらも活動を展開してきた。より具体的には、ポマワカ地区の教育機関と調整を行うことで、地域住民、とくに幼稚園から高校生までを中心とした遺跡見学会を積極的に企画してきた。これは、ワンカバンバ川流域、とくにインガタンボ遺跡の歴史について、地域住民とともにより深く知ろうとする動きであるということができよう。

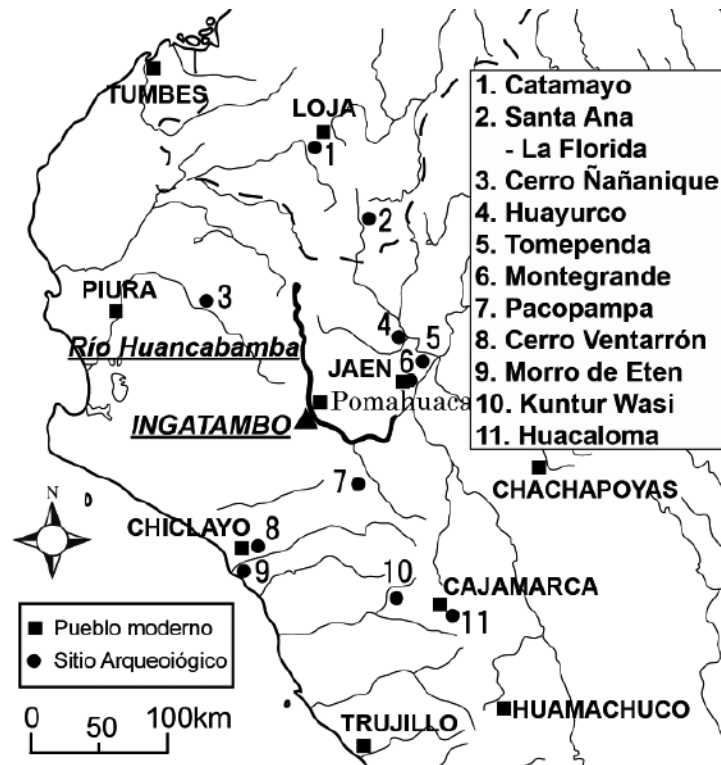


図1 インガタンボ遺跡と形成期の諸遺跡

表1 インガタンボ遺跡と関連遺跡の編年

	Ingatambo	Bagua	Cerro Ñañanque	Pacopampa	Huacaloma	Kuntur Wasi
I					Layzón	Sotera
200		El Salado			EL	Copa
550		La Peca				
800	Ingatambo	Bagua II	Pancillo	Pacopampa II	Huacaloma Tardío	Kuntur Wasi
1000	Pomahuaca	Bagua I	Ñañanque	Pacopampa I		Idolo
1200		Morevilla		Pandanche	Huacaloma Temprano	
1500						
2000	Huancabamba					
2500 a.C.						

ペルー北東部で展開中の二国間をまたぐ 考古学調査

キリーノ・オリベラ（ペルー・アマゾン学術調査協会）



2009年から2019年の10年間にわたって、わたしは、ペルー北東部のアマソナス地域バグアにあるカスアル遺跡とラス・フントス遺跡、カハマルカ地域ハエンにあるモンテグランデ遺跡とサン・イシドロ遺跡で考古学調査を実施してきた。そしてその結果、約6000年前に熱帯低地に展開した未知の先史文化を発見した。当時の人々は、熱帯低地において食料を生産し、建造物や土器、工芸品、織物あるいは石や木、骨を用いた製品の制作に従事するために十分なほどの経済的基盤を有していた。

バグアとハエンにおける考古学研究による社会的な影響は、エクアドルとペルーの考古学に大きな貢献をはたした。それはこの地域が、かつて領土をめぐる二国間の紛争が生じた国境地域でありながらも、今日では両国の研究者が共同で考古学調査を実施している

ためである。そして、これらの調査によって、マヨ文化あるいはチンチペ＝マラニョン文化ともよばれる新たな文化の存在が明らかとなってきた。

ペルー北東部のアマゾン上流域における考古学調査の成果の普及と社会化については、ペルーのテレビや雑誌をはじめ、チリ、ドイツ、ブラジル、イタリア、スペインの雑誌などでもおこなわれてきた。2017年には、アメリカ合衆国の雑誌 *Archaeology* で、モンテグランデ遺跡に関する9ページにわたる特集記事も組まれた。また、我々の調査成果は、2013年8月に上海で開催された中国科学アカデミーの考古学フォーラムで、グアテマラ、インド、ロシア、エジプト、中国、トルコ、メキシコ、アテネ、スパルタの事例とともに、その年の世界における考古学の10大新発見の1つにも選ばれた。



図1 モンテグランデ遺跡のらせん状構造物



図2 上空から見たらせん状構造物



図3 らせん状構造物の平面図



図4 カサル遺跡の壁画

配付用プログラム



Evento organizado por:

DDC-Cajamarca
Misión Arqueológica Japonesa Museo Nacional de Etnología (Japón)
Embajada del Japón
Agencia de Asuntos Culturales (Japón)
Consortio Japonés de Cooperación Internacional para el Patrimonio Cultural

Colaborador:

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua.



www.gob.pe/cultura
@ddculturacajamarca

EL PERÚ PRIMERO

SIMPOSIO INTERNACIONAL

Entre el pasado y el presente: Estudios
y protección del patrimonio cultural
en la costa y sierra norte del Perú

6
septiembre
2019

PROGRAMA



© Proyecto Arqueológico Inca para el Perú S.A. - Lima 2019

Simposio conmemorativo por los 120 años de la inmigración japonesa / Año de la amistad Peruano Japonesa y los 40 años de investigación de la Misión Arqueológica Japonesa en Cajamarca

Entre el pasado y el presente: Estudios y protección del patrimonio cultural en la costa y sierra norte del Perú

Local: Campo Santo, Complejo Monumental Belén- DDC Cajamarca
Fecha: 6 de septiembre del 2019
Organizadores: DDC-Cajamarca, Misión Arqueológica Japonesa, Museo Nacional de Etnología (Japón), Embajada del Japón, Agencia de Asuntos Culturales (Japón), Consortio Japonés de Cooperación Internacional para el Patrimonio Cultural
Colaborador: Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

PROGRAMA

10:15 a 10:30
Palabras de bienvenida de la Directora DDC-Cajamarca
Palabras de la bienvenida de la Embajada del Japón
Palabras de la bienvenida de la Misión Arqueológica Japonesa

10:30 a 12:30
Mesa 1: Investigaciones sobre la cultura Cajamarca y la costa norte.
Moderador: Yuji Seki (Museo Nacional de Etnología)
Ponencias:
Solsiré Cusicanqui (Universidad de Harvard)
Las Cajamarca de Iscoconga. Recientes trabajos sobre la étnica Cajamarca entre el 50 a.C.- 550 d.C.
Patricia Chirinos (University of California, Santa Barbara) y Jason Toohey (University of Wyoming)
Reconstruyendo espacios y prácticas en Cajamarca durante tres milenios: Nuevas investigaciones en el Complejo Arqueológico Callacampa.
Shinya Watanabe (Universidad Nanzan)
Cajamarca durante los periodos Wari e Inca
Carlos Wester (Museo Arqueológico Nacional Brüning)
Chutuna Chornancop: Investigaciones arqueológicas, gestión cultural, desarrollo local e impacto en la comunidad.

12:30 a 14:30
Almuerzo

14:30 a 16:00
Mesa 2: Investigaciones sobre el periodo Formativo en los valles de Jequetepeque y Zaña.
Moderador: Atsushi Yamamoto

Ponencias:
Kinya Inokuchi (Universidad de Saitama)
Las Investigaciones en Kuntur Wasi del Periodo Formativo y el Museo Kuntur Wasi de hoy.
Eisei Tsurumi (Universidad de Tokyo), Raúl Chollán y Carlos Morales (Ministerio de Cultura)
Investigaciones en el valle medio del Jequetepeque: Las Huacas, Mosquito y Lechuzas.
Walter Alva (Museo Tumbas Reales de Sipán)
Udima y Congona: Dos santuarios del Formativo en la sierra norte.

16:00 a 16:15
Receso

16:15 a 17:45
Mesa 3: Patrimonio Cultural en el norte de Cajamarca
Moderador: Kinya Inokuchi (Universidad de Saitama)
Ponencias:
Yuji Seki (Museo Nacional de Etnología) / Juan Pablo Villanueva (UNIVSM) / Diana Alemán Paredes (UNMSM) / Mauro Ordoñez Livia (UNMSM) / Daniel Morales (UNMSM)
Pacopampa: 14 años de investigación y conservación del patrimonio cultural local.
Atsushi Yamamoto (Universidad de Yamagata)
Proyecto arqueológico Ingatambo: Trayectoria y relación con las comunidades.
Quirino Olivera (Asociación para la Investigación Científica de la Amazonia de Perú)
Montegrando, arqueología e impacto social, Jaén – Cajamarca.

17:45 a 18:00
Palabras de Clausura: Yoshio Onuki

3. シンポジウム『過去と現在の狭間で——ペルー北高地・北海岸の文化遺産の研究と保護』

会場のようす



シンポジウムの発表者



土屋大使の挨拶



熱気あふれる会場のようす







シンポジウム

『アンデス南部高地における日本人による人類学研究の50年——軌跡、民族誌、文化的再評価』

実施日時 2019年11月13日(水) 16:00～21:00

実施会場 クスコ歴史博物館講堂、クスコ市

主催：国立民族学博物館・文化庁・ペルー文化省クスコ支局・クスコ市・クスコ大
司教府

【プログラム】

16:00～16:20 開会挨拶

マルコ・デル・ペソ・ベナビデス（ペルー文化省クスコ支局）

16:20～17:10

「ペルーにおける日本の人類学を考える —— アヤクチョ地域の試論」

ジェフリー・ガマラ・カリージョ（ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学）

17:10～18:00

「アンデスの文化資源の活用 —— データベースの構築に向けた取り組み」

八木百合子（国立民族学博物館）

18:00～18:20 休憩

18:20～19:10

「アンデス高地の牧畜の特徴 —— アジアの牧畜と比較して」

稲村哲也（放送大学）

19:10～20:00

「制度的条件下での多様性 —— クスコの農民社会」

木村秀雄（東京大学）

20:00～20:50

「アンデスの神話と儀礼」

ヘスス・ワシントン・ロサス・アルバレス（ペルー国立サン・アントニオ・デ・クスコ大学）

20:50～21:00 閉会挨拶

エンマ・モンタルボ・ラウラウ（クスコ大司教府）

オーディオビジュアル展示

「アンデスの伝統 —— 1960～1980年代における
日本の人類学者の写真コレクション」

開催日時 2019年11月11日(月)～13日(水)
15:00～20:00

会場 クスコ市コンベンションセンター
主催 国立民族学博物館・文化庁・クスコ市

ペルーにおける日本の人類学を考える

—— アヤクチョ地域の試論

ジェフリー・ガマラ・カリージョ

(ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学)



アンデス地域をフィールドにしていた日本人人類学者・友枝啓泰氏が1960年代から1980年代にかけて撮影した画像の展示企画をサポートするために、先般、ペルー南部アヤクチョ州のソコス村を訪れた。その際、その画像の撮影者であり、ペルーでは人類学者としてもよく知られる彼のことを知る、最後の世代の村人たちが記憶している当時の思い出の数々に触れる機会を得た。住民たちの記憶には、村にいた彼の存在だけでなく、そこで彼が暮らしていた当時の活動も残されていた。すなわち、写真とそれにとまう情報があつたのだ。彼を知る住民たちの話では、彼は「チニート」の愛称で呼ばれており、村の中央の広場から2ブロックほど離れたところに位置する家に数か月にわたり住んでいた。住民たちは、親切にも、彼が住んでいた家を案内してくれ、彼の寝床があつた2階の部屋まで教えてくれた。

しかし、友枝氏の存在は、彼がアヤクチョ出身の一人の女性と結婚していたにもかかわらず、おそらく何十年ものあいだ、ソコスの村人の記憶のはるか彼方に葬り去られていたにちがいない。そんな、村では今やほとんど知る人のいない彼だが、日本にルーツをもつこの人類学者について興味がわいた。そこで、よくよ

く彼について調べてみると、まだ世に出てはいないが、(私の研究視点にも重なる)地域人類学とでも呼べるような部分で、類似する点がいくつもみえてきた。

日本の人類学とアヤクチョの人類学、両者のあいだに共通する点はあるのだろうか？その共通する点はあるのだろうか？その共通点は歴史的にどう位置付けることができるか、あるいは単なる両者の交差点にすぎないのか？双方の人類学はどういう仕方で学問を共有し、理論を形作ってきたのだろうか？



図1 ソコスの広場 (撮影・友枝啓泰、1964年。南山大学人類学博物館所蔵「アンデス民族学画像コレクション」より)



図2 現在のソコスの広場



図3 友枝氏が調査の際に住んでいた家の一角

アンデスの文化資源の活用 ——データベースの構築に向けた取り組み

八木百合子（国立民族学博物館）



民族学調査では、儀礼や祭礼、口頭伝承、生業技術などの無形文化をさまざまな媒体に記録してきた。そのなかでは、文字や写真、映像に残すだけでなく、現地の人が実際に使ったり、作ったりした物を収集・分析し、当該社会の文化研究に役立ててきた。本報告では、こうした文化資源の活用の試みとして、アンデス地域の民族学調査から得られた資料について検討をおこなうものである。

日本人研究者によるアンデス地域での民族学調査が始まって半世紀以上が過ぎた現在、日本国内には先駆者たちが残した数多くの資料が存在する。特に画像資料については、二つの大きなコレクションが存在する。一つは南山大学人類学博物館に所蔵されている友枝啓泰氏によるアンデス民族学画像コレクションである。46,000点におよぶ画像資料は、同大学でデジタル化がすすめられ、一部は閲覧可能な状態である。一方で、画像にまつわる基礎情報に不十分な点も多く、データベースとしては未熟であるという問題がある。この点を克服しさらなる活用の道を模索すべく、2019年、ペルー国立ワマンガ大学の研究者とともに被写体となった農村を訪問し、写真の一部開示をおこない、所在地の同定や画像に残された人物や場面について、現地の人びとから情報収集をおこなった。これにより、もはや失われ、変容を被った当該社会の祭礼や儀礼に関する情報を再構築することが可能になったと同時に、画像資料がもつ新たな可能性を垣間見ることができた。すなわち、被写体となった現地社会の人びとの当時の記憶をよみがえらせるだけでなく、写真が断絶された家族の記憶の接合も可能にする点がみえてきた。

二つ目のコレクションは、国立民族学博物館（以下、民博）の藤井龍彦氏が撮影した画像である。16,000点近い画像は、「地域研究画像デジタルライブラリ」プロジェクトにより、2018年にデジタル化とデータベース化を同時に実施した。このデータベースの特徴は、情

報の高度化をすすめた点にある。写真にまつわる多様な基礎情報を組み込むとともに、AIの技術（画像内容の自動認識）を活用することで、キーワードの抽出や連想検索が可能になっている。現時点では内部公開にとどまるが、今後、多言語化等も進められることから、アンデス地域研究の多様な局面で画像の活用が可能になると期待される。また上述の南山大学のコレクションと年代や地域も近く、時期的に同じ頃に撮影された画像も多く、双方の資料の相互活用や検索の効率化をおこなうことで、巨大データベース構築の可能性も開けているといえる。

画像と並んで国内のアンデス地域に関する文化資源として傑出しているのが、民族的な標本資料である。民博では、1974年の創設以来、アンデスの民族学資料の収集をおこなってきた。とりわけ目を見張るのは、20世紀後半に活躍したアンデスの民芸職人により制作されたコレクションの数々である。そのなかには「名匠」として栄えある賞を受賞した人物の手になる作品も多く、今では現地で目にすることすら困難で貴重な資料も存在する。民博で現在すすめられている「フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト」では、これらの情報の強化をはかりつつ、人類共通の文化資源として共有するためのデータベースづくりを目指している。そのために、現地の関連機関やソースコミュニティである職人たちと協働で、情報の付加作業に取り組んでいる。その作業からは、これらの資料がもつ情報が、新たな世代の職人にとっても、大きな意義をもつという点もみえてきた。収集後30年以上が経過した今も、世代を超えて技術の継承がおこなわれているが、それらは時代の影響を受けているといってもよい。だが、そこには時代性ばかりでなく、アンデスの人びとの不断の創造力を読み取ることができるのも確かである。

デジタル技術時代に入り、日本が持つこうした文化

資源のデータベース化がもつ意義は、これまでも増して大きくなると考えられる。それは、国内のみならず世界レベルでのアンデス民族学研究の発展に寄与するものとなるだろう。



図1 農村における写真情報の収集

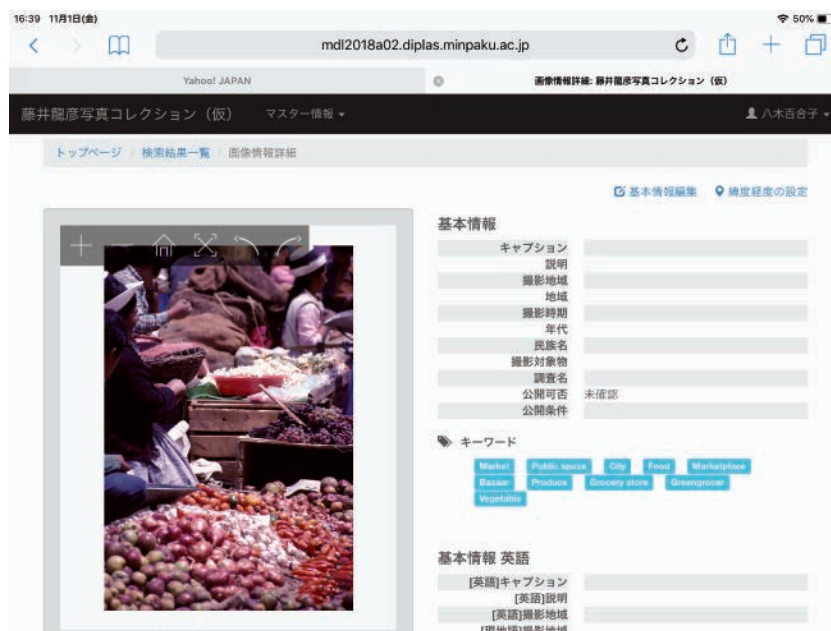


図2 アンデス地域研究画像のデータベースのページ

アンデス高地の牧畜の特徴 ——アジアの牧畜と比較して

稲村 哲也（放送大学）



この発表では、アジアの牧畜、とくにモンゴルとヒマラヤにおける牧畜と比較し、アンデス高地の牧畜の特徴について述べる。季節移動に着目して、牧畜を3つのタイプを提起することができる。ひとつはモンゴルやチベットなどで行われている遊牧であり、そこでは、牧草地の条件や社会状況に応じて、水平的に比較的自由に移動する。二つ目はヒマラヤとアルプスなどの山岳地域で実施されている移牧で、そこでは（異なる生態系の間で）垂直方向に移動し（同じルートを取り）規則的に移動する。最後は、アンデスで行われている定牧であり、そこでは、季節移動は行われていない（すなわち、ひとつの生態系において、一年中、一定の区域内で放牧されている）。これらの3つは理念型であり、実際には多様な形態がある。

遊牧の例として、モンゴル南部の最も乾燥したゴビ地域の遊牧民の事例を示そう。牧民の季節移動は気候に応じて100キロ硫黄の距離に及ぶ。冬と仔家畜が生まれる春は、寒さから仔家畜を守るため、半開放の屋根付きの家畜囲いがある中心の居住地に戻り、それ以外の季節は気候と草の状況に応じて移動する。雨が降り草のある季節である夏には、たくさんの乳とその加工品を消費し、冬には多量の肉を食べる。

アンデスの牧畜について何人かの研究者は移牧と述べているが、それは間違っていて、それについてはヒマラヤで行われている移牧と比較すれば明らかである。たとえば、ネパール東部のソル地域における農牧の事例では、移牧はだいたい次のように行われている：春には牧民は、彼らの村（約2900m）から高原（約4000m）へ上がり始め、高原でヤクの仔の世話や乳搾りをして夏（6月から8月）を過ごし、秋には、高原

は寒くなり雪が降るため、村のほうに徐々に下っていく。そして、冬の間はヤクを村の近くの森で放牧する。

アンデスの牧畜に関して、2つの事例を示す。ひとつは、ケロのコミュニティのようなアンデス東斜面の農牧民である。そこでは、1500mと4500mの間の異なる生態系を利用している。すなわち、峡谷の多様な高さに位置する畑で農耕が行われ、プナ（高原）ではアルパカとリヤマが放牧されている。そこでは、農牧民は、農作物などの運搬のために輸送用のリヤマを連れて上下の移動を行うが、それはアルパカとリヤマを放牧するためではなく、牧畜は単一の生態系すなわちプナ（高原）の中で行われている。結局、そこでの農牧は移農（移動農耕）と定牧（定住的牧畜）から成っている。もうひとつの事例は、ペルー南西部のアレキパ州のプイカ行政区の牧畜である。そこでは、各大家族が20平方キロメートルほどの領域を占め、その中にある一年中十分な水をもつ湿原でアルパカが放牧されている。ふつう、ひとつの牧民居住地は、2つの住居、すなわち幾つかの家屋と貯蔵庫からなる主居住地と、ひとつの家屋と多くの家畜囲いからなる副住居から成る。これら2つの住居は異なる機能をもつ。副住居は、アルパカやリヤマが出産する時期の、雨季を過ごすためのものである。牧民たちは、そこで、家畜囲いの清潔さを保つため、使う囲いのローテーションを行う。それは、雨季には家畜の糞と泥がまざって汚染し、仔家畜が病気になりやすいためである。つまり、この2つの住居の間の季節的移動は、放牧のためではなく、雨季に仔家畜の病気を防ぐのが目的である。結局、一見すると移動しているかに見えるアンデスにおける専門の牧畜も、定牧といえるのである。

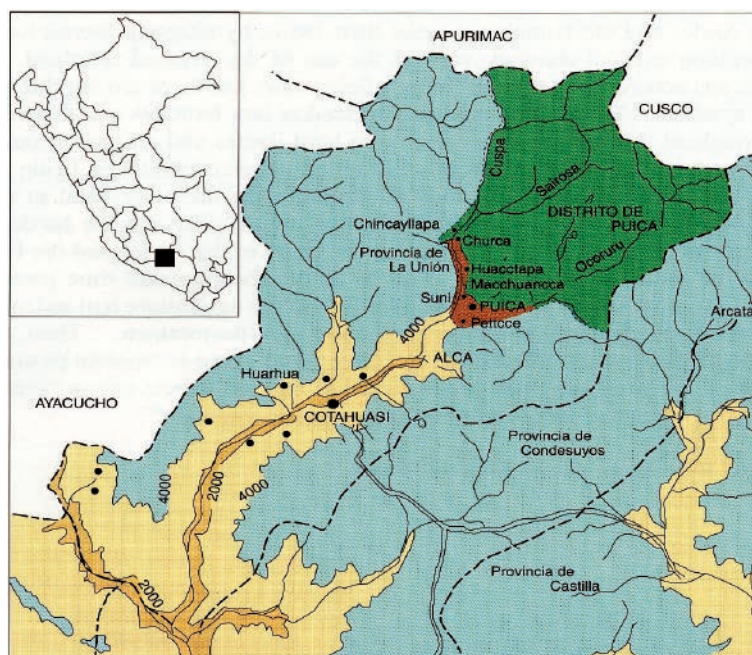


図1 ペルー南部・アレキパー州・プイカ地区の位置



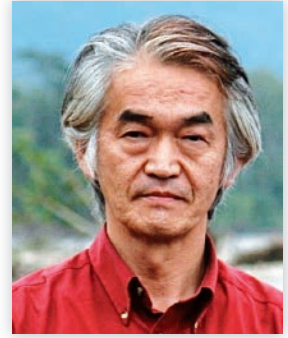
図2 家畜の見張りをしながら織物や子守をする親子



図3 ヒマラヤにおけるヤクの搾乳

制度的条件下での多様性

——クスコの農民社会



木村 秀雄（東京大学）

本発表では、発表者のラテンアメリカ調査の概略と、理論的な枠組みを示した後、クスコ州における農村社会の多様性とその制度的条件について述べた。具体的には3つの異なる環境条件にある先住民共同体、すなわち高地部（パンパリヤクタ・アルタ、ワルキ）、ピルカノタ川およびホチョック川流域（アリン、ホチョック川流域の複数の共同体）、マポチョ川流域（チムル、セドロス）と農地改革前に存在したアシエンダ（ティオ、チャワリティレ、チャクリヤバンバ、パチャマチャイ、ウルコ、ワラン、タンボマチャイ、ケセル・グランデ）についてその具体的な姿を示した。そして、先住民共同体とアシエンダを巻き込んだ農地改革の複雑で多様な過程を記し、最後にこの具体的な例を理論的枠組みに照らして解析し、全体の結論とした。

まず理論的枠組みとして以下の3つの前提を示した。それは、1. 人間個人の行動は事前に予測することができないこと、2. 人間の行動はすべてある種の合理性に基づいていること、3. 人間の行動はすべて制度的条件のもとにあること、である。第一の前提は、人間の行動が、その属性、たとえば男・女という性別、白人と先住民という民族区別や文化的区別、個人的土地所有者と共同体成員という土地所有形態に基づく区別、などによって所与に規定されていると仮定しないことである。第二の前提は、先住民やアシエンダ領主の行動などが如何に不合理に見えても、その行為の理由をその行動が行われたときの条件に照らして慎重に検討すべきであるということである。そして、第三の前提は、人間の行動が個人の自発的意思によるものであるように見え、また本人がそう主張しようとも、それがどのような条件の下で行われたか検討すべきであるということである。

クスコ州の先住民共同体についてはPETTの資料にもとづいて、公式に認知された年代に大きな違いがあり、先住民共同体として非公式に認知されていて1920

年代に公式に認知された共同体が、カルカ郡に集中していることを示した。そして、3つの環境ゾーンにある先住民共同体を調べた結果、農業形態、家屋の配置、共同体内の政治関係、共同体の閉鎖性などに、多くの違いがあることを示した。さらに、見かけは似ていても古い先住民共同体の中には、外部からの移住者によって作られたものがあることも示した。

旧アシエンダについても、その位置する環境条件によって大きな差異があることを示した。高地部のアシエンダのなかには、優良な牧草地の支配による羊毛生産が中心なものもあるが、川から高地部まで広がっていたアシエンダでは、川近くの領主直営地におけるトウモロコシ栽培や酪農・木材生産などの商業生産が経営の中心で、高地部は農奴の自給用地として土地は労働力のプールとしてものももあった。高地部のアシエンダでは領域の大部分が労働力プールとして委されていた場合もある。そして、何人ものアシエンダ領主が異なった環境条件のもとにある複数のアシエンダを所有し、季節によって農奴たちを移動させていたことも明らかにした。

この先住民共同体とアシエンダの多様性は農地改革の過程にも影響を与え、これまでに述べてきた共同体・アシエンダごとに農地改革の過程と結果は大きく異なっていた。隣接するアシエンダの一部を領域に組み入れた共同体、本来権利がないにもかかわらず隣接するアシエンダの土地を一部の成員が占拠した共同体、改革の影響を直接受けていない共同体など、共同体側で大きな違いがある一方で、全面接収を受けたアシエンダ、アセンダド直轄領の一部が領主の手に残されたアシエンダ、内部に新たな複数の共同体が成立したアシエンダなど、アシエンダの側でも農地改革の過程と結果には大きな違いがあることを示した。

そして結論として、共同体に住む先住民、アシエンダ領主、アシエンダの農奴たちの行動は極めて多様で、

それは彼らの身分・属性から推し量れるものではないこと、そして彼らの行動には一見不合理だと思われるものも多いが、使用した資料からはそれぞれその行動には、それぞれ別々の意思が働いていたとしても、すべて理解できる理由があることを述べた。そしてその上で、ここで示した多様性はただ個々人の意思に起因するものではなく、すべて環境条件、歴史的経緯、農村の社会経済体制、それぞれの文化という制度劇条件のもとで成立していたものだと結論づけた。

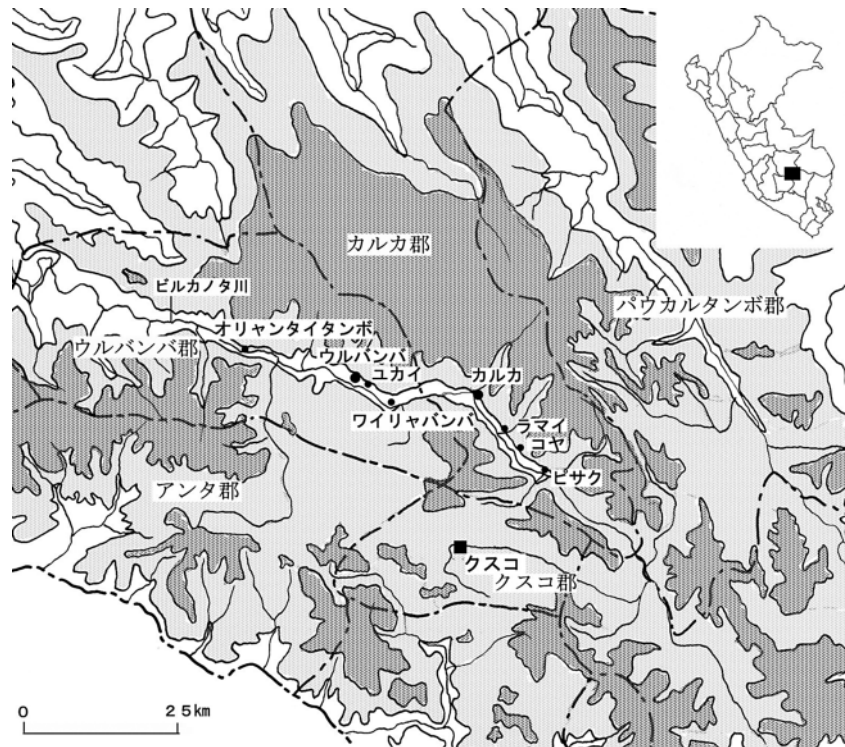


図1 発表対象地域の地図



図2 パンバリャクタ・アルタ



図3 ワルキ

アンデスの神話と儀礼

ヘスス・ワシントン・ロサス・アルバレス
(ペルー国立サン・アントニオ・アバッド・デル・クスコ大学)



アンデスの儀礼はインカ人の神話的な歴史を取り込んだものになっている。創造神ウィラコチャは、儀礼の一部分で、タワパコ・ウィラコチャという、人をあざむく存在であり、二面性をもった両義的な存在になる。そして、この神が繰り広げる数々の行いが、地上に現存するさまざまなものの起源となるのである。

こうした考えは、アヤル兄弟の伝説にも繰り返してみられる。4兄弟のリーダーであったアヤル・マンコに背いてアヤル・カチが、杖を投げて谷や丘をつくるのである。

現在のアンデス農民の集団的記憶は、この歴史的な神話を現代の語りのなかに蘇らせている。すなわち、彼らの語りなかでは、動物や鳥、そしてパチャママが、タイタチャ（キリスト教の神）に背いて、ずるをしたり、あざむく役になっている。それはまるで現在の人びとの生活においてみられるのと同じやり方である。

こうした神話的な伝統は、儀礼において、ひとつの原型になっている一連の所作（行為）を想起させる。すなわち、拡散していたものを集約させることである。その理念は、統一性と多様性という原理で表され、集中・拡散・集中という一連の行為によって表現される。アンデスの神話はこうした観念を留めておくものであり、*uywa ch' uyay* や *machu ch' uyay* の儀礼のなかに残され続けている。その最も基本となる統一への回帰は、アンデスのイデオロギーのなかでは不断の原理である。



図1 クスコ州カルカの位置図
(INEI ホームページより)



図2、3、4 写真はいずれも2月に行われるアルパカの繁殖儀礼（*uywa ch'uyay*）のようす

シンポジウム「アンデス南部高地における日本人による人類学研究の 50 年——軌跡、民族誌、文化的再評価」チラシ

SIMPOSIO INTERNACIONAL

**50 años de Antropología Japonesa en el Sur de los Andes:
Recorridos, Etnografías y Revaloración Cultural**

**Miércoles
13
NOVIEMBRE
4:00 PM**

LUGAR: Auditorio de Casa Garcilaso
(Museo Histórico Regional del Cusco)

INGRESO LIBRE

EXPOSICIÓN AUDIOVISUAL
Del 11 Al 13 de NOVIEMBRE
3:00 pm – 8:00 pm

LUGAR : Sala Tipón (Centro de Convenciones
de la Municipalidad de Cusco) PLAZA REGOCIJO

Commemoración de 120 Aniversario de Inmigración Japonesa al Perú (1899-2019)
– Año de la Amistad Peruano Japonesa

PERU Ministerio de Cultura Dirección Desconcentrada de Cultura de Cusco
文部科学省 National Institutes for the Humanities National Museum of Ethnology
MUNICIPALIDAD PROVINCIAL DEL CUSCO AMISTAD PERÚ-JAPÓN

オーディオビジュアル展示

「アンデス伝統——1960～1980 年代における日本の人類学者の写真コレクション」チラシ

Exposición Audiovisual

TRADICIÓN ANDINA

Colección Fotográfica de los Antropólogos Japoneses
1960' - 1980'

FECHA : DEL 11 AL 13 DE NOVIEMBRE DEL 2019
HORA : 15:00 PM - 20:00 PM
LUGAR : SALA TIPÓN (Centro de Convenciones de la Municipalidad de Cusco)
PLAZA REGOCIJO
INGRESO LIBRE

MUNICIPALIDAD PROVINCIAL DEL CUSCO National Institutes for the Humanities National Museum of Ethnology 文部科学省 AMISTAD PERÚ-JAPÓN

シンポジウム「アンデス南部高地における日本人による人類学研究の50年：軌跡、民族誌、文化的再評価」およびオーディオビジュアル展示「アンデス伝統——1960～1980年代における日本の人類学者の写真コレクション」配付用プログラム

Programación del Evento		Exposición Audiovisual
SIMPOSIO INTERNACIONAL Fecha: 13 de Noviembre del 2019 Lugar: Auditorio de Casa Garcilaso (Museo Histórico Regional de Cusco) 16:00 – 16:20 Palabras de Bienvenida e Inauguración 16:20 – 17:10 DR. JEFREY GAMARRA CARRILLO <i>Universidad Nacional San Cristóbal de Huamanga</i> "Una mirada a la Antropología Japonesa en el Perú: Hipótesis para la Región de Ayacucho" 17:10 – 18:00 DRA. YURIKO YAGI <i>Museo Nacional de Etnología, Osaka-Japón</i> "Utilización de Recursos Culturales Andinos: Construcción de Base de Datos Interactivos" 18:00 – 18:20 Receso		Del lunes 11 al miércoles 13 de noviembre Horas abiertas al público 15:00 – 20:00 Lunes 11 Inauguración del Exposición Audiovisual 15:00 – 15:30 Ceremonia de Inauguración Lugar: Sala Tipón - Centro de Convenciones de la Municipalidad del Cusco-
18:20 – 19:10 DR. TETSUJI INAMURA <i>Universidad Abierta del Japón</i> "Estudios Comparativos de las Sociedades Pastoriles en los Andes y el Himalaya" 19:10 – 20:00 DR. HIDEO KIMURA <i>Universidad de Tokio</i> "La diversidad bajo las condiciones institucionales: las sociedades rurales del Cusco" 20:00 – 20:50 DR. JESÚS WASHINGTON ROZAS ALVAREZ <i>Universidad Nacional San Antonio Abad del Cusco</i> "Entre la Tradición y la Libertad: Una Interpretación de la Dinamicidad del Ritual Andino" 20:50 – 21:00 Palabra de Clausura / Entrega de Regalos		

	TRADICIÓN ANDINA Colección fotográfica de Antropólogos Japoneses 1960' - 1980' 	Exposición Audiovisual TRADICIÓN ANDINA Colección Fotográfica de Antropólogos Japoneses 1960' - 1980'  *INGRESO LIBRE
---	---	---

会場のようす



シンポジウム会場入口



シンポジウム会場



オーディオビジュアル展示会場



オーディオビジュアル展示会場入口

5

シンポジウム

『ペルーの文化遺産保護の最前線

——アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのミイラ』

実施日時 2019年12月14日（土） 13:00～17:20

実施会場 東京文化財研究所 地下セミナー室、東京

使用言語 日本語／スペイン語（逐次通訳あり）

定 員 110名 申込不要 先着順
無料

主催：国立民族学博物館、文化庁

共催：文化遺産国際協力コンソーシアム、山形大学、金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」、科学研究費補助金基盤研究（A）「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」（研究代表者 関雄二）

協力：古代アメリカ学会、在日本ペルー大使館

【プログラム】

13:00～13:20

挨拶 豊城浩行（文化庁文化財監査官）

挨拶 ハロルド・フォルサイト（駐日ペルー大使）

13:20～14:00

基調講演「考古学を通じた日本とペルーの文化交流」

加藤泰建（埼玉大学名誉教授）

第1部 司会：井口欣也（埼玉大学）

14:00～14:50

「チョトゥーナ遺跡と Cholnan Cup 遺跡 —— 調査、保存そしてコミュニティにおける価値付け」

カルロス・ウェステル・ラ・トレ（ペルー国立ブルーニング考古学博物館）

14:50～15:20

「パコパンパ遺跡 —— 金製品の発見と地域文化遺産の保護」

関 雄二（国立民族学博物館）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

15:20～15:40 休憩

第2部 司会：関 雄二

15：40～16：30

「レイメバンバ——コミュニティを巻き込んだ博物館活動」

ソニア・エリザベス・ギジェン・オネエグリオ（ペルー文化省）

16：30～17：00

「ナスカ——地上絵の調査、発見そして保存」

坂井正人（山形大学）

ホルヘ・オラーノ（パリ第一大学）

17：00～17：20 挨拶 井口欣也

御 挨 拶



豊 城 浩 行（文化庁文化財監査官）

ハロルド・フォルサイト 駐日ペルー大使閣下、御参加の皆様、本日はお越しいただきありがとうございます。シンポジウム開催にあたり、ひとこと御挨拶申し上げます。

まず、本日も越し頂く予定でしたソニア・エリザベス・ギジェン・オネエグリオ様が、この度ペルー文化大臣に御就任されたとのこと、心から御祝い申し上げます。残念ながら、今回はペルーのクエラップ遺跡近くで山火事が発生し、そのご対応で来日が叶わなかったとお聞きしております。心よりお見舞い申し上げますとともに、ソニア・エリザベス・ギジェン・オネエグリオ文化大臣の指揮の下、一日も早い復興が叶いますことをお祈り申し上げます。

次に、関雄二国立民族学博物館副館長をはじめ、このシンポジウムの開催に御尽力いただきました関係者の皆様に心から御礼申し上げます。また、このシンポジウムのためにペルーから日本へお越し下さいましたカルロス・ウェステル・ラ・トレ先生、ご来日を心から歓迎致します。

本年は日本人のペルーへの移住が始まって 120 周年となる記念の年です。場所は遠く離れていても、移民を通じ、いわば親戚のように長きに亘って交流を深めてきた両国ですが、その交流の成果が豊かに実っているのが、考古学の分野です。

東京大学を中心とした調査団によって始められた考古学分野での学術的協力は、研究成果をペルーの地域社会に還元する考えのもと、60 年以上に亘り多くの日本人専門家に引き継がれてきました。このような現地地域社会への想いは、ペルーの方々に確実に伝わっているものと感じています。

日本のもつ文化財保護のノウハウを活かし、ペルーの地域住民の方々と手を携えることによって、継続的に文化遺産を保護していくやり方は、近年頻繁に話題にのぼる SDGs という言葉が生まれるよりずっと前から、両国の専門家により実践されてきました。今日は、「誰のために、何のために、文化遺産を守るのか」という原点を考える上でも貴重なお話を伺えるものと楽しみにしております。

ご登壇される先生方をはじめとして、考古学分野での長年の協力に力を尽くしてこられた多くの方々に深い敬意を表しますとともに、両国の友好関係がますます発展することを祈念いたしまして、私の御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

考古学を通じた日本とペルーの文化交流



加藤 泰建（埼玉大学名誉教授）

ペルーは古代の遺跡や遺物など豊かな文化遺産に恵まれた国である。インカや古代アンデスの巨大遺跡、博物館に展示された古代芸術の数々は、国民生活の身近に存在している。これらの文化遺産に光を当てる考古学は人々にとって日本以上になじみの深い学問である。この考古学分野で日本は半世紀にもわたってペルーでの調査研究を行ってきた。

研究チームの一貫性と連続性

東京大学アンデス地帯学術調査団がペルーでの考古学発掘調査を始めたのは1958年のことである。それから60年余り日本の考古学調査はほぼ切れ目なく続けられてきた。東京大学の調査は1997年までおよそ40年間にわたって行われた。そこで培われた研究の伝統がその後も受け継がれ1998年からは埼玉大学が研究の拠点となり、さらに2007年には、国立民族学博物館が、また2010年からは山形大学も研究拠点に加わって今日にいたるまでペルーでの考古学調査研究は続けられている。

研究テーマの一貫性と連続性

日本の研究チームは1960年のコトシュ遺跡の発掘以来、一貫してアンデス文明形成期の遺跡発掘を行ってきた。1960年代には前一千年ごろの神殿遺跡チャビン・デ・ワンタルとアンデス文明の起源が最大の関心事になっていた。多くのペルー人研究者も形成期の研究に取り組んでおり、これはいわば共通の研究テーマであった。

その後、アンデスにおける最初の神殿建築は前三千年まで遡ることがわかってきた。一方、国家社会はずっと遅れて三世紀ごろに登場することが明らかになった。形成期研究は文明がいつ、どこで発生したかという単純な起源問題ではなく、三千年以上の長い年月の中で、小規模な社会からどのようにして複雑に階層化

した社会が形成され、広い領域をまとめる国家社会が生まれたのかという社会変化の過程を解明する研究へと発展している。

調査研究における基本姿勢の一貫性

東京大学調査団の考古学研究は文化人類学という学問を背景に行われた。文化や社会の多様性を前提とする比較の視座が重要で、他の地域における文明研究と比較可能なデータを得ることを重視してきた。これは米国の影響を受けた考え方であり1950年代終わり頃のペルーの考古学も同じ基盤に立っていた。

その後、米国の研究動向は次第に理論重視に傾いていくが日本の研究チームは常に精度の高い発掘調査を心がけ、実証的データを重視するという基本姿勢を堅持してきた。この点では「伝統的な考古学」とも呼ばれたが、ペルーの考古学界では好意的に受け止められた。日本チームが60年にわたって積み重ねてきた発掘資料は、質量ともに際立っている。発掘調査報告書の刊行など成果をきちんと公開する姿勢も高く評価されてきた。

ペルー社会との相互交流

1958年に始まった東京大学の調査団は、19世紀以来の伝統を持つ欧米研究者、ペルーの研究者からみればあきらかに新参者であった。しかし1950年代から1960年代の前半は、ペルーの考古学研究が一時的に停滞した時期にあたる。長い間ペルーの考古学研究を牽引していたフーリオ・テーヨが1947年に亡くなった後、人々の考古学への関心はあきらかに薄れていた。このような時期に行われた東京大学の大規模な発掘調査はペルー側から好意と期待をもって迎えられた。国立人類学・考古学博物館および国立サン・マルコス大学からの協力も得られ、テーヨの弟子たちが調査に同行してこれまでの知見を伝えてくれた。このとき調査に参

加した大学生たちは、その後、ペルー考古学の中心になっていく。

日本からの調査団は在ペルー日系人社会からも暖かく歓迎された。戦後になってもなお厳しい制約下にあった日系人は、移住 60 周年を迎えて活気を取り戻そうとしていた時期であり、調査団にさまざまな便宜を図ってくれた。

調査を成功させるには何よりも現地ペルーの様々な関係者の理解と協力が不可欠である。このような経験の積み重ねが、その後の日本チームの調査伝統を形作っていった。発掘調査には必ずペルー人研究者や学生が加わった。調査を通じた交流関係が、今や大きな広がりを持つ人脈を生み出している。

研究成果の社会還元と文化交流

1958 年当時の日本では海外の学術調査を実施するのは容易ではなかった。広く各界から支援を得る必要があり、そのためにも遠い異国ペルーの考古学についての国民的な理解が重要であった。こうしてインカやアンデス文明を一般に紹介する書籍などが精力的に刊行された。効果があったのはメディア等と協力して開催した「インカ帝国展」「古代アンデス文明展」などの展

覧会である。1958 年から 1969 年までの 12 年間に行った発掘調査は五回であったが、その間に七回の展覧会を実施している。これらは日本国民のペルーについての文化理解に資するとともに、貸与側であるペルーの博物館関係者との交流関係の形成にも役立った。また 1964 年に実施した「コトシュ神殿秘宝展」は発掘調査の成果を社会に還元する展覧会であった。その後、調査研究が進展するにつれて展覧会は異文化紹介よりも研究成果を広く公開することに主眼が置かれるようになり、同じ展覧会をペルーでも開催してきた。まさに文化交流である。

1988 年に着手したクントゥル・ワシ遺跡の調査では、前 800 年ごろの金製品を含む墓が発見され現地でも大きな注目を集めた。これをきっかけに調査チームは出土した文化遺産の保全、さらに遺跡の修復保存という大問題にも取り組むことになった。そのためには様々な利害関係が絡む現地社会との調整、とりわけ地域コミュニティの理解と協力が不可欠であることを学んだ。何よりも求められたのは相互の信頼関係と永続的な交流関係の維持であった。この経験が現在も進行中のパコパンパ遺跡やナスカの地上絵での調査研究と文化遺産保全を並行した取り組みに活かされている。

チョトゥーナ遺跡とチョルナンカップ遺跡

—— 調査、保存そしてコミュニティにおける価値付け

カルロス・ウェステル・ラ・トレ（ペルー国立ブルーニング博物館）



ペルー国立ブルーニング考古学博物館は、2006 年から今日まで、ランバイエケ郡の地方自治体やランバイエケ州政府、ペルー文化省、サン・ホセの農民コミュニティによる支援と協力のもと、チョトゥーナ=チョルナンカップ複合遺跡にて体系的な調査を実施し、きわめて重要な成果をおさめてきた。

（ランバイエケ文化の始祖である）ニヤイムラップの到来に関する口頭伝承が発端となったこのプロジェクトによって、支配者と考えられるチョルナンカップの

女性神官の墓や、ウミギクガイの人物、ワカ・デ・ロス・サクリフィシス（犠牲の神殿）における人身供儀などといった、数々の歴史的発見がなされた。

その一方で、これらの歴史的発見は、遺跡や考古資料の保存、地域の生活水準の向上、地域の社会発展、工芸品製作の促進や、地域の人々のアイデンティティの強化といった様々な状況を生み出すことにもつながっている。



図1 ペルー国立ブルーニング考古学博物館



図2 チョトゥーナ遺跡



図3 チョルナンカップ遺跡出土の金製マスク



図4 チョルナンカップ遺跡女性被葬者の復元

パコパンバ遺跡

—— 金製品の発見と地域文化遺産の保護



関 雄二（国立民族学博物館）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

パコパンバ遺跡は、ペルー北部高地、海拔約 2500 メートルに位置する形成期の神殿遺跡である。1960～70 年代、小規模な発掘がペルー人考古学者によって実施されてきたが、詳細なデータは発表されず、巨大な遺構と編年との相関関係についても不明な点が多かった。2005 年に発表者が所属する国立民族学博物館はペルー国立サン・マルコス大学と学術協定を締結し、同遺跡の調査を開始することになった。

調査の目的は、これまでの日本の調査団と同様に、文明胎動期とも言える形成期社会（前 3000 年～前 50 年）の解明にある。有名なインカ帝国よりも 4000 年以上も前の時代である。形成期には農耕が本格化し、神殿建設が盛んになる。つまり神殿の発掘は、文明形成の謎を解くことにつながっていたのである。なかでも発表者は、権力が生成されるメカニズムに強い関心を持っている。

これまでの調査の結果、パコパンバ遺跡では、主に二つの利用時期が確認された。古い方からⅠ期（前 1200 年～前 700 年）、Ⅱ期（前 700 年～前 400 年）と名づけ

た。いずれも形成期に相当するが、細分するならばⅠ期は形成期中期、Ⅱ期は形成期後期にあたる。

またパコパンバ遺跡は三段の基壇より構成される。基壇間は石積みの階段で結ばれ、最上段の基壇上に重要な構造物が集中していた。そこには、形成期神殿では珍しい円（筒）形の構造物（径 28m）の他、半地下式広場（30m × 30m）やその広場の三方を囲む低層基壇、ならびに部屋状構造物が検出されている。また、こうした建造物は、Ⅰ期、すなわち形成期中期にほぼ全体が完成し、続くⅡ期、すなわち形成期後期で、再利用されていたことが判明している。

とくにⅠ期からⅡ期にかけての社会の変貌は、大変興味深い。2009 年、Ⅱ期にあたる建造物の内部から墓が発見された。深さ 2 メートル、の地下式墓であり、土器のほかに、金製の耳輪と耳飾りを副葬した特殊な墓であった。被葬者は成人女性で、頭蓋変形が認められた。頭蓋変形は生後間もない幼児に施す必要があり、その意味で、被葬者は生まれながらに特別な役割、もしくは地位が約束された人物であることがわかる。言



図 1 パコパンバ遺跡の位置

紀元前	時期	バコパンバ	ワカロマ	グントウル・フシ	コトシェ
50	末期		ライゾン	ソデーラ	サハラバタク
250			EL	コバ	チャビン
500	後期	バコパンバ II	ワカロマ後期	グントウル・フシ	コトシェ
800		バコパンバ I		イドロ	
1000	中期		ワカロマ前期		
1200	前期	バシダンデ			
1500		早期			ワイウビルカ
1800					
3000					

図 2 ペルー北高地形成期遺跡の編年

い換えれば社会的差異がこの頃に固定化した証拠といえる。

こうした貴人墓はパコパンパにとどまらない。日本調査団がかつて発掘したクントウル・ワシ遺跡でも確認されている。同遺跡の墓は、前 800 年頃にあたるので、ペルーの北部高地では、おそらくこの頃に権力が顕在化していくものと思われる。

こうした成果とともに、日本の調査団が追究し、私自身が継承してきたことがある。それは遺跡の存在する地域の住民との協力関係、共創関係である。考古学調査で得られた資料は、研究者である私たちが独占しやすい性格を持ち、文化遺産を担当する関係機関も地域住民を無視するか、不法占拠や盗掘に手を染める敵

として捉えることが多い。そのような状況下でも、日本調査団は、住民と対話し、文化遺産の保存に関する新しい試みに挑み続けてきた。

先述したクントウル・ワシ遺跡では、遺跡博物館を建設し、村人とともに現在も出土品を管理し、展示している。またパコパンパ遺跡では、さらなるステップアップを試み、村人とともに、考古遺産ばかりでなく、無形遺産のリストアップを実施してきた。考古遺産と異なり、無形遺産の担い手は地域住民であり、文化遺産保護のプログラムに参加しやすい点に注目した試みである。現在進めているビジターセンター建設とともに、村全体を文化遺産の展示・発信の空間としてとらえるエコ・ミュージアムの取り組みを紹介したい。



図 3 パコパンパ遺跡基壇上の建物 ©Heinz Plenge



図 4 「貴婦人の墓」の金製品 ©Heinz Plenge ©パコパンパ考古学調査団



図 5、6 パコパンパ住民による無形遺産調査 ©パコパンパ考古学調査団



レイメバンバ

—— コミュニティを巻き込んだ博物館活動

ソニア・エリザベス・ギジェン・オネエグリオ（ペルー文化省）



レイメバンバは、ペルー北東部のアマソナス地域にあり、農業や牧畜を営む人々が暮らす小さな辺境の町である。レイメバンバのコミュニティと博物館との間の20年以上にわたる関係は、ダイナミックかつ複雑で生産的な歴史を生み出してきた。この両者の関係は、ラグナ・デ・ロス・コンドレス（コンドルの湖とよばれる遺跡）で発見された考古資料を維持・管理し、その文化遺産のあり方を自ら取り決める権利を持ちたい、というコミュニティの人々の強い要望に端を発するものである。



図1 レイメバンバ博物館

博物館にたずさわる専門家や労働者の仕事は、こうしたコミュニティの期待に沿って、的確に作られた。そして、博物館は現在、地域だけでなく国レベルにおいても観光のアイコンとなっており、地元の人々にとってよりよい生活環境を生み出している。

博物館の運営を持続可能なものにするという仕事は、長く困難な道ではあったが、満足のいくものとなった。それは博物館の労働者たちの強靱なレジリエンスがあったからこそである。この開発プロジェクトの重要な要素のひとつは、文化遺産および自然遺産の保護に取り組む市民を生み出していくために、町や周辺地域のすべての子供たちを巻き込んでいくことを目指す教育プログラムを確立することであった。子供たちの教育は、博物館の持続可能性を達成するためには必要不可欠な基本要素だったのである。

20年がたった今、この経験を成功と挫折の両側面から見直すことは、大きな意義をもつであろう。



図2 レイメバンバ博物館のミイラ収蔵庫

ナスカ

—— 地上絵の調査、発見そして保存



坂井 正人 (山形大学)

ホルヘ・オラーノ (パリ第1大学)

はじめに

ペルー南海岸には、動植物・幾何学図形・直線などの地上絵が集中的に描かれているナスカ台地(約20×15キロ)がある。山形大学では、ナスカ台地の地上絵の調査を2004年より取り組んでいる。ナスカ台地を撮影した人工衛星画像を約5年間かけて分析した上で、2010年より現地調査を実施してきた。

ナスカ台地の地上絵は、1994年にユネスコの世界文化遺産に指定されたが、当時確認されていた動物や植物などの具象的な地上絵は30点程度であった。山形大学は、2010年から、人工衛星画像の分析と現地踏査によって、地上絵の分布および共伴する土器の調査を開始し、2018年までの調査によって、180点以上の具象的な地上絵を発見している。しかしながら、地上絵の分布調査が未だ不十分なため、ナスカ市街地の拡大に伴い、地上絵の破壊が進み、社会問題となっている。地上絵の保護に向けて、その分布状況を正確に把握することが喫緊の課題である。

く、全長50メートルを超える地上絵はこのタイプに属する。一方、後者は小さいものが多く全長50メートル以下である。前者の方が新しく、ナスカ前期(紀元100～300年頃)に制作された可能性が高い。一方、後者は少なくともナスカ早期(紀元前100～紀元100年頃)には制作されたと考えられる。前者は動物の形をした儀礼場であり、ここで土器の破壊儀礼が行われたことが現地調査で判明した。一方、後者は小道沿いや山の斜面に描かれたため、移動する際の道標として利用されたと考えらる。つまり前者は儀礼を実施するための空間として制作され、後者は見るために制作されたことになる。

我々が現地調査した地区以外にも地上絵が分布している可能性は否定できない。そこで、日本IBMに協力を仰ぎ、IBM Watson Machine Learning Community Edition(旧名: IBM PowerAI)を用いて、山形大学が持つ画像データの一部を分析したところ、ナスカ台地の西部に新たな地上絵を1点発見した。この地上絵

調査と発見

ナスカ台地における現地調査によって、主にナスカ台地西部に分布する小道沿いに、具象的な地上絵が集中的に描かれたことが判明した。ここに分布しているのは、人間、動物(鳥、猿、魚、蛇、キツネ、ネコ科動物、ラクダ科動物)などの地上絵である。これらの地上絵は、地表に広がる黒い石を除去して、下に広がる白い砂の面を露出することによって制作された。ただし、これらの地上絵は、線状に石を除去して制作されたタイプの地上絵と、面状に石を除去して制作されたタイプに分かれる。前者は概して規模が大き



図1 ペルー南海岸とナスカ台地

は全長約5メートルと小型である。二本足で立っている人型の地上絵である。面状に石を除去して制作されたタイプの地上絵なので、ナスカ早期に制作されたと考えられる。この地上絵も小道の付近に分布しているので、一種の道標であった可能性が高い。

地上絵の保護と保存

ペルー文化省と山形大学の間で、地上絵の学術研究を推進するとともに、その保護活動を展開するための協定が2012年に締結された。この協定が締結された背景には、近年地上絵の破壊が進んでいることが挙げら

れる。山形大学が発見した地上絵の中にも、ナスカ市街地の拡大に伴われ、破壊の危機に瀕している地上絵が少なくない。その中でも50点以上のラクダ科動物の地上絵が集中的に分布しているアハ地区を重視した。文化省と相談して、この地区の開発計画をストップしてもらい、ここに遺跡公園を設立した。現在、日本の遺跡保存の専門家およびペルー文化省と相談して、ラクダ科動物の地上絵がよく見えるような保存処理方法の開発に取り組んでいる。また地上絵の可視化を契機として、地元の人々が主体的に、これらの地上絵の保護に取り組める形を検討しているところである。



図2 鳥の地上絵（新発見）

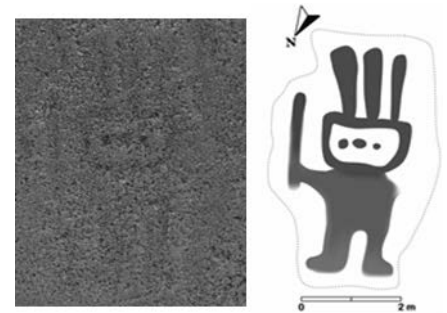


図3 AIによって発見された人型の地上絵（新発見）



図4 ネズミの地上絵（新発見）

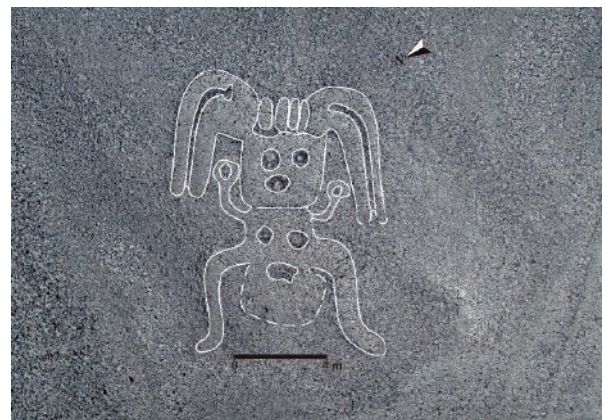


図5 人型の地上絵（新発見）

シンポジウム「ペルーの文化遺産保護の最前線」を振り返って



井口 欣也 (埼玉大学)

このシンポジウムでは、加藤泰建教授の基調講演のあと、4人の発表者が、それぞれに代表をつとめる考古学プロジェクトの学術成果とともに、ペルーにおける文化遺産保護とその活用に関する具体的な事例報告をおこなった。各事例に共通していたのは、発表者が地域社会の中で長期にわたる調査研究を継続しており、また、学術的に重要でかつ社会的にもインパクトの大きな発見を契機にした文化遺産の保護・活用の実践と、そこへの地域住民参加のために取り組んでいるということであった。

研究者は、地道な調査研究による学術成果を通じて、文化遺産の現代社会における価値の創造に関わっているといえるが、その一方で「文化遺産」は、観光資源としての価値、地域住民や国のシンボルや誇り、アイデンティティに関わる価値など実に多様な意味を有している。そして、大きな発見や研究成果があったときにはより広く人びとの関心を集めるだけに、その価値の多様性がいっそうあらわとなる。

ある意味では、研究者と地域住民は、文化遺産との関係において対照的な位置にあるといえる。研究者は公式に文化遺産を調査する権利を与えられており、その成果を広く社会に発信する手段をもっている。また、その学術成果をもとに国や自治体とも互いに意見を交わすという双方向的な関係を築くことが可能だ。その一方で、地域住民は、文化遺産の持続的な保護のためにはきわめて重要な存在でありながら、研究者とは対照的に構造的に不利な立場にある。それは、ペルーそしてラテンアメリカ諸国全般において、多くの重要な文化遺産が地方の村落に位置し、そうした地域の多くが経済発展から取り残されてきたという歴史にも関係している。また、住民は学術成果や国の文化政策や開発方針を前にして、なかなか意見を主張しにくい。こうした背景が、地域住民による文化遺産保護・活用のための主体的な行動を困難にしていることは否定でき

ない。

それではいったい、文化遺産の保護と活用にはどのような方法がよいのか、どのように研究者と地域住民が協働していくのがよいのか——。そのことに唯一の答えがあるわけではない。このことを考えるには、それぞれの地域社会が、そこにある文化遺産とどのように関わりどのような価値を見いだしてきたのか、また、国内外の経済状況と国の文化政策がどのような方針なのかといった様々なレベルの問題を考慮する必要がある。今回の4つの報告も、そうした個々の地域がもつ背景と社会の現状を踏まえた活動として、大変貴重な事例とみることができる。

カルロス・ウェステル博士のチョトゥーナ・チョルナンカップ・プロジェクトでは、地域コミュニティとの協働、遺跡博物館の建設、関連する様々な活動が生み出した地域アイデンティティ、とくに、「チョルナンカップの女性神官」による新たな社会的記憶の創造とシンボル化などが紹介された。加えて注目したいのは、地域住民の生活の質の向上にも積極的に取り組み、水や電気等のインフラ整備、地域工芸の振興をもたらしただ点である。文化遺産の普遍的な重要性をふりかざすだけでは、地域住民の主体性は発揮されない。住民の生活の質の向上と経済基盤の確立は、持続的な文化遺産保護に住民が関与するための必要条件であり、その意味でたいへん重要な成果といえる。

関雄二教授のパコバンパ・プロジェクトでは、地域住民とともに文化遺産の価値を共につくる、すなわち「共創」という言葉が重要なキーワードであった。研究者が手助けをしながら、村の地域住民自身が培ってきた農業・牧畜・生活技術の中から貴重な無形の文化遺産を掘り起こし、遺跡という考古資料とともに社会文化的な資源とする試みである。文化遺産の価値付けという行為が、学術という特権的な立場から考古学者によって独占されることが一般的である中で、地域住民

にしかできない無形文化遺産の価値付けを研究者の学術的なそれと組み合わせるといふ活動は、実に画期的なものといえるだろう。

ソニア・ギジェン博士から報告のあったレイメバンバでは、住民による偶然の考古遺物発見を契機として、地域社会がその管理にたいする主張を強めたことで、時にそれが国の方針と対立するという事態が生じた。ギジェン博士は地域社会との対話、そして国との困難な調整を行い、貴重な考古資料の研究と維持管理を実現した。また、国による経済的支援が十分でない中、日本や米国など国外の資金・技術協力と地域住民の労働提供を得て、博物館の設立にこぎ着けた。博物館と観光資源の開発によって地域の雇用を創出するとともに、文化遺産保護活動の継承のために、次世代への教育プログラムに力を入れている。

坂井正人教授のナスカ・プロジェクトでは、新しい地上絵の発見という学術的に重要な成果とともに、地上絵破壊の現状が報告された。坂井教授はペルー文化省と協定をむすび、地上絵を破壊する可能性のあった開発計画をストップさせることを実現した。また、同プロジェクトでは「地上絵の可視化」という作業にも取り組んでいる。可視化することで、地域の人びとやペルー国民が実際に自身の目で見てその重要性を理解することができるようになるという点で、遺産保護へ

の大事な取り組みのひとつであるといえる。

4つの事例においては、それぞれに異なる地域社会の歴史と現状、文化遺産の性質によって様々な方法がとられていた。一方で、文化遺産の保護と活用において、主体的で持続的な地域住民の参加を導くためにどうしたらよいかという問題意識は共通しており、このテーマの重要性をあらためて共有することができたといえるだろう。

研究者にとっては、今回のようなシンポジウムが、他のケースから学ぶことで自分の調査地での活動にも活かしていくことにつながるという点で重要であることは言うまでもない。しかしそれだけではなく、シンポジウム当日、多くの聴衆の方々とその場を共有できたことにもたいへん大きな意味がある。文化遺産の保護と活用は、研究者と地域住民、またその国の支援だけで完結するものではなく、国を超えた国際協力によって取り組む必要がある。そのためには一方的な支援ではなく、文字通り対等な立場での協力が求められる。したがって、公的機関、地域住民、研究者にくわえ、日本とペルーの一般の国民による深い関心と文化的な交流が不可欠なのである。この点で、当日シンポジウムにお越しいただき発表に熱心に耳を傾けていただいた皆様に、心からお礼を申し上げたいと思う。

シンポジウムチラシ

**2019
12/14**
13:00~17:20 (土)
(予定)

会場
東京文化財研究所 地下セミナー室
〒100-8385 東京都千代田区千代田1-10-1
入場料
無料

ペルーの文化遺産 保護の最前線

アンデスの黄金
ナスカの地上絵
インカのミイラ

中込 孝幸
丸香 雅彦

13:00-13:30 企画説明・参加費
13:30-14:00 開会式
14:00-14:30 講演1 中込 孝幸「ペルーの文化遺産保護の現状と課題」
14:30-15:00 講演2 丸香 雅彦「ペルーの文化遺産保護の現状と課題」
15:00-15:30 講演3 中込 孝幸「ペルーの文化遺産保護の現状と課題」
15:30-16:00 講演4 丸香 雅彦「ペルーの文化遺産保護の現状と課題」
16:00-16:30 講演5 中込 孝幸「ペルーの文化遺産保護の現状と課題」
16:30-17:00 講演6 丸香 雅彦「ペルーの文化遺産保護の現状と課題」
17:00-17:20 閉会式



会場
東京文化財研究所 地下セミナー室
〒100-8385 東京都千代田区千代田1-10-1
入場料
無料

プロフィール



ソニア・エリザベス・ギジェン・オスエグリア
Sonia Elizabeth Gigen Osorio

ペルー国立大学人類学博物館学芸員

ペルーを代表する人類学博物館学芸員。1997年にペルー国立大学人類学博物館の学芸員として、国立人類学博物館に勤務。現在はペルー国立大学人類学博物館の学芸員として、国立人類学博物館に勤務。現在はペルー国立大学人類学博物館の学芸員として、国立人類学博物館に勤務。



カルロス・ヴェステル・ラ・トーレ
Carlos Vester La Torre

ペルー国立大学人類学博物館学芸員

ペルーを代表する人類学博物館学芸員。1997年にペルー国立大学人類学博物館の学芸員として、国立人類学博物館に勤務。現在はペルー国立大学人類学博物館の学芸員として、国立人類学博物館に勤務。



加藤 雅彦
Masahiko Kato

東京大学大学院文学部教授

東京大学大学院文学部教授。1975年に東京大学大学院文学部教授として、東京大学大学院文学部に勤務。現在は東京大学大学院文学部の教授として、東京大学大学院文学部に勤務。



関 健二
Kenji Kato

国立民族学博物館学芸員・学芸員

国立民族学博物館学芸員・学芸員。1975年に国立民族学博物館の学芸員として、国立民族学博物館に勤務。現在は国立民族学博物館の学芸員として、国立民族学博物館に勤務。



成神 正人
Masahiko Kato

国立民族学博物館学芸員・学芸員

国立民族学博物館学芸員・学芸員。1975年に国立民族学博物館の学芸員として、国立民族学博物館に勤務。現在は国立民族学博物館の学芸員として、国立民族学博物館に勤務。



井口 俊也
Shigeo Inoue

国立民族学博物館学芸員・学芸員

国立民族学博物館学芸員・学芸員。1975年に国立民族学博物館の学芸員として、国立民族学博物館に勤務。現在は国立民族学博物館の学芸員として、国立民族学博物館に勤務。

【問い合わせ先】 国立民族学博物館 学芸員課 TEL: 06-6879-8252 E-mail: zenken@nhnp.kyushu-u.ac.jp

5. シンポジウム『ペルーの文化遺産保護の最前線——アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのみイラ』

シンポジウムのようす



豊城文化財監査官の挨拶



フォルサイト大使の挨拶



6

シンポジウム

『ペルー南海岸・南高地における考古学と文化遺産』

実施日時 2020年1月11日 9:50~17:00、12日 6:00~8:00

実施会場 アントニーニ博物館、山形大学ナスカ研究所、ナスカ市

主催：山形大学・国立民族学博物館・文化庁

共催：山形大学ナスカ研究所、ペルー文化省ナスカーパルパ地区管理計画事務所、
文化遺産国際協力コンソーシアム、アントニーニ博物館

協力：古代アメリカ学会

【プログラム】

1月11日（土）

会場：アントニーニ博物館（ナスカ市）

9:00~9:10 主催者挨拶

9:10~9:50 基調講演

「地上絵を見るための最適な場所——認知心理学的研究」

渡邊洋一（山形大学名誉教授・羽陽学園短期大学学長）

9:50~11:20

第1部 パラカス 司会：ジュゼペ・オレフィシ

（イタリア先コロンブス期考古学研究調査センター、先コロンブス期考古学研究センター）

「チャビン現象の脈絡におけるペルー中央高地南部の神殿群とその文化財としての可能性」

松本雄一（山形大学）

ユリ・カベロ・パロミーノ（ペルー国立サン・マルコス大学）

「プエルト・ヌエボ遺跡と紀元前10~5世紀の中央段デスにおける威信財の長距離交易

網：非モニュメント遺跡の保護の重要性」

ジャル・ドゥラント（ペルー・カトリカ大学）

「チンチャ河谷考古学プログラム——パラカス文化調査8年の歴史」

ヘンリー・タンタレアン（ペルー国立サン・マルコス大学）

11:20~11:40 休憩

第2部 ナスカとパルパ 司会：松本雄一

ジュセペ・オレフィシ

第3部 ワリ 司会：坂井正人

土井正樹（山形大学）

マルタ・カブレラ・ロメロ（ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学）

司会：ファン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

6:00~8:00 カメリド平原考古学公園視察（アハの地上絵）

地上絵を見るための最適な場所

—— 認知心理学的研究

渡 邊 洋 一（山形大学名誉教授・羽陽学園短期大学学長）



山形大学のナスカ地上絵研究プロジェクト・チームは、2004年から研究を始めた。考古学・人類学・地理学・情報科学の研究者とともに、私自身も心理学者として、当初から学問の境界を越えて組織的な研究に加わった。今日は、地上絵の見方について、現地での詳細な踏査に基づいて認知心理学的に検討した結果について報告する。

認知心理学は人の知的活動を科学的に研究する学問である。その知的活動とは、知識（情報）を獲得し、組み立て、次の行動に利用することを指す。このとき、一連の過程を方向づける枠組み（図式）が重要な役割を果たす（Neisser、1976 など参照）。

まず基本となる人の視知覚から考えてみよう。人が地上で地上絵を見る場合には、図像が垂直面に提示された場合と斜面や水平な地面に置かれた場合とでは、観察者に見える図像の大きさ（視角）が大きく変化する。視角が小さいほど形の識別は困難になる。観察距離が遠くなるとともに、特に奥行き方向の視角が小さくなり、図像の認識が難しくなる。逆に近距離では、大きな図形ではむしろ近すぎて一部分しか見えず、全体像をとらえるのが難しくなる。（図1、図2を参照）

地上絵には様々な大きさがあるが、全体が視野におさまる大きさの場合には、地上絵の認識は容易である。わかりにくい場合には、周囲を一巡すれば容易に理解できよう。

一瞥では把握できない大型の地上絵については断片的な情報を統合する必要がある。その場合に助けになる一つの鍵は親近性である。ナスカの地上絵の主題と当時の土器の絵柄に対応があることは以前から指摘されている。地上絵を作った人々は、主題の原型を土器の絵柄を通して熟知しており、いくつかの特徴から主題を絞り込むのは難しいことではなかったと考えられる。

大型の地上絵を把握するもう一つの鍵は対称性であ

る。対称性は、形の知覚にとって非常に重要であり、すぐに知覚されて、しかも完璧な鏡映像の合致は必要としないとされている（Treder 2010 など参照）。また、透視図法的な歪みがあっても、対称性の認知は可能という（van der Vloed, et al 2005）。

対称性の知覚が認知を促進するのは、対象の軸について情報をもたらすからと考えられる。斜面に描かれた地上絵は、地面の傾きが対象の軸に一致するので図像の意味を把握しやすいと考えられる。

我々が文字や図形を描く際には、誰がどこから見るか想定して、その大きさと方向を決める。例えば、我々が本や新聞を読む場合と、先生が教室で黒板に書く場合では、文字の大きさが異なる。同じように、対象を見る最適な視点という観点から考えてみよう。

平面に描かれた巨大な地上絵も部分的特徴を統合することによって全体像を把握することはできるが、全体を一望できるなら認知は容易である。見るための最適な場所という点から考えると、岩絵や斜面に描かれた地上絵は、あくまでも地上に立った人間が見ることを想定していたと考えられる。それに対して、ナスカ台地の平原に描かれた巨大な地上絵は、むしろ空高い場所から見下ろすことを想定したと考えた方が妥当な大きさである。形も、正対したかのように歪みがない。

近くから見ることを想定する場合には小さな図形や文字を書き、遠くから見ることを想定する場合には、その距離に応じた大きさを提示するという工夫は、日常的に行われ、しかも古くから行われてきた人間の知恵である。この延長上にナスカの地上絵も存在し、時代を経る途中で、地上から空へと視点が変わった時に、巨大な地上絵が作られたと考えられるのではないだろうか。

人々が巨大な構造物を作るのは、観察距離の問題だけでなく、偉大さを表したいという意図を持つ場合なども考えられるが、視点の変換の方がより基本的な

認知の枠組みの変化といえよう。

認知心理学的な考察から生まれたこのような考え方については、もちろん、考古学や人類学の研究との対応を確認しなければならない。

ナスカ——古代アンデス文明の研究が、多様な研究を包括して一層発展することを願っている。

参考文献

- Neisser, U. (1976) *Cognition and Reality*. Freeman.
- Treder, M. S. (2010) "Behind the Looking-Glass: A Review on Human Symmetry Perception". *Symmetry* 2: 1510-1543; doi:10.3390/sym2031510.
- van der Vloed, G.; Csathó, A.; van der Helm, P.A. (2005) "Symmetry and repetition in perspective". *Acta Psychologica* 120: 74-92.

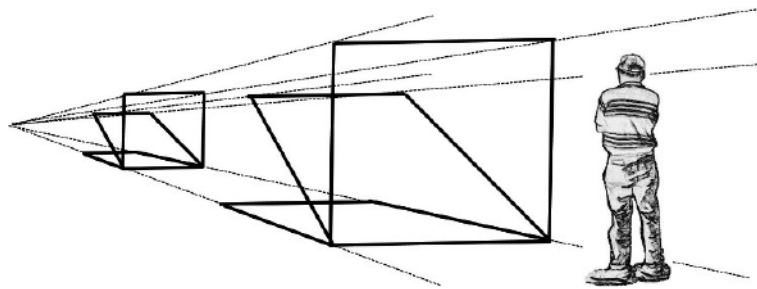
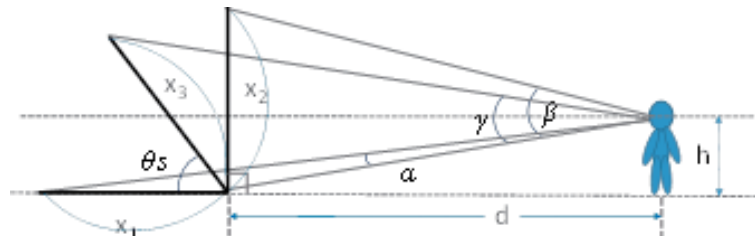


図1 Illustration of the perspective view of the figure from a standing human



- x : Size of the figure ($x_1 = x_2 = x_3$)
 d : Viewing distance
 h : Height of the eye of the observer
 α : Visual angle of the figure at horizontal plane
 β : Visual angle of the figure at vertical plane
 γ : Visual angle of the figure at slanted plane
 θ_s : Degree of slant of the plane

図2 Visual angle of the figure on the plane having various degree of slants

チャビン現象の脈絡における

—— ペルー中央高地南部の神殿群とその文化財としての可能性

松本 雄一（山形大学）

ユリ・カベロ・パロミーノ（ペルー国立サン・マルコス大学）



アンデス中央高地南部はこれまで、紀元前一千年紀（草創期／前期ホライズン）において、北部高地、中央高地、そして北海岸で起きた社会発展の展開から取り残された「周縁」であるとされてきたが、現在の知見からはチャビン現象との関りでより適切に考察しうる事が明らかである。この脈絡では、中央高地南部の重要性は、前期ホライズンにおいて中央アンデス全域に流通した2つの重要な資源、黒曜石と水銀朱によって担保されることとなる。それにもかかわらず、この時期の社会に関する研究は同地域の重要性を十分に評価せず、「小規模な祭祀建築とまばらに分布した村落社会」であると特徴づけてきたのである。また、この地域の社会発展は、チャビン・デ・ワントル、クントゥル・ワシ、パコパンパといった同時代の主要な神殿社会と関連付けて考察されることもなかった。

しかし、アヤクチョ地方から得られた新たなデータは、ペルー中央高地南部の社会経済的発展の初期プロセス、汎地域的なチャビン現象との関りで考察する機

会を与えてくれる。近年の調査では、中央高地南部の社会が極めてアクティヴにこの現象に関わり、非常に急激な社会経済的变化を経験したことが明らかとなった。この地域においては大規模な記念碑的建造物は前時代から継続する漸進的な社会変化の結果生まれたものではなく、北部の大神殿群、とりわけチャビン・デ・ワントルからの文化的刺激を受けて成立したという解釈がより適切である。また、このような急激な変化は同時代の南海岸の社会、とくにパラカス文化の初期（パラカス前期）と強く結びついていたことが明らかとなった。

一方で、このような紀元前一千年紀に起きた地域的发展への再評価は、新たに調査された初期神殿が、教育や観光開発に寄与しうる地域の文化財としての価値を有することを明らかにした。しかし、これらの遺跡は現在の開発の進展、市街地の拡大や機械を用いた耕作によって破壊の危機に瀕している。遺跡保護の観点からの処置が急務である。



図1 カンパナユック・ルミ中央基壇



図2 カンパナユック・ルミ南基壇で発見された埋葬（a）と副葬品の土器（b）－（d）

プエルト・ヌエボ遺跡と紀元前10～5世紀の 中央段デスにおける威信財の長距離交易網 ——非モニュメント遺跡の保護の重要性

ジャル・ドウラント（ペルー・カトリカ大学）



紀元前10～5世紀という時代は中央アンデスの先スペイン期に関する我々の理解を深める上で非常に重要である。これまでの様々な調査が示してきた通り、この時期にこの文化領域の人々は政治経済の重要な変化を実験したのである。中でも広く結びついた2つの変化が存在する。自らの地位を誇示する「エリート層」の出現と威信財経済の強化である。

様々な証拠から、紀元前8世紀に新たなタイプのエリート層が初めて出現したことが示唆されている。例えばこの時期には、それ以前と異なりある種の個人がその生前の地位を示すようなあり方で葬られ、他の人々の上に位置していたことが示されるのである。ロマ・マカンチュ遺跡、パコパンパ遺跡、チョンゴヤベ遺跡、セロ・コルバッチョ遺跡、クントゥル・ワシ遺跡など北海岸と北高地でのこのような変化の事例を示している。

このような個人の埋葬は、他の通常のものより規模が大きく、高い割合で「珍しく」、「威信を示す」ものと考えられる副葬品を伴うことで他から区別される。このような副葬品は「遠隔地から」、「外部から」の原材料で作られたか、あるいは搬入されたか、あるいは「珍しく」、「素晴らしい」特別な技術によってつくられたかでこのような役割を果たすのである。

このようなものが、装飾品であり個人に属するものであるという事実が、その目的が「特別な」個人が他に比べて偉大であることを示し、同時に儀礼用具であり、幻覚剤の消費と関係し、あるいは複雑な図像表現を示すといった事実が、このような「格差化」「差異化」を達成するための媒体は「深遠で」「ミステリアスな」知識の保持にあったことを示唆している。

その他の証拠も紀元前8世紀頃に、「珍奇な」、「威信を示す」ようなモノと知識の交易網が急激に拡大し、強化され、北はランバイエケとカハマルカ（クントゥル・ワシとパコパンパ）から南はイカやアヤクチョ（コ

ユンゴやカンパナユック・ルミ）に至るまで遠く離れた地域の社会を結び付けるに至った。このネットワークのなかで最も卓越していたのは、疑いなくチャビン・デ・ワントルである。

リチャード・バーガーが気づいた通り、この祭祀センターにおいては、エクアドル海岸に産するカプトソデ貝やウミギク貝、海岸と山地の様々な地域からの土器、北海岸からの石製容器、太平洋岸の魚や貝、アンデス東斜面産の幻覚剤、ワンカベリカの水銀朱、中央高地南部の様々な産地の黒曜石など、遠隔地から搬入された数多くのものが確認された。これは珍しいことではない。類似した事例が、他の祭祀センターのみならず、中央アンデス全域に分散した異なるタイプの遺跡においても確認されるからである。

パラカス地域に位置するプエルト・ヌエボおよびその他の遺跡における我々の調査は、これらの交易網に関する知識を増大させ、さきに述べた政治経済的变化とその交易網の関りを考察するためのユニークな機会



図1 プエルト・ヌエボ遺跡発掘調査、2015年

を提示している。プエルト・ヌエボ遺跡における調査の現時点までの成果からは、南海岸と他地域、とりわけ、中央海岸、北海岸、中央高地南部のアヤクチョとワンカベリカ地方との間に地域間交流が存在したこと

は疑いない。本発表では、我々の調査の最新成果を示し、早期の非モニュメント遺跡を保護することの重要性を考察する。

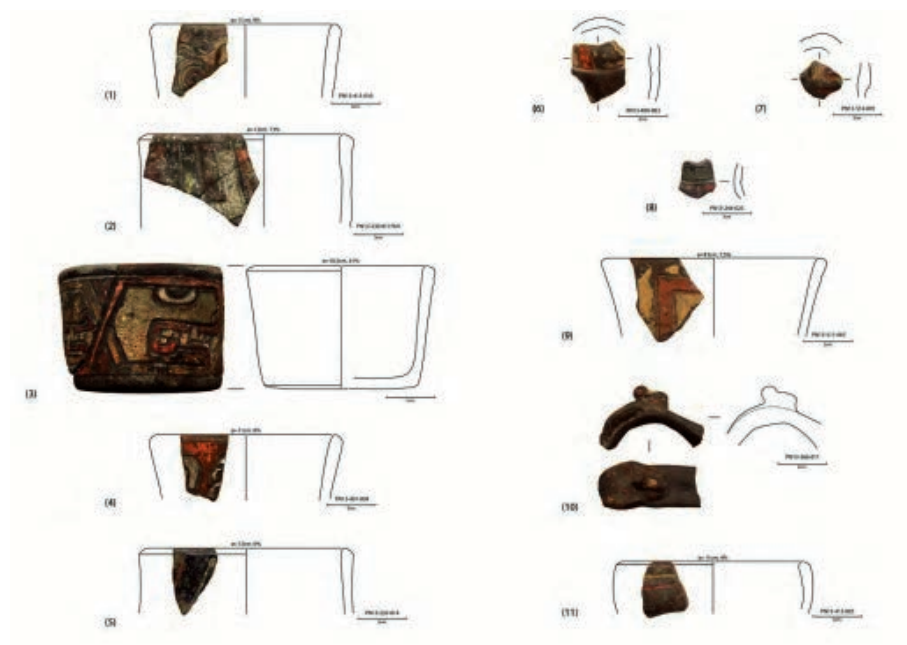


図2 プエルト・ヌエボ出土土器、北の地域の図像表現を有するもの

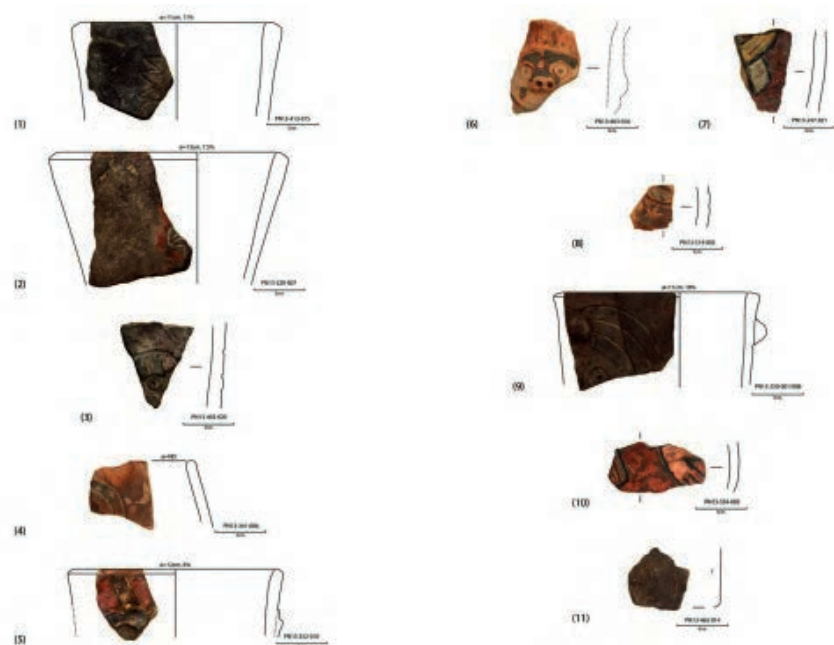


図3 プエルト・ヌエボ出土土器、南の地域の図像表現を有するもの

チンチャ河谷考古学プログラム

——パラカス文化調査 8 年の歴史

ヘンリー・タントレアン（ペルー国立サン・マルコス大学）



本発表ではイカ州チンチャ地方で行われたこれまで 8 年間の調査を概観する。一つの遺跡のみに焦点を当てた小さなプロジェクトとして始まった我々の調査は、チンチャ考古学プログラム（PACH）となり、ペルーと海外からの調査者を統合した考古学人類学調査という重要な場を造り上げてきた。結果として、このプログラムは様々な時期とテーマに焦点をあてた調査へと発展したが、本発表では特にパラカス文化に関する調査を概観する。この調査を通じて、パラカス文化に関する重要なデータが得られ、このペルー海岸の鍵となる河谷に栄えた、先スペイン期社会に関する推論の在り方を根本的に買えるような解釈を発展させることができた。

本発表においては、我々が行ってきた主要なパラカス文化の遺跡に関してその概略を説明する。その際にまず、チンチャ河谷中流域で行われた、セロ・デル・ヘンティル遺跡とそれに伴う地上絵に関する調査を扱う。セロ・デル・ヘンティル遺跡においては、2012 年から 2014 年にかけて、3 シーズンにわたる発掘調査を行うことができた。この調査によって一連の建築の更新と、その使用の最終期に行われた半地下式広場の埋め立てイベントが明らかとなった。同様に、埋め土の中に大量の奉納品と埋葬が確認された。

続いて、2014 年から 15 年にかけて我々のチームによって行われた、ワカ・ソト遺跡の調査を見ていく。同様に半地下式広場を伴う主要な 2 つのセクターで発掘調査を行った。この調査では、記念碑的建造物において、重要な建築と再建築の過程が、一連の人間の居

住と儀礼の痕跡と共に確認された。

その後、我々はラ・クンベ遺跡において 2016 年と 2017 年に発掘調査を行った。この調査でもまた、改めて半地下式広場が確認され、広い範囲で重要な神殿の更新活動が確認された。

本発表の最後に、海岸近くの下流域に位置するポスエロ遺跡で現在進行中の我々の調査に触れることにする。知られている通り、この遺跡はチンチャ河谷において最も優れた形成期の編年シークエンスを有するものの一つである。また、パラカス文化の重要な居住の痕跡に加え、エドワード・ラニングとドワイト・ウォレスによってポスエロ様式として同定された遺物を伴う居住跡を確認することができた。

全体として本発表では、われわれのパラカス文化に関する地域的な調査に関して、それぞれの遺跡とその人間の居住の詳細と個別性を省略することなく提示する。同様に、考古学的に確かな脈絡から得られた大量の絶対年代データを提示する。この成果はチンチャ河谷のパラカス文化の居住に関する編年という点で重要な貢献となった。さらに、チンチャ河谷における考古学的文化財の保護と情報の公開に関する我々の試みに関しても触れる。我々の調査は、地域における最良の歴史コンテンツを提供するという貢献をなしてきた。さらに、現地社会の経済に寄与し、ペルーと海外の若手考古学者を育成し、論文や書籍の発表によって調査で得られた科学的知識を地域に還元するという点でも貢献してきたのである。



図1 セロ・デル・ヘンティル遺跡



図2 ワカ・ソト遺跡

ユネスコ世界遺産ナスカの地上絵

—— 地上絵の調査、発見、保護活動



坂井 正人（山形大学）

ホルヘ・オラーノ（パリ第1大学）

（1）はじめに

南米ペルー共和国南海岸に分布するナスカの地上絵は、ユネスコによって1994年に世界文化遺産に登録された。コンドル、ハチドリ、クモ、サルなどの動物の地上絵で有名だが、その大部分を占めるのは、直線や台形の幾何学的な図像である。

山形大学では2004年度から地上絵に関する学際的な研究を実施している。当初、人工衛星画像を分析して、地上絵の分布図の作成に取り組んでいた。しかし、2010年より現地調査を開始するとともに、2012年にはナスカ市内に山形大学ナスカ研究所を設立した。現在、ドローンおよび飛行機から撮影した高解像度の画像とライダーデータを活用して、ナスカ台地における現地調査を推進している。

（2）新発見の地上絵

人工衛星画像の分析を2004年から約5年間実施したところ、100点以上の新しい地上絵が発見された。その大部分は直線の地上絵だが、動物の地上絵が1点含まれていた。その後、現地調査を開始するとともに、ナスカ台地と地上絵に関する高解像度の画像をドローンおよび飛行機から撮影することによって、動物の地上絵が150点以上、直線の地上絵が300点以上を発見した。

これらの地上絵の分布を検討した結果、ナスカ台地西部に分布する複数の小道に沿って、具象的な地上絵が集中的に描かれたという仮説が得られた。発見した地上絵は、人間、鳥、猿、魚、蛇、キツネ、ネコ科動物、ラクダ科動物などである。これらの地上絵は、地表に広がる黒い石を除去して、下に広がる白い砂の面を露出することによって制作された。ただし、これらの地上絵は、線状に石を除去して制作されたタイプの地上絵と、面状に石を除去して制作されたタイプに分かれる。前者は概して規模が大きく、全長50メートル

を超える地上絵はこのタイプに属す。一方、後者は小さいものが多く全長50メートル以下である。発見した地上絵のうち、最も大きい地上絵は前者のタイプで、全長100メートル以上ある。一方、最も小さい地上絵は後者のタイプで、全長約5メートル以下だ。

前者は動物の形をした儀礼場であり、ここで土器の破壊儀礼が行われたことが現地調査で判明した。一方、後者は小道沿いや山の斜面に描かれたため、移動する際の道標として利用されたと考えられる。

（3）AIの活用と地上絵の保護

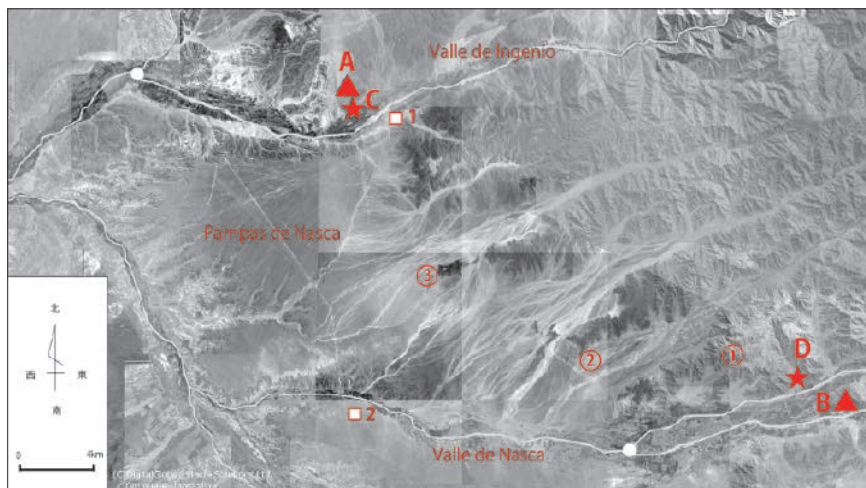
小道沿い以外にも地上絵が分布する可能性がある。しかし、高解像度の三次元画像というビッグデータのため、目視で画像から地上絵を見つける作業を実施した場合、膨大な年月が必要になる。そこで、日本IBMに協力していただき、AIを用いて分析したところ、具象的な地上絵が描かれたと思われる場所が複数見つかった。これらの候補の中から有望なものについて現地調査を行ったところ、ナスカ台地の西部に新たな地上絵を1点発見できた。この地上絵は全長約5メートルと小型である。二本足で立っている人型の地上絵だ。面状に石を除去して制作されたタイプの地上絵である。

ニューヨーク市にあるIBMワトソン研究所と協力して、山形大学の過去10年間の現地調査のデータを整理し、このビッグデータをAIにより分析する予定だ。AIを利用して、地上絵の分布状況に関する予備調査を実施し、現地調査と合わせて、地上絵の分布図作成を進める。この共同研究によって、ナスカ台地全体を網羅した地上絵の分布図を作成する作業を加速化させる。

この分布図を活用して、ナスカの地上絵の分布をさらに詳しく把握する。また現在進行中の都市と農地の拡大によって、破壊される可能性のある地上絵を同定して、その保護活動をペルー文化省と共同して実施する。



図1 ペルー南海岸とナスカ台地



- | | |
|------|------------------------------|
| 山 | ▲ A：カレーラ山、B：ボング山、 |
| 考古遺跡 | ★ C：エストゥディアンテス遺跡、D：ラ・ティサ遺跡 |
| | □ 1：ベンティーヤ遺跡、2：カワチ遺跡 |
| 地上絵 | ① “ラクダ科動物”、② “アヒル”、③ “宇宙飛行士” |

図2 ナスカ台地および周辺部における地上絵・考古遺跡・山

アルト・デル・モリーノ遺跡と ピスコ谷のナスカ

ルベン・ガルシア・ソト（ペルー国立イカ大学）



図1 アルト・デル・モリーノ遺跡（ペルー南海岸ピスコ谷下流部）

アルト・デル・モリーノ遺跡は、ピスコ谷の下流部にあり、比較的大きな遺跡であることが知られている。ここには約10個の丘と居住地区があり、前期ホライズン末から前期中間期までの居住が集中した。

この遺跡で目立っているのは前期中間期以降の活動で、特にカルメン期（様式）、エストレージャ期（様式）、ナスカ7期（様式）の遺構や遺物が考古学調査によって発見された

特に建築と土器の分析によると、アルト・デル・モリーノは南ナスカからある程度独立していたと考えられる。ただし南ナスカとは何かについては検討の余地がある。残念なことに、2007年8月の地震の後、この場所は巨大な居住地として使われ、残されているのは3つの丘だけである。なお、この遺跡の境界の確定は、ペルー文化省イカ支局によって実施された。



図2 魚が描かれた皿（ナスカ前期）



図3 壺（ナスカ後期）



図4 首級が描かれた大型の碗（ナスカ後期）

パルパの地上絵の調査・管理・保護

ジョニー・イスラ・クアドラド

(ペルー文化省ナスカー・パルパ地区管理計画事務所)



ペルー南海岸にある地上絵は、この地域に発展した特徴的な文化によって生み出されたものである。その中でもパラカス文化やナスカ文化の果たした役割が大きい。これらの地上絵は、ナスカ地区とパルパ地区の砂漠の斜面と台地に集中的に描かれている。そこにはナスカの地上絵として世界的に知られている巨大な図像や様々な幾何学図形が分布している。

有名な動物の地上絵（サル、クモ、ハチドリなど）や幾何学図形（直線、台形など）は、ナスカ台地に集中して分布している。そこで、これらの地上絵は紀元1年～650年に発展したナスカ社会と関係ある文化現象だとこれまで考えられてきた。

しかし、ナスカとパルパだけでなく、南海岸のイカとピスコでも新しい地上絵が最近見つかっている。これらの地上絵は、ナスカ台地に集中して分布している巨大な地上絵とは異なる特徴が見られる。つまり、様々な傾斜の斜面に描かれた具象的な図像のみが描かれた。図像は単独で描かれる場合とグループを構成する場合がある。ナスカの地上絵よりも規模が小さい浅浮彫りと高浮彫りタイプの地上絵である。

土器と織物に表現されたモチーフの様式を比較すると、これらの地上絵はパラカス文化とトパラ文化の特徴が見られる。つまり地上絵には長い期間に亘って制作されたことになる。パラカス期（前800～前200年）に制作がはじまり、移行期（前200～後1年）にも地

上絵の制作は継続し、ナスカ期（後1年～650年）の末に終わった。なお、トパラ期はパラカス期とナスカ期の移行期に相当する。

地上絵をパラカス文化とトパラ文化に明確に区分するのは難しいので、特に問題がない場合は、両者をパラカスの地上絵を一括して呼ぶことにする。

パルパとナスカで最近発見された地上絵も加えると、これまで登録されたパラカスの地上絵はかなりの数になる。さらにピスコやイカで登録されたものも加えると、パラカス・ナスカ・トパラ社会の調査・研究において、土器や織物と同様に、地上絵は重要なデータとなる。

すでに述べたように、これらは主に具象的な地上絵であり、そのほとんどは擬人化された地上絵（男、女、子供など）と動物の地上絵（鳥、ネコ科動物など）である。これらはイカ谷、パルパ谷、インヘニオ谷に接する山や台地の斜面や、ナスカ台地とパルパ台地の緩やかな斜面に描かれたナスカ期の地上絵の調査には長い歴史があり、地上絵の機能と意味を理解するために、具体的な仮説と説明がすでに提示されている。しかし、パラカスの地上絵（およびトパラの地上絵）の研究は最近始まったので、その機能を理解するために我々は新しい挑戦を開始した。そこで今回のシンポジウムでは地上絵の編年の問題だけでなく、その意味についても扱う。



図1 「超自然的存在」として知られているジパタ地区のパラカス期の地上絵（写真：ジョニー・イスラ）

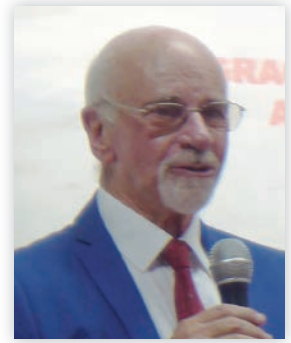


図2 「豊穡」として知られているジパタ地区のトバラ期の地上絵（写真：ジョニー・イスラ）

カワチ神殿における考古学的発掘と 保存作業に関する最新の成果

ジュゼペ・オレフィシ

(イタリア先コロンプス期考古学研究調査センター/先コロンプス期考古学研究センター)



1982年より、イタリア・ブレシア市にある「先コロンプス期考古学研究調査センター」の後援を受け、ナスカ文化を多角的に調査する目的で、ナスカ・プロジェクトの名前で様々な調査を実施してきた。1984年にはカワチ神殿の調査を開始した。同時にプエプロ・ビエホやワユリなどの遺跡でも調査を実施した。しかし1990年からは、ナスカ河谷中流域兩岸の砂漠段丘上に設定された建築群であるカワチ神殿の調査に集中してきた。カワチは前4世紀～後5世紀にナスカ文化の最も重要な神殿であった。その宗教イデオロギーの力で、支配下の社会集団を団結させていたのである。カワチ神殿が衰退すると、ナスカ谷の住民によって、この場所は巨大墓地として再利用された。カワチ神殿は2種類の特徴的な建築物によって構成されている。ひとつは壁に囲まれた地区である。もうひとつはピラミッド型の巨大マウンド建築群で、土台が方形もしくは正方形の形をした階段状基壇である。これら2種類の建築物は同じ時期に機能していた。その空間には様々な規模の神殿が集中していた。また遠く離れた地域からやってきた人々がそこに1年のある時期に一時的に滞在していた。ただし、ナスカ神殿域の内部に都市のような居住地区はなく、宗教活動と直接関係のない活動が行われた訳ではない。ナスカ川の兩岸に神殿、儀礼用部屋、屋根・柱をもつ巨大建築物が約24平方キロの範囲に分布していた。

カワチ神殿の近くに地上絵が分布しているので、両者による二重構造が存在していたと考えられる。この二重構造によって神聖な空間の次元が増大したことになる。この神聖な空間はナスカの人々の儀礼用に使われるだけでなく、集団儀礼に参加するために何キロも

離れた場所から来た巡礼者によっても用いられた。

カワチ遺跡における活動と関係する最も古い放射性炭素年代(暦年代校正)は前4400～前4239年である。つまり、ナスカ文化が成立するはるか以前の先土器期において、この場所が当時の社会にとって特別な場所として選ばれたことを意味する。かなり古い時代からこの場所が神聖な場所であったことは疑う余地がない。古期から建物が存在したことを示す 3720 ± 60 y 3780 ± 80 BPという古い年代資料も得られた。ただし、この時期の建物の性格を把握する難しい。一方、ナスカ期におけるカワチ神殿全域の建築活動を分析したところ、全部で5つの建築時期を確認することができた。

考古学調査が開始された20年後、すなわち2002年から、調査と平行して、遺跡の保護・保存修復活動を集中的に実施した。こうした活動は、ニコラウス・コペルニクス大学(ポーランド共和国トルン市)の遺跡保存センターのSławomir Skibiński教授の立ち会いのもと1987年に実施した。なお同教授はアドベ建築の保存の専門家である。ナスカの人々が用いた建築材料を研究するとともに、建築材料である粘土の出土地について調査した。またカワチ神殿の建築物の破壊が進む原因を調査したところ、壁と漆喰の劣化の主な原因は、(1)絶え間ない強風、(2)日中と夜間の著しい寒暖差、(3)日中は乾燥しているにもかかわらず、夜間になると湿度が急上昇する点にあると考えなければならなかった。建築材料だけでなく、気候学に関する統計データに基づいて、少なくとも約20年間は大気の影響に耐えることができる最良の建築材料を同定することができた。



図1 カワチ遺跡における「階段神殿」地区の保存修復（2002-2013）



図2 カワチ神殿のY1地区における大規模発掘



図3 カワチ区域：保存修復（2002-2018）。建築時期の差異



図4 カワチ神殿のA地区における大ピラミッドの概観。ナスカプロジェクトによる保存修復。

トリゴパンパ村での調査

—— 学術的貢献と遺跡保存における課題について



土井正樹（山形大学）

本発表では、筆者がトリゴパンパ村周辺遺跡で実施した発掘調査により明らかになった新資料、およびその調査を通じて考えた、小規模遺跡の保存における課題について述べる。

紀元後650～1000年頃、現在のペルー中央高地を中心として栄えたワリは、アンデス文明史上初の広域国家である。ペルーを中心とする中央アンデス地域は、アンデス文明が展開した舞台として知られ、そこでは独自の社会展開が生じた。そのため、ワリがどのように成立したのかという問題は、アンデス文明史だけでなく人類史の理解にとっても重要な研究課題となっている。しかし、ワリに関する研究はその最盛期に注目したものが大半であり、ワリの形成過程に関する調査や研究は不十分である。さらに、調査対象とされる遺跡も首都や「行政センター」と呼ばれる計画的なプランを有する大規模な遺跡が多く、当時の一般住民の視点に立ったものは少ない。これらの問題を解決するため、当時の一般住民の視点からワリ国家の形成過程を解明することを目的とし、ワリ国家の中心地に位置するトリゴパンパ村周辺遺跡での発掘調査を実施した。

トリゴパンパ村周辺には、ワンカ・ハサ遺跡、タンタ・オルホ遺跡、クルス・パタという3つの遺跡が存在する(図1)。各遺跡の利用時期は異なっており、それぞれの遺跡の資料を総合することにより、ワリ成立前、ワリ繁栄期、ワリ崩壊後の様子を知ることができる。

トリゴパンパ村周辺遺跡の調査により明らかになったことは、ワルパ文化とナスカ文化の関連性およびワルパ文化とワリ文化の連続性である。ワルパ文化とナスカ文化の関係については、先行研究では土器の図像に基づき論じられてきた。トリゴパンパ村周辺遺跡の出土資料からは、両文化間のより明確な図像の類似性に加え、器形の共通性も明らかになった。

また、これまでワリ文化の特徴とされてきた要素が、

ワルパ文化に存在することも明らかになった。最も重要な発見は、D字形建築に関するものであり、ワルパ文化においても祭祀に関連する場としてD字形建築が存在していたことが明らかになった。また、ワリ遺跡やコンチョパタ遺跡から報告のある石柱も、類似したものがワルパ文化にも存在することが明らかとなった。

学術的成果が得られた一方で、遺跡保存における課題も明らかとなった。3遺跡のうち、タンタ・オルホ遺跡をのぞくワンカ・ハサ遺跡とクルス・パタ遺跡は、現在居住地として利用されている。これまでの発掘調査により、両遺跡の破壊が進んでいることが明らかになった。遺跡破壊の現状と遺跡保存における課題についても述べたい。

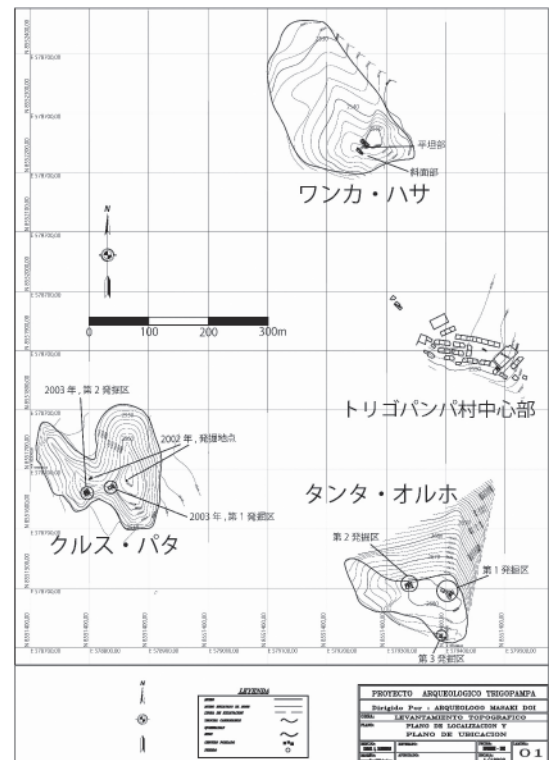


図1 ペルー、アヤクチョ州、トリゴパンパ村周辺遺跡

ワリ遺跡のD字型儀礼用部屋の調査と保護

ホセ・オチャトマ・パラビシーノ

(ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学)



マルタ・カブレラ・ロメロ

(ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学)



「ワリ遺跡のD字型建築物における儀礼区域の調査と社会活用に関するプロジェクト」の一部として、ベカチャユック・モホ、モンカチャユック、カピヤパタ区域を含む神聖な地区にあるD字型の儀礼用建築物群を調査した。

調査の結果、D字型建物群の下に古い時期の建物が見つかった。これはワルパ末期とワリ初期と関係する建物である。これらの建物の規模と入り口のパターンは多様である。一方、建物の中央付近にはどれも太陽時計と関係する柱があり、18もしくは22の壁龕が見られた。これらの建物の壁の漆喰は白色や赤色に塗られていた。また儀礼のために祖先のミイラや神像が置かれていたと思われる壁龕は建物の内周にあり、そこには屋根がかけられ、部分的に保護されていたようである。一方、中央に柱が立てられたので、そこでは天文観測が行われていたと考えられる。

D字型建物群が作られたのは、多分、この都市が最も繁栄していた時期である。また、これらの建物が作

られたのは、ティワナク文化の存在が関係ある。D字型建物が狭い範囲から6つ発見された。この発見によって、D字型建物群が当時のエリート集団や社会組織とどのような関係あるのかという新たな疑問が生まれた。

これらの建物の威信は長続きしなかった。この都市の歴史の中では短かった。建物の内側と外側で火を燃やす大規模な儀礼が開催された後、これらの建物は放棄された。床は荒らされ、壁は半壊して埋められた。

発掘した建物を公共に供するために保護し、修復作業を施した。その際に、地元で昔から使われていた材料を用いて、床と壁の補強と修復作業を実施した。

ワリ遺跡における調査を継続し、この遺跡を観光ルートに入れ、アヤクチョ州における一流の観光地にするためには、関係当局や一般の人に関心を持ってもらう必要がある。そのための文化事業を計画していたが、国や地方自治体の援助が不足していたため頓挫した。



図1 ペルー、アヤクチョ州、トリゴバンパ村周辺遺跡



図2 ポゾランを用いた修復が施された日時計の床



図3 カピヤパタ地区にあるD字型建築の壁龕（修復前）



図4 カピヤパタ地区にあるD字型建築の壁龕（修復後）



**SIMPOSIO CONMEMORATIVO POR LOS 120 AÑOS DE LA INMIGRACIÓN JAPONESA
AÑO DE LA AMISTAD PERUANO JAPONESA**

Organiza: Universidad de Yamagata, Museo Nacional de Etnología, Agencia de Estudios Culturales (Japón).
Co-organiza: CISRAP/CEAP, Instituto Nasca de la Universidad de Yamagata, Oficina del Plan de Gestión Nasca-Palpa (MC), Consorcio Japones de Cooperación Internacional para el Patrimonio Cultural.
Colabora: Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua.

Arqueología y Patrimonio Cultural de la Costa y Sierra Sur del Perú

Nasca - 11 de Enero 2020

Programa (9 am- 5 pm)	Ponentes
Sesión Paracas	Yuichi Matsumoto y Yuri Caveró Jalh Dulanto Henry Tantalean
Sesión Nasca - Palpa	Masato Sakai y Jorge Olano Ruben García Soto Johny Isla Cuadrado Giuseppe Orefici
Sesión Wari	Masaki Doi José Ochatoma y Martha Cabrera

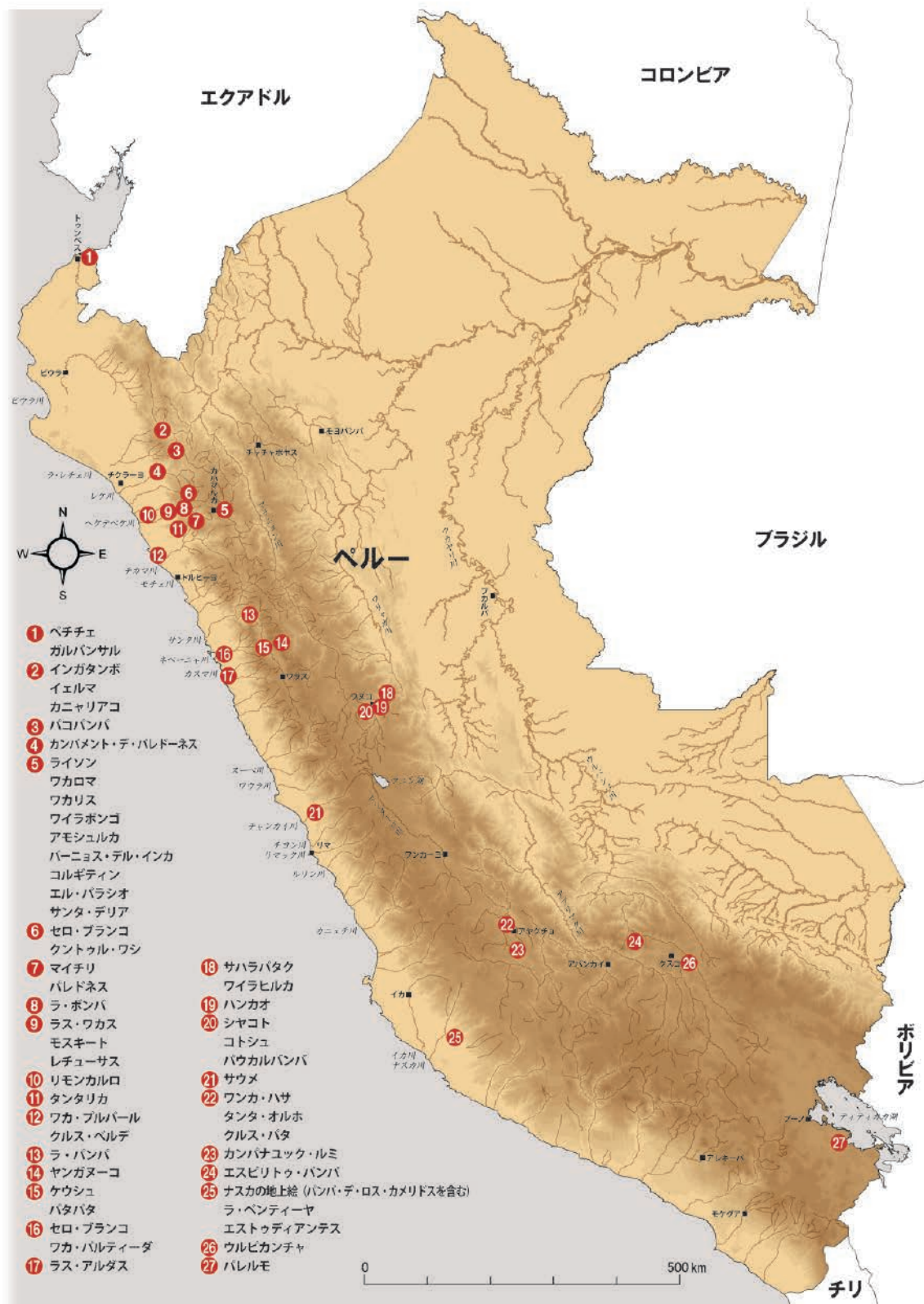


Lugar: Auditorio del Museo Antonini/ Avenida de la Cultura 600, Nasca, Ica.
Nota: Inscripciones para certificados de 8:30 a 9:15 a la entrada del evento.

会場のようす



日本調査団関連遺跡



©アンデス考古学調査60周年記念事業実行委員会 作成:伊藤裕子



日本ペルー交流年における文化遺産保護に係るシンポジウム等実施委託業務報告書

2020 年 3 月 26 日発行

編 者 関 雄二

編集・発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館
〒565-8511 吹田市千里万博公園 10-1
TEL 06-6876-2151（代表）

印 刷 株式会社 遊文舎
〒532-0012 大阪市淀川区木川東 4-17-31

